



Volunteer Center

明治学院大学

ボランティアセンター報告書

第20号

VOLUNTEER CENTER YEAR-END REPORT

2023

明治学院大学ボランティアセンター

MEIJIGAKUIN UNIVERSITY VOLUNTEER CENTER

目次

明治学院大学 ボランティアセンター報告書 第20号 2023

学長挨拶	今尾 真.....	1
ボランティアセンター長挨拶	猪瀬 浩平.....	2

I.特集

ボランティアセンター25周年イベントの企画にあたって.....	6
---------------------------------	---

II. 2023 年度活動報告

1. 2023 年度ボランティアセンター行事一覧.....	16
2. 2023 年度来室者数.....	17

<全学プログラム>

3. ボランティア大賞.....	18
総括.....	18
受賞学生報告	
大賞「プライドパレードと私の6年間」	
社会学部社会学科3年/渡邊 咲良.....	20
優秀賞「三人称から二人称へと変化する営みとしてのボランティア ～他者との出会いが紡ぐ明日～」	
社会学部社会福祉学科4年/岩倉 日南子.....	22
審査員特別賞「ボランティアとしての相談支援活動の意義」	
社会学部社会福祉学科3年/野田 慶子.....	24
審査員特別賞「青少年育成事業と平塚市の発展」	
法学部政治学科4年/本城 凜.....	26
奨励賞「Do for Others の輪を広げたい～特別なニーズがある子どもとの交流を通して～」	
心理学部心理学科3年/松本 愛未.....	28
4. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム.....	30
総括.....	30
修了生の報告	
「同じ目線に立ち、人と人との繋がりを繋ぐこと」社会学部社会福祉学科3年/加藤 詩.....	34
「多人数指導で「個」をみることの重要性」社会学部社会福祉学科3年/児玉 夏実.....	36
「問題解決の糸口を探すー他者との対話ー」社会学部社会福祉学科3年/草野 萌実.....	38
「精神障害を理解し、個人に合わせた支援とは何か」社会学部社会福祉学科4年/宮本 果央.....	40
「ボランティアは一石二鳥！ 社会だけでなく、自分の人生も豊かにできる！」	
国際学部国際学科3年/松井 遥.....	42

「興味関心・ボランティア・学問の3点の相互作用性～多文化共生とアイデンティティ～」	
国際学部国際学科4年/及川 恵美	44
「[共感]からうまれるボランティア活動」国際学部国際学科4年/菊地 陽架利.....	46
「つながりを見出す場としてのボランティア」心理学部心理学科3年/小室 閑.....	48
「私にとっての2つのDo for Others」心理学部心理学科3年/田中 大耀.....	50
「これまでのボランティア実践を振り返って」心理学部教育発達学科3年/明石 梨奈.....	52

<ボランティアセンター主催プログラム>

5. ボランティアファンド学生チャレンジ.....	54
概要/助成団体一覧/総括	
小中学生と自然体験を通して暮らしを考える.....	57
岐阜と明学の架け橋に！	60
生理用品プロジェクト.....	63
パヤオプロジェクト	65
6. いつでもボランティアチャレンジ.....	68
総括/助成企画一覧	
多文化共生ワークショップ.....	70
当事者から学ぶ認知症とともに生きやすい社会づくりプロジェクト.....	72
金山小・金山中との対面交流.....	74
華道で繋ごう地域の輪！	76
神奈川在日コリアンインカレサークル映画上映会.....	78
外国にルーツを持つ子どもの居場所作り（クリスマス交流会）	80
MSC 漁業認証の認知度向上のためのスタートアップイベント（仮）	82
デリバリーボーイズって何？akta と語る性の話.....	83
手話映画上映会&講演会	85
つながりと居場所を考えるプロジェクト～ふらっと集まることの可能性～.....	87
クリスマスお菓子でつくろう！～Create opportunity～.....	89
四万十町における鉄道を利用した地域活性化プロジェクト	90
7. 1 Day for Others	92
総括.....	92
1 Day for Others 2023 参加者数/これまでの参加者数とプログラム数.....	93
8. ボランティア・カフェ.....	97
総括.....	97
各回報告	99

9. 国際機関実務体験プログラム	109
総括	109
派遣学生活動報告	110
10. キャンパス別プロジェクト	116
TAKANAWA HOPWAY（白金校舎）	116
畑やろうじゃないか（横浜校舎）	117

III. 新入生アンケート

新入生のボランティア意識とセンターの課題「2023年度新入生ボランティア活動アンケート」	120
--	-----

IV. ボランティアセンター資料

ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま	128
2023年度委員等一覧	129
ボランティアセンター2023年度基本方針	130
明治学院大学ボランティアセンター規程	132

学長挨拶

学長 今尾 真

この4月から、明治学院大学学長に就任した今尾真です。任期4年間、本学が築き上げてきた伝統の継承と未来を見据えた新たな挑戦により、本学のさらなる発展に努めてまいります。

さて、明治学院大学ボランティアセンターは、1995年に発生した阪神・淡路大震災の支援活動に携わった学生・教職員の声をきっかけに、1998年学校法人明治学院のボランティアセンターとして開設され、1999年に大学に移管後、2023年度に設立25周年を迎えました。

この間、2015年度から大学が推進してきた「MG DECADE VISION」の3つの重点政策（ボランティア活動、グローバル教育、キャリアサポート）の1つの大きな柱として、ボランティアセンターを中心に、さまざまなボランティア活動の実践、日本赤十字社との連携や東日本大震災に際しての岩手県大槌町との協働など、国内外においてボランティア活動を展開してまいりました。ボランティア活動は、本学創設者のヘボン博士が生涯実践した、“Do for Others(他者への貢献)”の教育理念が体現するものです。

ICTが急速に発展し、世界的に利益や効率が優先され、貧富の差の拡大や紛争の激化、地球温暖化が著しく進行している現代において、本学が掲げる教育理念はより輝きを増しています。その中でも、“Do for Others”を体現する取組みの最たるものが、ボランティア活動といえるでしょう。この“Do for Others”について考え、実践することにより、一人一人が課題を発見し、それに向き合い、共に考え、自分を変え、社会を変えることが可能になります。多くの学生・卒業生・教職員や世の中の人たちが、これに参加することを期待しております。

ところで、ボランティアセンター創設25周年を迎えた節目の2023年度は、5月より、対面ボランティア活動も再開し、1 Day for Othersの実施数も90件と過去最高を計上し、ボランティア・カフェ、ボランティアファンド学生チャレンジなどのプログラムも完全復活しました。また、コロナ禍の中でも何とか維持・継続してきたボランティア・サティフィケート・プログラムに対しては、大学基準協会からインタビューを受けるなど、大学として優れた教育活動等（“Do for Others”に基づいた学生支援と社会貢献への取組み）として、高い評価を受けました（大学基準協会の公式note〔<https://note.juaa.or.jp/n/n36acecd381e0>〕に掲載）。このように、2023年度は、コロナ禍の収束を象徴するかのように、本学のボランティア活動の再生の年ともいうことができました。2024年度は、これからの5年後の創設30周年に向けて、国内のみならず国外にもより積極的に視野を広げて、本学が世界に誇れるボランティアセンターの輝かしい未来の礎創りの年としていただきたいと思います。

以上のように、ボランティア活動は、本学の伝統であるとともに、未来に向けた大きな可能性のある取組みであると考えております。大学として、また学長として、この活動をこれまで以上に拡充すべく、支援していく所存です。多くの在学生・関係者の皆さんの積極的参加により、この活動のさらなる拡大展開と発展を期待しております。

2023 年度ボランティアセンター報告書の刊行にあたり

ボランティアセンター長 猪瀬 浩平

ボランティアセンター（以下、ボラセン）の2023年度報告書をお届けします。新型コロナウイルス感染症が、2023年5月から感染症法上の5類に移行し、学生たちのボランティア活動は本格的に始まりました。ボラセンの活動においても、1 Day for Others等のプログラムに多くの学生が参加するとともに、横浜・白金の両ボラセンにも多くの学生たちが相談や、交流、対話、そして活動のために集まる姿が、日々みられるようになりました。コロナで止まっていた活動が復活し、また新たな活動も始まりました。そんななかで、見いだされた成果があり、課題があります。

2023年度のボラセンの基本方針では、「ボランティアとは、人びとが、小さい声、弱い声に耳を傾け、大きな力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらきである」と定義しています。戦争や災害、貧困や差別、分断といった問題が世界各地であふれる一方で、その問題に目を向けること、深く考えることを惑わすような、雑多なニュースやつぶやき、噂話が世界を覆っています。

そんな時代に、ボラセンは、小さい声、弱い声に耳を傾けることができますのでしょうか？大きな力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるためにはたらきかけをする人たちのよりどころとなり、その力を高めていくための支えになっているのでしょうか？

本報告書はボラセンの「今」をお伝えし、忌憚ないご意見をいただきながら、この時代にボラセンが果たすべき役割を考え、そして実行するための手掛かりにできればと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

I. 特 集

特集 「ボランティアセンター25周年イベントの企画にあたって」

猪瀬 浩平

明治学院大学にボランティアセンター（以下、ボラセン）ができたのは1998年である¹。2023年は25周年にあたる年である。

2018年には20周年のイベントを実施した。この時は、ボラセンの学生メンバー制度の見直しを考えていた時期でもあり、ボラセンが直接かかわらない形でボランティアを実践している学生たちの動きを把握することにも力をいれた。結果として、体育会や文化会の団体など、多くの団体が自分たちのやっているボランティア活動について報告し、それをパネルにまとめることができた²。このようなボラセンの視野の広がりの中、継続的な社会貢献活動についての支援金を出す「ボランティアファンド学生チャレンジ（通称 ボラチャレ）」から派生させる形で、いつでも応募できる活動支援金として「いつでもボランティアチャレンジ（通称 いつボラ）」が制度化していった。

25周年では、これ以降ボラセンが力をいれていった、大学の学びとボランティア実践の融合をテーマとすることになった。2016年度からはじまった「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケイト・プログラム（以下、サティフィケイト・プログラム）」は2022年度に公益財団法人大学基準協会がおこなった「大学認証評価」においても大学の教育理念である“Do for Others(他者への貢献)”を、多様な機会を通じて学生に深く浸透させている点、障がいのある学生や支援を必要とする学生のための支援について配慮がなされ、教育理念を具現化しているものとして、高い評価を得ている。一方で、これまで認証制度の整備に検討の力を注いできたが、学生自身がこのサティフィケイト・プログラムでどのような力をつけているのか、改めて検討する場をもってはいなかった。そのためどのような実践の指導を行うのか、や、大学との学びの指導をするのかについても、実践指導を担当するボランティア・コーディネーターと、各学部所属の運営委員にゆだねられてきた。サティフィケイト以外にも、学びと実践の融合を促進するためのボランティア大賞も2023年度まで4回行われてきたが³、毎回の審査においても、学びと実践の誘導をどのような観点で評価するのかについては、審査を行う運営委員の間でも意見の相違がみられていた。

25周年イベントでは、明学ボラセンが行ってきた、学びと実践についての取り組みについて、立ち止まって考えるとともに、他の大学の事例と比較しながら、その成果と課題を掘り下げていくことを目的に企画を行った。具体的には講義で「体験の言語化」というユニークな実践を進める早稲田大学平山郁夫ボランティアセンター（以下、WAVOC）の実践報告を聞き、議論することとなった。専任教員が所属し、授業も提供するWAVOCに対して、明学ボラセンは専任教員はおらず、事務系列となるコーディネーターが配置されている。一方、サティフィケイト・プログラムには、

¹ 1998年は学校法人明治学院のボランティアセンターとして設立されが、1999年に大学のボランティアセンターに改組された。

² 体育会系団体3団体（たとえば、アメリカンフットボール部ではスポーツゴミ拾いの活動をしている）、文科系団体3団体（たとえば、落語研究会が高齢者施設で演目披露をしている）がパネルを出してくれた。

³ 前身である「学びに基づくボランティア実践プレゼンテーション大会」を加えると計7回になる。

各学部所属の運営委員会も指導にかかわっている。教職員の配置にメリハリがついた早稲田に対して、明学は大学全体でボランティアを通した学びを生み出すポテンシャルを持っている。

明治学院大学の教育理念は Do for Others であり、ボランティアはその象徴とされる。しかし、そうであるからこそ、ボランティアをすることは奨励されても、ボランティアをすることの先に、学生自身をどのような主体として育てていくのかについての、具体的な議論は学内で深まっていなかったように感じる。今回の 25 周年イベントはそれを始めていく第一歩である。ボランティアを通じて大学の学びを深めるとはどういうことなのか、そのためにはどんな方法論で指導を行っていくのか、その先にわたしたちはどんな未来を、社会をめざしていくのか、そういったことを言語化していくことの必要性を感じている。



25周年イベント当日の様子



明治学院大学ボランティアセンター設立 25周年記念イベント

大学でボランティアをすること ～実践と学びを往復する～

明治学院大学ボランティアセンターは、2023年に設立25周年を迎えました。本学の教育理念Do for Othersの精神に則り、一人ひとりが社会課題と出会い、向き合い、共に考える中で成長し、誰もが生きやすい社会へ変えていくことを目指しています。「学ぶこと」と「ボランティアの実践」を相互に関連させて考えることを通して、大学ボランティアセンターの役割を考察します。

▼13:40～ 報告

「明治学院大学ボランティアセンターでは学びと実践をどう位置づけてきたのか」

磯野 昌子（ボランティアコーディネーター）、
渡邊 咲良（社会学部 社会学科 3年）、及川 恵美（国際学部 国際学科 4年）

▼14:15～ 基調講演

「体験の言語化について：WAVOCの取り組みから」

講師 兵藤 智佳（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター准教授）

▼15:15～ パネルディスカッション

「学びとボランティア実践とを往復するとは～言語化を意識する意味」

パネリスト 兵藤 智佳
岡本 実哲（ボランティアセンター長補佐）
砂川 秀樹（ボランティアコーディネーター）、
渡邊 咲良（社会学部 社会学科 3年）、及川 恵美（国際学部 国際学科 4年）
司会 猪瀬 浩平（ボランティアセンター長）

2024年 **3** 月 **7** 日（木）

時 間 13:30～16:40

会 場 明治学院大学 白金キャンパス 本館2階1201教室
〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

申 込 専用フォームよりお申し込みください。



手話通訳をご希望の方は2月20日(火)までにお申し込みください。

講師

HYODO, Chika

兵藤 智佳



早稲田大学
平山郁夫記念ボランティアセンター准教授

国連人口基金インターナショナルフェロー、
早稲田大学アジア太平洋研究センター助手等を経て、2006年よりWAVOC着任。
マイノリティ支援を専門として、大学生のボランティア教育に関する研究と実践を行う。

年表：ボランティアセンター1995年→2024年3月

1995年	1月 阪神・淡路大震災発生 45名の学生が自発的にボランティア団を結成し3月まで支援活動を行った。活動拠点は神戸市の賀川記念館。4月以後も一部の学生が子ども、高齢者、仮設住宅への支援活動を継続
1996年	センター化構想の提言 支援活動に関わった学生・教職員よりボランティアセンター設立の声が挙がったことを受け、森田武理事長（当時）がボランティアセンター発足を提言
1997年	4月 ボランティアセンター準備委員会が発足
1998年	5月 ボランティアセンター準備室を開設 11月 横浜キャンパス宗教部事務室内にボランティアセンター開設（学校法人明治学院として） センター長とコーディネーター1名が学生スタッフとともに活動
1999年	11月 ボランティアセンター開設記念シンポジウム「ボランティアが日本を救う」を開催 11月 ボランティアセンターを学校法人から大学へ移管
2000年	6月 「戸塚まつり」に初参加 学生スタッフによる映画上映会を企画。作品はリュック・ベッソンの「グラン・ブルー」 7月 「ボランティアセンター通信」創刊 「ノートテイクボランティア」募集開始
2001年	4月 白金キャンパスにボランティアセンター開設 当初は本館南ウイング1階情報センター入口脇に設置（※現在の12会議室）。8月に北ウイング1階キャリアセンター前へ移転（※現在の教職センター） 11月 「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」開始 ソニーマーケティング株式会社と明治学院大学による産学連携支援プログラムの先駆け。広くマスコミに取り上げられたこともあり、全国から150団体が応募し、審査により22団体を選抜し助成した。2013年まで継続
2002年	4月 「学生ボランティアスタッフ活動報告書2001年度版」刊行 7月 「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」第1回活動報告会開催（ソニービル） 11月 「地域学生わくわく交流祭」開始（横浜キャンパス） 明治学院大学体育会とボランティアセンターがそれぞれの特色を生かして地域との交流を図ることで社会貢献することを目的に実施。体育会はスローピッチ・フットサル・ドッジビー・綱引き等のスポーツによる交流、ボランティアセンターは「防災」をテーマに炊き出し・煙体験ハウス・防災に関する展示による交流をめざし、幅広い年齢層の365名の地域住民が参加した
2003年	文部科学省「特色ある教育支援プログラム」に選定（～2006年度）
2004年	8月 「NPO インターンシップ・プログラム」開始 10月 新潟中越地震発生。翌年2月ボランティア派遣 11月 設立5周年記念報告会開催
2005年	2月 「横浜国際交流・協力機関体験・研修プログラム」開始 現「国際機関実務体験プログラム」 3月 「ボランティアセンター活動報告」第1号発行 現「明治学院大学ボランティアセンター報告書」。体裁はA5版46ページ。 第2号より現在のA4版の体裁で発行 8月 「スマトラ島沖津波支援タイスタディツアー」実施 10月 「明学グッズ・ボランティアファンド」運用開始
2006年	12月 メールマガジン「MG☆ボラマガ」創刊 登録制による、毎月1回ボランティア情報配信サービス。対象は本学教職員
2007年	4月 「明治学院大学ボランティアファンド学生チャレンジ賞」開設 環境保護活動に関わる学生のボランティア精神を支援し、社会に貢献する人材と

	<p>活動を育てるために、ボランティアファンドの半額程度を上限に支援</p> <p>10月 「さくら川・明治学院大学ボランティアセンター地域連携プロジェクト」発足</p> <p>11月 「ボランティア博覧会」開催</p>
2008年	<p>1月 小田急自治会コラボレーション企画始動</p> <p>7月 「白金志田町倶楽部明治学院大学学生チーム」発足</p> <p>9月 平成20年度ボランティア功労者構成労働大臣表彰受賞</p> <p>12月 MG Natural 創刊 「ジャングルクリスマスフェスタ」開催</p>
2009年	<p>9月 白金センターの拡張工事完成 これまでの2倍の面積に拡張・リニューアルされた記念企画として、「めいがくのすきま展」「トークイベント」「白金合コン」を行った。学生・教職員・地域住民によるボランティア体験談、横の連携の構築など、活動と交流の幅を広げる成果が得られた</p>
2010年	<p>2月 戸塚の有機農家大木農園の取り組み（地産地消）に参加 2009年11月から横浜キャンパス生協食堂で大木農園で収穫された料理を提供し、大学は生協から出た残菜やキャンパス内の落ち葉を大木農園に提供する循環型地産地消を推進。趣旨に賛同した学生が、ボランティアセンターを通じて大木農園を訪問し、季節に応じた様々な農作業に携わった。この取り組みはアジア太平洋都市間協力ネットワーク（CITYNET）を通じて温暖化防止を議論する国際会議でも紹介された</p> <p>5月 シロカネグローバルフェスタ2010に参加</p> <p>6月 公開討論会「ボルネオ緑の回廊～消費者主体の生物多様性保全活動」開催</p> <p>11月 ファッションショー「ばれ☆コレ2010～融合と発見」開催 「白金アートミュージアム・俳句ワークショップ」開催</p>
2011年	<p>3月 東日本大震災発生 支援活動を希望する学生有志の声を集約し、卒業式に替わる卒業証書授与式実施日にキャンパス内での募金活動を実施。岩手県、宮城県へ教職員・コーディネーターによる先遣隊を派遣 聴覚障がい学生支援業務を学生サポートセンター（新設）へ移管</p> <p>4月 ユニセフからの要請により宮城県沿岸部へ教員・学生を派遣 14名の学生が4月4日から7月6日まで延べ19回にわたり活動。一回の活動人数は3～4名、期間が6日～14日と少人数で滞在期間が長いことが特長 「Do for Smile@東日本」プロジェクト開始 第1陣として3グループ25名の学生が岩手県大槌町で学校再開支援活動を中心に活動。32名の学生が応募するも、震災直後の被災地での活動に対する親の承諾を得られなかった学生が7名いたことに災害の大きさが感じられる ※この二つの活動が2018年12月現在で延べ2,000名に迫ろうとしている東日本大震災復興支援活動の第一歩となった</p> <p>8月 「大学間連携災害ボランティアネットワーク」発足 東北学院大学を拠点校として7月から9月まで5泊6日を基本に気仙沼市と周辺地域での活動を全10クール実施。本学は5つのクールに45名参加</p> <p>10月 1日ボランティア体験プログラム「1 Day for Others」開始 初年度は23プログラムに245名参加。東日本大震災発生により、春学期開始を秋学期開始へ延期して実施した</p>
2012年	<p>3月 大槌町と明治学院大学が復興支援活動を通じた協働連携協定を締結</p> <p>8月 岩手県陸前高田市を会場に「かわいい子には旅をさせよ」プログラムがスタート</p>
2013年	<p>4月 共に150周年を迎えた団体として「日本赤十字社・明治学院大学 共同宣言ーボランティア・パートナーシップ・ビヨンド150」を締結し、連携を開始。明学レッドクロス発足 都道府県支部との連携による奉仕団ではなく、日本赤十字社本社と連携する大学は本学が初である</p> <p>10月 台風26号による伊豆大島での災害発生に伴い、復興支援ボランティアを15名派遣</p>

2014年	<p>2月 「トルコボランティアミッション」実施。14名参加</p> <p>12月 「Gakuvo Style Fund」開始。45団体を支援 「ソニーマーケティング学生ボランティアファンド」を受け継ぐ支援活動</p>
2015年	<p>7月 「吉里吉里カルタ」が文化庁「平成27年度被災地における方言の活性化支援事業」を受託</p> <p>8月 「Do for Smile@東日本」プロジェクトへ白金高校生1名が引率教員1名とともに大槌町内でサマースクール活動に参加</p> <p>10月 「1 Day for Others」に白金高校生3名が教員2名とともに参加</p> <p>11月 タイ大学関係者20名およびタマサート大学生6名との交流プログラムを実施</p>
2016年	<p>4月 「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」開始</p> <p>4月 熊本地震発生による募金活動を両キャンパス、および戸塚駅等で実施。日本赤十字社へ義援金として寄付</p> <p>11月 サティフィケート・プログラム関連「学びに基づく大プレゼン大会」開催 ボランティアと教育の融合を体感した8名の学生が応募。体験に基づいたプレゼンテーションは熱気を帯びたものとなった</p>
2017年	<p>5月 横浜キャンパスにて学生職員協働「防災訓練」実施 「独自活動に伴う休講」日を活用し、防災訓練を実施。陸前高田セクションメンバーを中心に活動で得た知識・ノウハウを活用し、学びの機会を提供した</p>
2018年	<p>3月 白金キャンパスのボランティアセンターが10号館1階へ移転</p> <p>7月 西日本豪雨災害に伴う募金活動を実施</p> <p>9月 北海道胆振東部地震発生に伴う募金活動を実施</p> <p>11月 ボランティアセンター開設20周年</p>
2019年	<p>4月 「いつでもボランティアチャレンジ」開始 普段ボランティアセンターを利用していない学生にも使いやすい制度・ボランティアセンターになることを目指したプログラム</p> <p>9月 横浜キャンパスボランティアセンターに「ボランティアセンターコラボレーションスペース」の新設、従来スペースも「ボランティアセンターラウンジ」に改称</p> <p>9月・10月 台風15号・19号災害に伴う募金活動実施</p> <p>12月 ボランティアセンター活動報告会 ボランティアセンター所属の学生セクション/学生事務局として最後の報告会</p>
2020年	<p>2月 「災害復興支援交通・宿泊援助金」開始 COVID-19による課外活動制限が始まる 「新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴うボランティア活動についての考え方」を大学HPにて発信 2023年5月に取り下げられるまで、8回の更新を以って掲載し続けた</p> <p>5月 「おうち de ボラカフェ（「ボランティア・カフェ」の前身）」開始 コロナ禍で始まったオンラインプログラム。現在は対面方式で引き継がれている</p> <p>7月 COVID-19感染防止に伴うボランティアセンター利用制限を一部解除</p> <p>11月 「第1回ボランティア大賞」開催 学びと実践の融合を促進するため「学びに基づく大プレゼン大会」を改訂しての実施だったが、COVID-19感染予防のため初回にしてオンライン開催となった</p>
2021年	<p>8月 「新型コロナウイルス感染症に伴うボランティア活動についての考え方（大学HP掲出）」を通し、学生ボランティア団体と課外活動制限下のボランティアを考えるイベントを実施（オンライン開催）</p>
2022年	<p>9月 COVID-19によるボランティアセンター利用制限を大幅に緩和 大学授業は完全対面に戻ったがボランティアを含む課外活動の制限は続く</p>
2023年	<p>5月 COVID-19によるボランティアセンターおよびボランティア活動の制限を完全解除 高輪ポップウェイPJ、社会連携課からボランティアセンターに主幹変更</p>

2024年	1月 能登半島地震に伴う募金活動を実施 3月 1 Day for Others 年度実施数が過去最高の90件を超える 大槌町との協働連携が4期12年の協定を以って終了 ボランティアセンター25周年イベント実施
-------	---

特集頁の終わりに寄せて

報告書内、ボランティアセンター25周年記事取りまとめを仰せつかった。

私の明治学院大学着任が1999年。ボランティアセンター（以下、ボラセン）は98年に横浜校舎に開設。翌99年には法人から大学に機能移管をしている歴史がある。今更ながら自身の明学奉職歴とボラセンの歴史がほぼ一致していることに驚く。そんな期間ほぼ一致の私ではあるが、最初の配属先は横浜教務課で、そこは驚くほど多忙な部署でもあり、あわせて大学で働くことの「いろは」もない私には、創設期ボラセンで行われていたことに対する認識は生まれなかった（今更だが、期間が一致し、将来ボラセンに着任するだけに当時意識が向かなかったことを勿体なく思う）。そのため横浜教務課と学生課並びの奥にある小部屋がその時のボラセンということと、顔見知ったその時のコーディネーターが、私の住まいだった寿地区で活動されていてよくバツリ会っていた、が当初のボラセンの記憶に留まる。

ボラセンには2017年に配属された。よく寿地区で会っていたコーディネーターも、何代かの交代が為されていて既に居なかった。当時はボラセン所属の学生団体サポートがボラセン活動の主になっていて、寿地区での活動も1 Day for Othersに残すのみだった。非常に賑やかでサークルルームのようなボラセンでもあり、ボラセン着任初期、ボラセンに集う人たちとの距離感に戸惑いを覚えつつ、日々過ごしていたことが思い出される。

そして2023年は個人史としてはボラセン7年目となる。着任時ボラセンの大きなイベントと言えば「学生セクション（ボラセン所属学生団体）報告会」だったが、2023年で迎えた25周年イベントでは「大学でボランティアをすること～実践と学びを往復する～」をテーマにして遂行されている。またこのイベントは、かつての学生セクションのような団体を抱えないづくりのボラセンが実施している。2017年当時、2023年のようなボラセンになっていくなんで全く想像できなかった。その時々に着目の社会課題が変容していくように、個々人のボランティアへの向かい方や、ボラセン自体の在り方や求められ方が変わっていった結果、今のボラセンが在ると思っている。自身にとっても、変わったこと、変えていくこと、そして敢えて変えないことについて問われ続けてきたような7年だったとも思う。そしてこれまでのボラセン変遷を見ても、組織として同じような問いが繰り返し行なわれてきたと感じた特集取りまとめ作業となった。

この年表の2018年までは前次長の波多野洋行さんがまとめたものであり、2019年以降を私が追記している。設立から25年、留まらずに動き続けている明学ボラセンを感じていただけると幸いである。

（ボランティアセンター次長 高橋 千尋）

II. 2023 年度活動報告

1. 2023 年度ボランティアセンター行事一覧

4月	ボランティアセンターガイダンス開催 1 Day for Others 実施 (4 件) ボランティア・カフェ①開催
5月	ボランティア・サティフィケイト・ガイダンス開催 2023 年度第 1 回ボランティアセンター運営委員会開催 1 Day for Others 実施 (11 件)
6月	ボランティアファンド学生チャレンジ 2022 中間報告会開催 インテグレーション講座 (登録 1 年生対象) 実施 1 Day for Others 実施 (15 件) ボランティア・カフェ②開催
7月	ボランティアフェア開催 1 Day for Others 実施 (7 件) ボランティア・カフェ④開催
8月	オープンキャンパス参加 1 Day for Others 実施 (6 件)
9月	1 Day for Others 実施 (4 件)
10月	ボランティアファンド学生チャレンジ 2023 開始 1 Day for Others 実施 (19 件) ボランティア・カフェ⑤開催
11月	第 4 回ボランティア大賞開催 インテグレーション講座 (全登録生対象) 実施 2023 年度第 2 回ボランティアセンター運営委員会開催 1 Day for Others 実施 (12 件)
12月	1 Day for Others 実施 (4 件) ボランティア・カフェ⑥⑦⑧開催
1月	1 Day for Others 実施 (3 件) ボランティア・カフェ⑨⑩開催
2月	1 Day for Others 実施 (6 件)
3月	明治学院大学ボランティアセンター設立 25 周年記念イベント開催 ボランティア・サティフィケイト・プログラム修了式開催 2023 年度第 3 回ボランティアセンター運営委員会開催 オープンキャンパス参加 1 Day for Others 実施 (3 件)

2. 2023 年度来室者数

新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことに伴い、窓口への来室者数は前年度比で121.8%となった。各キャンパスでのプロジェクト（白金：高輪ホップコミュニティ活動 横浜：畑やろうじゃないか）も本格化し、定期的に決まった学生がボランティアセンターに出入りするようになったことも来室者増の一因と考えられる。一方、オンラインでの相談等は前年度比で75%と大幅減となったが、長期休暇期間中の学生相談や、各団体との打合せなどでの利用ニーズは継続しており、効果的に活用されている。今後は、来室者数に合わせた環境の見直しなども行っていく予定である。

2023 年度月別来室者数

単位：名

月	2023 年度			＜参考＞2022 年度		
	(白金)	(横浜)	(オンライン)	(白金)	(横浜)	(オンライン)
4	92	313	26	50	322	72
5	75	357	12	67	283	28
6	125	415	8	57	328	23
7	94	401	19	45	263	19
8	13	12	20	6	22	38
9	44	121	20	54	103	19
10	83	369	10	62	313	16
11	80	207	12	68	283	13
12	64	172	4	41	117	8
1	34	138	6	27	137	2
2	19	84	21	12	31	4
3	37	21	33	38	36	10
計	760	2,610	191	527	2,238	252

3. ボランティア大賞

(1) 総括

大学ボランティアセンターの特徴として、「学び」と「実践」をいかに結び付けていくかを意識している点が挙げられる。特に、本学では「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティファイケイト・プログラム」をはじめ、様々なプログラムにおいてもその点を重視した取り組みが行われてきた。

ボランティア大賞は、そうした観点から学生それぞれの成果を発表してもらい、学内外に発信していくことで、教育理念である Do for Others の具体化を図ることを目的に 2020 年度に開始された。

今回二次審査に進んだいずれの学生からも、ボランティア実践を積む中で、悩みながら、また苦労を重ねながら、大学の学びからヒントを得たり、理解を深める様子が丁寧に言語化されていた。特に授業を通じて他者へのまなざしを改めて考え直すなど、寄り添い方を深化したり、実践をより広げて俯瞰してみることができたことを話す学生もいた。いずれの学生も実践を積むことによる自分自身の変化を意識し、それを言葉として発表につなげていたが、そのこと自体、ボランティア大賞へのエントリーがよい機会となったと思う。

募集要項は、以下の通りである。

応募資格	<p>本学在学学生（院生含む）による活動であり、応募は個人によるものとする。 ※科目等履修生、団体としての応募は除く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育理念（Do for Others）の具現化を図る活動であると言えること ・応募者は一次審査通過の場合、必ず二次審査時の発表を行なえること ・申請者が明治学院大学入学後の活動を審査対象とする
申請期間	9月20日(水)～10月5日(木)
広報	7月下旬からポートヘボン、ホームページニュース欄、ポスター掲示等を通じて実施
審査	<p>(1) 一次審査 10月11日(水)～10月23日(月)</p> <p>(2) 二次審査 11月11日(土)</p> <p>(3) 最終審査 11月11日(土) 審査員により合議を行い、各賞を決定した。</p>
審査結果	<p>【大賞】 「プライドパレードと私の6年間」 渡邊 咲良(社会学部社会学科3年)</p> <p>【優秀賞】 「三人称から二人称へと変化する営みとしてのボランティア ～他者との出会いが紡ぐ明日～」 岩倉 日南子(社会学部社会福祉学科4年)</p> <p>【審査員特別賞】 「ボランティアとしての相談支援活動の意義」 野田 慶子(社会学部社会福祉学科3年) 「青少年育成事業と平塚市の発展」 本城 凜(法学部政治学科4年)</p> <p>【奨励賞】 「非行少年の円滑な社会復帰を目指して」 柳 克月(法学部法律学科3年) 「Do for Others の輪を広げたい～特別なニーズがある子どもとの交流を通して～」 松本 愛未(心理学部心理学科3年)</p> <p>※学年は応募当時</p>

今回講評として、多くのプレゼンが大変明瞭で伝えることを意識している点や原稿を読まないで自分の言葉が上手に伝わる発表をしていた点を評価する審査員もいた。また、活動の内容も自分の地域の中で、自分が主体となり取り組む事例や、制度のはざままで課題を抱える人を対象とする活動や、継続的で丁寧な取り組みなど「人びとが、小さい声、弱い声に耳を傾け、大きな力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらき」をしてきた点を高く評価する声が多かった。

4回を数えるボランティア大賞であるが、毎回この目的に沿った発表がなされ、新たな気づきを必ず与えてくれる。まだまだ認知度が低く、せっかくの発表が一部の人たちしか聞けていないことが残念である。次回は、さらに応募はもちろんであるが、その発表をする場にも多くの方が集まってもらって、それぞれの気づきを持ちかえるものにしていければうれしい限りである。

(ボランティアコーディネーター 菅沼 彰宏)



(2) 受賞学生報告

【大賞】

プライドパレードと私の6年間

社会学部社会学科3年 渡邊 咲良

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私がボランティア活動を始めたのは、高校1年生の頃である。高校1年生から現在まで、ジェンダーやセクシュアルマイノリティに関わるボランティア活動を行ってきた。きっかけは、中学3年生の時YouTubeで視聴したトランスジェンダーの方の動画だった。女性として生まれ、現在は男性として生活している方の動画で、最初は面白おかしく、トランスジェンダーやLGBTQについて語っている動画を楽しく視聴していた。しかし、次第に動画を見て、当事者たちの生きづらさを知り、自分にも何かできることはないかと考え、高校1年生の時に初めて地元のセクシュアルマイノリティのコミュニティのボランティアに参加したことが活動を始めるきっかけとなった。その後は地元札幌のプライドパレードのボランティア・実行委員を経験し、大学進学後は現在まで「東京レインボープライド」のメンバーとして活動している。

2. ボランティア実践の内容

活動を始めた当時、「アライ」と呼ばれる、当事者ではない、支援者の立場で運営に携わっていた。しかし、当時はアライとして活動に参加する人は少なく、団体の中で唯一のアライだった私は、テレビへの出演やイベントの登壇を通して当事者と非当事者の架け橋となるような啓発活動をしてきた。大学入学後は東京レインボープライドの若者チームに所属し、Instagramの投稿作成やYouTube等のSNSを通し、LGBTだけではなく性のグラデーションにフォーカスした発信を行っている。現在は、東京レインボープライドのより運営に近い立場から、毎年4月に行われるイベントを中心に活動を行っている。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

一般的には(?)、大学等での「学び」から何かしらの社会問題に興味を持ち、そのアプローチの方法として、ボランティア活動を選択する人が多いという印象があるが、私の場合は学びの前に実践をしてきた経験が多く、現場での実践の経験はあるけれど、学問的な知識や専門的な知識が足りないという課題があると感じていた。また、ボランティア活動に対して、自分自身の興味関心を満たすために行っているという感覚が大きく、自分が活動している意義や目的を明確に言語化することができないという弱みもあった。

そこで、私は大学ではジェンダーやセクシュアルマイノリティについて学ぶことを決め、本学の社会学部社会学科で関連する授業を履修してきた。大学での学びを経て、自分の活動の必要性を発信するときに裏付けとなる根拠を説明できるようになったり、昔から活動してきた先人たちへのリスペクトの気持ちを強く抱いたりすることができた。

4. 今後の課題、方向性

まず、今後の方向性としては現在所属している東京レインボープライドでの活動を社会人になっても継続したいという目標がある。この団体では、様々な分野で活動している社会人の先輩方が多く活躍しており、私もボランティア活動や啓発活動を本業としてではなく、自分が社会人として獲得したスキルを持って、何かしらの還元をボランティアの団体にできるような人でありたいと考えている。

この活動がメインの対象としているのは、LGBTQ+の当事者やその周辺だが、何か一つのマイノリティに対する寛容性が高まることで、他のマイノリティ、例えば人種や国籍に対する寛容性も高まり、

日本全体としてより暮らしやすい環境になると考えている。

5. 私にとっての Do for Others

私にとっての Do for Others とは、他者を介して自分自身が成長できたり、自分自身の活動に価値を感じることができることだと考える。直訳すると誰かのために、という言葉だが、私は総合的にこれまでのボランティア活動を通して、誰かに何かを還元したり提供したという感覚よりも、自分自身が活動で携わった人や経験から得たものの方が大きいと感じているため、このように考えた。

ボランティア活動は、ただ学生生活を送っているだけでは得られない、かけがえのない経験や出会いがある素敵な時間の使い方だと思うので、1人でも多くの学生に経験してほしいと思う。

【優秀賞】**三人称から二人称へと変化する営みとしてのボランティア～他者との出会いが紡ぐ明日～**

社会学部社会福祉学科 4年 岩倉 日南子

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

高校時代に、こども病院に入院しているきょうだい児との遊びのボランティアに参加しており、入学前からボランティアそのものに関心を持っていた。大学の先生や友人からの紹介で始めたものもあれば、自ら見つけた活動もあり、この4年間で困窮者支援、不登校や家庭困窮などの困難を持つ子どもたちへの学習支援・訪問支援、明治学院中高大一貫パヤオプロジェクト2021、UNHCR 難民映画祭など様々な活動に参加してきた。

2. ボランティア実践の内容

学習支援では家庭の経済的困窮や不登校などの背景を持つ子どもたちと地域の公共施設で週に二回程度一緒に勉強やお話をする活動を行った。訪問支援では不登校の中学生の家庭に週に一度訪問し、勉強やおしゃべり、時には相談に乗るなどをして多くの時間を共にしてきた。

困窮者支援においては既存のアウトリーチ活動への参加に加えて、ボランティアセンターのいつボラ制度を利用し「つながりと居場所を考えるプロジェクト～ふらっと集まることの可能性～」の企画・実施を行なった。

パヤオプロジェクト2021では、コロナ禍で対面の活動が難しく、メンバーのモチベーションを保ちつつ、パヤオに関心を持つ仲間を増やすための活動の在り方について模索し、活発に活動した。現地パヤオセンターとの交流会の傍ら、活動の周知のために横浜と白金の学食での「パヤオミールプロジェクト」、横浜図書館での展示企画、国際学科教授 重富真一先生によるタイの現代史と農耕社会の講演会、元国際学部教授 齋藤百合子先生によるタイの児童労働や人身売買に関する講演会などを運営・実施した。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

大学での机上の勉強とボランティア活動は、非常に相互補完的な関係性であることを日々実感してきた。勉強して得た知識や視点が現場での他者への理解や支援を支えてくれ、現場で感じたジレンマや喜びなどが勉強する原動力となっていた。

学習支援・訪問支援の活動で、私たち大学生は中学生にとって先生でも家族でもない存在であることに意義を感じてきた。先生や親よりも年齢が近いからこそ共感できることがあり、ちょっと先をいった先輩だからこそ話せることもある。その中で「人と人が関わることで生み出されるポジティブな変化」を経験してきた。自分に寄り添ってくれて、他愛のない話で盛り上げられる存在、自分の考えをシェアして共感してもらえる場、そっと自分の決断に対して背中を押してくれる経験、それらがこれからの人生の選択や挑戦を後押ししてくれるものになっていくのだと推察する。こうした他者理解の支えとなったのは、ソーシャルワークの授業で学び得た視点であった。

困窮者支援活動の中での当事者の方との関わりからは「机上の学びから知り得る現場は、ほんの少しでほんの一面でしかない」「出会うことで顔の見えない他者から顔の見える隣人になるのだ」ということをひしひしと感じた。こうした出会いが自分自身に「ボランティア」の意味を問い直してくれ、応答責任を感じ、学び深めることに突き動かされていった。

4. 今後の課題、方向性

4年間の大学での学びとボランティア活動の中で様々な困難を持つ人たちとの出会いがあった。常に格差や分断に歯痒さを感じながら、自分の無力さに対し「大学生の自分にできることは何か」「社会がよりよい場所になるために必要なアクションは何か」を常に問い続け、できることを積み重ねてき

た。そうした営みの中で「人々がこの世に生まれ落ちて、健康に生きるとは何か」という問いを持つようになった。今世界には、生まれ落ちた場所によって医療のアクセスが制限され、健康を享受できない現状がある。より多くの人々が権利として健康を享受できる社会の実現に向けて、また生きがいを持って日常生活を営める社会を作るために大学院で研究し、健康の社会的決定要因やメンタルヘルスの研究を通して、人々の well-being の向上のために尽力したい。

5. 私にとっての Do for Others

「他者との出会いによって心が揺さぶられて、応答責任を感じ、できる時にできる範囲で行動に移すこと」だと考える。世界には様々な課題が山積しており、一人で全ての課題に応答することは不可能である。しかし関心を持ち続けることや日常の中での小さな行動は可能である。その考えのもと日常生活の中でも意識的に小さな行動を積み重ね、ボランティアとして様々な活動に参加し、時には運営側として多くの人々の心に届くような活動を生み出そうと努力してきた。今後も様々な現場に赴き、多様な価値観に触れて、「Do for Others」とは何かを常に自分自身に問い続けてきたいと思う。

【審査員特別賞】**ボランティアとしての相談支援活動の意義**

社会学部社会福祉学科 3年 野田 慶子

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私は、中学3年生の時に人にはなかなか言いづらい悩みを抱えるようになり、そのせいで、学校の人間関係について悩むようになった。しかし、当時は誰に相談していいかわからず、ただ1人で悩みを抱え、ストレスが大きくなるばかりだった。そんな時に、学校で配られたSNSの相談先ですべてを打ち明け、相談した時に、「話してくれてありがとう」というただ一言に救われた経験がある。「こんな私でも、生きていいんだ」と思うことができ、自分に少し自信が持てるようになったからである。そこから自分を徐々に受け入れられるようになり、今がある。その経験から、自分も助けを必要としている人の力になりたいと考え、相談に乗る側として、今は活動している。

2. ボランティア実践の内容

現在、若草プロジェクト（以下、若草PJという）とボランティア・フレンド・メディア（以下、VFM東京という）という2つの団体で、相談支援活動に携わっている。

若草PJは、主に土曜日18:00～21:00に御茶ノ水駅の事務所に行き、相談員と監修者5名が集まり、1人30分の時間でLINE相談を行う。また、X（旧Twitter）でネガティブなツイートに対して「いいね」やリポストをすることで、助けを必要としていそうな人へのアウトリーチ活動により、LINE相談につなげる活動をしている。

一方、VFM東京では、メールやXで担当を任されている人と個別でつながり、相談に乗る活動をしている。今までで5人担当をして、現在は4人とつながっている。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

VFM東京の個別相談の際に、自傷行為と希死念慮に悩むAさんを担当したことがある。最初は、「なぜ自分を傷つけるような行為をするのか」とその子のことが理解しがたかった。そんな時に、ソーシャルワークの理論と方法Aの授業で学んだ、「状況の中の人」という理論が、Aさんを理解する際に、役に立った。状況の中の人とは、個人と環境は相互に作用するものとして、個人と環境の広い視点から支援を行う考え方である。この考えによって、Aさん個人には、ストレスコントロール不足の課題があり、Aさんの環境面には、家庭環境の悪化などの原因があり、人と環境が相互に作用することで自傷行為や希死念慮を引き起こしていることがわかった。そして、相談者が抱える課題に焦点を当てるのではなく、相談者のストレングス（強み）を聞きながら探し、その強みを肯定することで相談者自身の力を引き出す、ストレングスモデルを活用することで、話を聞きだしながら相談に乗ることができた。また、相談を受ける上で大切にしていることとして、Aさんの話に例えると、支援者側の「自傷行為をやめさせよう」とする気持ちが強くなると、うまく相談に乗ることができない。そういった一方的関係ではなく、相談に乗る側もする側も、自分の見方を相手の見方を通して見直していく。相手を通してお互いに成長していく、循環的關係性を築くことを意識している。また、必要に応じてインフォーマルやフォーマルな相談先を紹介すること。そして、相談者自身に、抱えている悩みや問題を自ら解決できる力があるとボランティア自身が信じ続けることが大切だと考える。

4. 今後の課題、方向性

私が考えた今後の課題は、長く、安心して活動できるボランティア活動を行うための工夫と配慮だと考える。この課題を考えた理由は、ボランティア大賞で発表した際に、審査員の皆さんからの講評で、「ボランティア活動から心身に疲労をためやすいのではないか」という懸念の声が挙げられたからである。今まで私は、相談支援のボランティア活動の必要性や、活動のやりがいなどを重視していて、「相談員の心のケア」の難しさに焦点を当てて深く考える機会を作ってこなかったことに、その講評をいた

だいたいに気付かされた。実際に、会員の中には、共感疲労で個別相談の担当から外れたという事例もあり、1対1での活動だからこそ自由度が高く、相談時間の確保の難しさを改めて考えるようになった。そして、ボランティアが安心して活動できる環境作りや配慮について、より考えるようになった。

そのため、ボランティアが安心して活動できるために、より一層、相談支援活動のための学びのある研修会の実施を行いたい。そのために、今後は授業で学んだことを研修会に活かして、月1回の研修会を学びの多い、充実した研修会にしていきたい。研修会では、担当の会員が自分の興味関心のあるテーマをもとに行う。今までは、相談者に多い不登校やいじめなどのテーマをもとに、インターネットの情報をメインに調べていた。今後は、大学で学んだことと結びつけて発表を行うことを意識することで、より実践的な技術や知識の習得を目指していきたい。研修会や大学で学んだことを取り入れることで、日頃から大学の授業と活動を結びつける習慣を作りたい。

また、現在オンライン開催で行っている研修会を対面での開催にすることによって、会員同士での交流の機会を作り、一人ひとりが悩みや負担を抱え込まずに、相談しやすい環境づくりを行いたいと考える。

5. 私にとっての Do for Others

私にとっての Do for Others とは、共に助け合いの精神を持つことだと考える。よく、Do for Others は自己犠牲の精神に結び付けて考えられることが多いと考える。しかし、自己犠牲を重視し、美化することで、ボランティアにかかる負荷が増え、肝心のボランティア活動が継続できなくなってしまうと考える。よって、ボランティア同士で声をかけあい、共に協力して助け合いながら活動を盛り上げていくこと。そうすることで、ボランティア活動の質も上がり、全体的な良い波及効果があると考えるので、Do for Others は共に助け合いの精神を持つことだと考える。

【審査員特別賞】**青少年育成事業と平塚市の発展**

法学部政治学科4年 本城 凜

1. ひらつかの活動を始めるきっかけ

私は、高校生の時に参加した「ひらつかスクール議会」がきっかけで明治学院大学法学部政治学科を目指した。2020年4月、憧れの明学生になったものの、新型コロナウイルスの感染拡大によって思い描いていた学生生活を送ることができない現状に対して、悩みは尽きなかった。コロナ禍では、対面で人に会うことができないという影響で、今まで気軽に作れていたコミュニティを作ることの難しさを思い知ることになった。そして、大学で自分にとって居心地の良い居場所を見つけることに苦戦していた。そんな時、私はなぜ明学生になりたかったのかを思い出し考えた結果、原点回帰として大学生でも地元の活動を継続することを決意した。大学4年間を通して、再び熱中できるものを見つけることができ、それらの活動が派生して、多くのコミュニティに参加することができている。自分の居場所や熱中できるものが見つからず、毎日悩んでいた私を救ってくれたのは、自らの行動によって生まれた地域の活動だった。それからは、平塚市での地域活動を通して平塚の良さを市内外へ伝え、それを後輩に波及し、街を良い方向へ変化させることを目標にして活動をしている。

2. ひらつかの活動内容

私は、高校1年生の時に生徒会本部の顧問の先生から「ひらつかスクール議会」に誘われたことがきっかけで、現在の進路を選択した。「ひらつかスクール議会」は、平塚市に在住在学する高校生がフィールドワークを通して平塚市の現状を知り、課題をグループで話し合い、解決策を見つけ、最終的に市長へ政策提言をするものである。私が街に関わったことがきっかけで、街への見方が変わり、街の変化に気づいた。そして、高校3年生の進路選択の際に、地域コミュニティについて勉強がしたいと思い、明治学院大学法学部政治学科を目指し、入学した。その後、大学1年生から現在に至るまで、地域課題を見つけ、地元である平塚市をより良くするために自分に何ができるのかを考える活動を続けている。「ひらつかタウンミーティング」では、中学生の議論をサポートするファシリテーターとして4年間活動し、「七夕学生委員会」では70年以上続く湘南ひらつか七夕まつりを若い人の力で盛り上げ、平塚市の良さを発信することを目的としている。また、「平塚市観光協会」では小学生に対して平塚の良さを伝えながらものづくりができるワークショップなどを通して若い世代へ地域の良さを伝える活動をしている。これらのボランティア活動を通して、私は地域の課題解決を行いながら、若い人に平塚の良さを知ってもらい、行動へ移せる人になってほしいという願いを持ち、日々活動を続けている。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

明学での学びは、平塚での地域活動と大きなサイクルを持って、良い循環が生まれていると感じている。政治学科の授業では、課題発見力を身につけることができた。また、平塚での課題解決のために活動をしている「ひらつかタウンミーティング」のような地域活動において、政治学の実践の場として考えることができている。さらに政治学演習というゼミ活動では個人研究を通して、地域コミュニティ衰退の原因を知り、解決策を見出すことができた。平塚での活動をする上で、地域コミュニティ衰退は肌で感じてしまうため、ゼミ活動での問題意識は地域活動を行っていなければ気づくことができなかった。そして、若い世代にさらに地域での活動をしてもらいたい、平塚が好きな若者を増やしたいという気持ちがより強くなった。

4. 今後のひらつかと私

私は、高校生の時に参加した「ひらつかスクール議会」に参加したことがきっかけで、地元である

平塚に対しての郷土愛が深まり、明治学院大学の法学部政治学科で地域コミュニティについて学びたいという進路が決まった。大学4年間を通して「ひらつかタウンミーティング」や「七夕学生委員会」、「平塚市観光協会」など多くのボランティア活動を行ったが、自分の行動をきっかけにして、街が変わったことに気づいた時にまちづくりの面白さを感じている。地元である平塚市がこれから先も「人と人」が触れ合い、地域課題を解決し、さらに面白い街になってほしいという願いがあり、そのためには、地域での活動を通じて自分の居場所や好きなものが見つかり、郷土愛のある後輩を育成することが大学生活最後の目標である。

5. 私にとっての Do for Others

自らの居場所を探すために再開した地域の活動が、結果として誰かの居場所を作ることができ、街について考えることができる若者を増やすことに繋がっていた。「他者への貢献」とは、自分自身について考えることから始まると考える。コロナ禍で居場所がなかった私が、原点を振り返って居場所を作り出すことができたように、周りの関わった中高生たちが、「平塚っていいな」「平塚ってなんか面白いな」と思ってもらえて、さらにコミュニティを作ることができているからである。明治学院大学での学びは、地域の活動に直結している。平塚市についての現状を知り、課題を見つけ、解決策を見つけるサイクルが、ゼミ活動への考え方の基本にもなっている。



【奨励賞】**Do for Others の輪を広げたい～特別なニーズがある子どもとの交流を通して～**

心理学部心理学科 3年 松本 愛未

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私は、大学入学以前から様々なボランティア活動をしていた。例えば、中学生の時は自分の属する自治会のイベントの手伝いをし、高校生の時はボランティア系の部活動の手伝いをしていた。私の活動の原動力は、「その自治会に属しているから」「募集しているから」と、受動的なものであり、活動も漠然とした気持ちで行っていた。しかし、高校生の時、公園で子どもたちと遊ぶボランティアで、ある子どもが他の子を仲間外れにしているのを何もできず見るしかできないことがあった。その時初めて、自分がボランティア活動をする意味は何だろう、本当に自分は人のために何かができるのかという疑問を抱き始めた。

そのような経緯があり、大学では真面目に、自分にとってボランティア活動は何かを考えることにした。そのために、「ボランティア学」「ボランティア市民活動論」等ボランティアに関する授業を履修したり、定期的な活動をしているボランティア団体「りもぐるみ」に入ったりした。

2. ボランティア実践の内容

大学在学中に、「1 Day for Others」で農村体験や「芝の家」でのボランティアスタッフをしたり、献血をしたりと、様々なボランティア活動をしていた。そのなかでも、ここでは「りもぐるみ」での活動のことを取り上げたい。

りもぐるみは、岐阜県の小・中学校の児童生徒と、zoom を用いて遠隔交流するという活動をしている。今まで2人の児童生徒と交流したが、2人とも母語が日本語でなく、学校生活の中で何らかの困難を抱えていた。そのため、zoom 交流を学校に来る一つの楽しみにしてもらったり、楽しみながら日本語に触れられるようにすることが、活動の目的である。具体的な活動内容は、日常生活での出来事を共有する雑談が多いが、児童生徒に書いてもらった日記や、国語の教科書を音読してもらったり、沢山日本語に触れる活動もしている。活動自体は2021年9月から始まっており、私は2021年11月から2023年3月まで、中学校に通う生徒(Aさん)と、2023年4月から現在まで中学校に通う生徒(Bさん)と交流している。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

大学での学びとりもぐるみの活動を結び付けて考えることで、主に3つのことを学んだ。それは、ボランティアの姿勢、支援で持つべき視点、活動で役立つ技術である。その中でも、ボランティアの姿勢について考えたことを述べる。

Aさんは、生まれてから12年間も海外に住んでいたため、慣れない日本の文化で不適應感がうまれてしまっていた。そこで私は、ボランティア市民活動論1A、ボランティア実習、ボランティア市民活動論1Bの授業で学んだ、支援活動は一方通行でなく、双方向の働きかけだという姿勢を意識してAさんと交流した。具体的には、日本と海外の文化のズレを認識し、Aさんに日本文化を押し付けるのではなく、Aさんが知っている文化を尊重するようにした。例えば、Aさんから、マクドナルドのハンバーガーは日本と海外では味が異なると教えてもらった時、Aさんは「前に住んでいた国のハンバーガーの方が好き」と言っていた。そこで、「私は日本のハンバーガーが美味しいと思うけど、Aさんは前住んでいた国のハンバーガーが好きなんだね、国によって味が違うのは面白いね。」と話をした。文化に基づく自分の習慣や考え方が尊重されることは、Aさんがりもぐるみと安心して交流することに繋がったと考える。また、りもぐるみへ感じた安心感は、違う文化を持つクラスメイトを受け入

れ、Aさんがクラスで楽しく過ごせるようになったことに繋がると考える。

4. 今後の課題、方向性

これからは、りもぐるみの中だけにとどまらず、もっと視野を広げ、社会問題の解決に貢献できる活動がしたい。りもぐるみの活動で出会ったAさん、Bさんだけでなく、クラスの人と関わることや授業についていくことに困難を感じ、学校に馴染めずにいる子どもは沢山いると考える。また、その問題につながる要因は、日本語使用の困難、特性に限らず、多様で、複合的であると考え。今までのボランティア活動で経験したことや、専攻している心理学での学びを活かし、アプローチしやすい観点から、自分に何ができるか考えていきたい。

まずは、卒業論文を書くことから始めたい。Bさんは、りもぐるみとの交流の場を居場所だと感じることで、安心して人と関わったり、自信を持てるようになっていたりして、より良い学校生活を送れるようになった。Bさんやりもぐるみに限らず、居場所感を得ることがより良い学校生活に繋がり、「自分にもできることがある」と希望を持って生きることが出来る子どもが増えるような研究をしたい。

5. 私にとっての Do for Others

Do for Othersの気持ちが連鎖していくことで、幸せや希望の広がりに繋がるものであると考える。私がAさんのためにしたことが、Aさんが「自分のために何かをしてくれる人がいる」と嬉しく思うことに繋がったと考える。さらに、Aさんが「自分も誰かのためにできることがある」と思えるようになって行動したことが、AさんのDo for Othersになっていると考える。例えば、Aさんが楽しそうにしている姿に私が嬉しくなったり、クラスの手伝いをしてくれてクラスの人々や支援員の方がありがたく思ったりしている。

そのため、Do for Othersを繋げていきたいと思ったら、まず自分が受け取ったものを思い出すことが必要だと考える。自分自身、親から受けた愛情、先生が教えてくれたこと、友だちが仲良くしてくれたことがあったから、されて嬉しかったことを他の人にしていきたいと思って、ボランティアについて真剣に考えることに繋がっている。そして、その考えから参加し始めた活動によってAさんやBさんが楽しそうにしてくれることが嬉しく、それがまた人のために何かしたいという原動力に繋がっている。これからも、そのように自分が感じた気持ちを大切にすることで、Do for Othersの輪を広げたい。

4. 明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム

(1) 総括

ボランティアによる学びを認証する明治学院大学独自のプログラムとして、2016 年度より開始した本プログラムは、本年度 6 期目の修了生を輩出した。2020 年度からのコロナ禍による活動制限を受けてきたにも関わらず、2023 年度は過去最多の 15 名の修了生を送り出すことができた。

本プログラムは、全学の正課教育と連携し、大学での学びとボランティア実践を融合することで、本学の教育理念“Do for Others”を具現化し、その理解と実践を深め、共生社会の実現に資する力を身につけることを目的としている。サティフィケート（修了証）の取得には、入学年度より 5 年以内に、3つの要件：(1)ボランティア実践（入学後 135 時間以上）、(2) インテグレーション講座（全 4 回）の受講、(3)ボランティア実践と結びつけた科目の単位修得（3 科目以上）、を充たす必要がある。

(1) の要件については、2020 年度のボランティアセンター運営委員会において「コロナ禍により活動時間が確保できなかったことを考慮して、135 時間に満たなくても 67 時間以上のボランティア活動の実績があれば最終報告書を受け付ける。その場合は別紙で申告書を添付して現場でのボランティア活動に代わりどういった取り組みをしたかを申告すること」という決定がなされ、2023 年度もこれに従って認証がなされたが、適用を受けた 3 名はいずれもボランティア活動時間 100 時間を越えている。

2023 年度修了生は、全体に活動時間数の多い学生がいるだけでなく、第三回インテグレーション講座での発表や最終報告書の内容においても、多種多様なボランティア実践を各自の大学での学びと結びつけて、さらに豊かな学びを生み出していることが優れた言語化によって表現されており、制度としての充実が成果として現れてきたと考えられる。

3 月に開催したボランティアセンター 25 周年イベントでは、「大学でボランティアをすること～実践と学びを往復する～」と題して、本プログラムの特徴や意義を明確化すると同時に、一方で、課題としてあげられてきた取り組む学生数の伸び悩みや、参加を阻んでいる要因について議論を行なうことで、制度全体の見直しを行なった。

(ボランティアコーディネーター 磯野 昌子)

(2) 2023 年度スケジュール

日時・場所	内容
3月	大学から新入生に郵送される配付物「明治学院大学ボランティアセンタープログラムのご案内」の中にサティフィケートについて記載、大学ホームページで告知
4月17日(月) 4月20日(木) 対面&オンライン Zoom 13:00-13:15	ガイダンスの実施（ボランティアと教育の連携についての意義、プログラムの概要を説明）
5月29日(月) 5限 5月30日(火) 4限 5月31日(水) 3限 9月29日(金) 5限 対面	第一回インテグレーション講座 対象：登録1年生 【テーマ】「ボランティア実践から学ぶとは」 【内容】これからボランティア活動を行うにあたって必要な心構えや、活動報告書の書き方、その意義について 【講師】猪瀬浩平（ボランティアセンター長 教養教育センター教授） 菅沼彰宏（ボランティアコーディネーター） 磯野昌子（ボランティアコーディネーター） 砂川秀樹（ボランティアコーディネーター）

<p>10 月</p>	<p>登録3・4年生の第4回インテグレーション講座におけるプレゼンの指導 (コーディネーター)</p>
<p>11月11日(土) <ボランティア大賞> 9:30~13:30 白金校舎1101教室</p> <p><第2・3・4回インテグレーション講座> 13:40~15:00 各教室(学部別分科会)</p> <p>①1355教室 文学部/心理学部</p> <p>②1356教室 経済学部/国際学部</p> <p>③1357教室 社会学部/法学部</p>	<p>第2・3・4回インテグレーション講座 対象:全登録生</p> <p>【内 容】 午前の部:「ボランティア大賞」参加と聴講(全登録生) 午後の部: 1~4年生の全登録生が学部ごとに分かれ、3・4年生は自らの「ボランティア実践と大学での学び」の成果をプレゼンテーションした。1・2年生は、ボランティア実践の現状を報告し、運営委員の先生とコーディネーターからアドバイスを受けた。</p> <p>【講 師】(敬称略)</p> <p>①文学部/心理学部 教員:梅澤礼(文学部)、木村優里(心理学部)、長谷部美佳(教養教育センター) 担当:磯野昌子(コーディネーター)</p> <p>②経済学部/国際学部 教員:犬飼佳吾(経済学部)、坂本隆幸(国際学部)、岡本実哲(ボランティアセンター長補佐、経済学部) 担当:菅沼彰宏(コーディネーター)</p> <p>③社会学部/法学部 教員:金圓景(社会学部)、波多江久美子(法学部)、猪瀬浩平(ボランティアセンター長、教養教育センター) 担当:砂川秀樹(コーディネーター)</p>
<p>2024年2月28日(水) オンライン Teams</p>	<p>ボランティアセンター運営委員会(最終報告書の確認)</p>
<p>3月5日(火)</p>	<p>認証委員会 教員:学長、副学長、各学部長、教養教育センター事務局長、ボランティアセンター長 陪席:学長室長、ボランティアセンター次長、コーディネーター</p>
<p>3月13日(水) 11:00~12:00 記念館1階小チャペル</p>	<p>修了証授与式 修了生/認定対象者15名(うち欠席者5名は後日別途授与)</p>

(3) 2023年度プログラム登録者数

	学部						合計
	文	経済	社会	法	国際	心理	
2020年度登録生 第4回インテグレーション講座 の受講者					1		1
2021年度登録生 第4回インテグレーション講座 の受講者		1	7		2	4	14
2022年度登録生 第3回インテグレーション講座 の受講者	2	1	2	0	0	1	6
2023年度登録生 第2回インテグレーション講座 の受講者 ※()内は第1回インテグレーション講座の受講者	1 (2)	3 (4)	6 (12)	3 (4)	5 (8)	7 (9)	25 (39)
合計	3	5	15	3	8	12	46

(4) 取り組みの様子

登録生は「manaba」を通して毎月の活動報告書を提出し、コーディネーターからのフィードバックを受けている。

2023年度に新たに登録した学生は39名であった。そのうち11月の第2回インテグレーション講座を受講してレポートを提出し、1年目を終えた登録生は25名である。本年度は、9月に追加募集を行なったことで、例年よりも1年目の登録者数を増やすことができた。

また、従来は、上級生とは個別に1年目生のみを対象にしていた「第二回インテグレーション講座」を、本年度より、1年目生も上級生と一緒に学部別の分科会に参加したことで、本プログラムの進め方や最終的な活動の方向性への理解が促されたと思われる。

2022年度登録生のうち、11月の第3回インテグレーション講座を受講してレポートを提出し、2年目を終えた登録生は6名である。

最終報告書は2021年度登録生14名、2020年度登録生1名からの提出があり、それぞれの学部運営委員により専門性を深める指導がなされ、3月認証委員会において全員の認証が認められた。3月13日に授与式を行い、副学長より一人一人に修了証が手渡された。

また、サティフィケート登録生全46名の内、4名がボランティア大賞に応募し、4名とも入賞することができた。

(5) 修了生のタイトル一覧

社会学部社会学科3年	渡邊 咲良*	「ボランティア」の概念が変わった大学でのボランティア活動
社会学部社会福祉学科3年	加藤 詩	同じ目線に立ち、人と人との繋がりを繋ぐこと
社会学部社会福祉学科3年	野田 慶子*	長く、安心して活動できるボランティア活動のためには、充実した研修会などの勉強会や他の会員と関わる機会を作ることが必要である

社会学部社会福祉学科 3年	児玉 夏実	多人数指導で「個」をみることの重要性
社会学部社会福祉学科 3年	草野 萌実	問題解決の糸口を探す—他者との対話—
社会学部社会福祉学科 4年	岩倉 日南子*	三人称から二人称へと変化する営みとしてのボランティア～他者との出会いが紡ぐ明日～
社会学部社会福祉学科 4年	宮本 果央	精神障害を理解し、個人に合わせた支援とは何か
国際学部国際学科 3年	松井 遥	ボランティアは一石二鳥！ 社会だけでなく、自分の人生も豊かにできる！
国際学部国際学科 4年	及川 恵美	興味関心・ボランティア・学問の3点の相互作用性～多文化共生とアイデンティティ～
国際学部国際学科 4年	菊地 陽架利	「共感」からうまれるボランティア活動
心理学部心理学科 3年	松本 愛未*	Do for others の輪を広めたい
心理学部心理学科 3年	小室 閑	つながりを見出す場としてのボランティア
心理学部心理学科 3年	田中 大耀	私にとっての2つの Do for Others
心理学部教育発達学科 3年	明石 梨奈	これまでのボランティア実践を振り返って

* 上記、渡邊咲良、野田慶子、岩倉日南子、松本愛未の4名は「明治学院大学ボランティア大賞」に論考を掲載済のため、ボランティアサティフィケート報告集では未掲載とさせていただきます。

同じ目線に立ち、人と人との繋がりを繋ぐこと

社会学部社会福祉学科3年 加藤 詩

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

2年生の時に、社会福祉実習を行ってから、実際に当事者の方と関わる機会が欲しいと思い、参加したフードバンクがボランティア活動を始めるきっかけだ。現在、高齢者福祉分野のゼミに所属しているが、高齢者分野に興味を持ったのは、2年次実習の際に地域ケアプラザに行ったことだ。高齢者分野という括りだったが、デイサービス、地域交流スペース、地域ケア会議など幅広い人と関わる機会があった。

デイサービスの実習中に、認知症の方と関わった。初対面の私のことを受け入れてもらえるのか不安な中、1時間自由な時間が与えられた。その時に、目の前にいる利用者さんと目を合わせて心も体も向き合う姿勢を学んだ。バーステックの7原則では、「受容の原則」に当たる。高齢者の方なので、人生観をはじめ生きる上で大切にしている信念があった。認知症の方は全てを忘れるわけではなく、こちら側の受け取り方や話の引き出し方によって「意図的な感情表現の原則」も実現されると学んだ。

2. ボランティア実践の内容

3年間の大学生活の中で、中長期的なボランティア活動として取り組んできたものに「ロヒンギャの子どもたちへの学習支援ボランティア」がある。思い返してみれば、小学生の時に仲が良かった友達がサウジアラビア出身だった。海外出身の子どもが幼少期から異国で育つとはどのようなことなのか考えさせられた。この時から10年経ち、社会福祉学科に入学した。

コロナ禍真ただ中に、毎週1時間半、オンライン上で日々の勉強で足りていない部分の埋め合わせと子ども達の日常を尋ねていた。ロヒンギャの子ども達は、ある地域に集まって生活していた。この背景には、90年代から2000年代初頭にミャンマーでの迫害から逃れ、日本に難民としてやってきたという経緯がある。子ども達が日本に来た経緯をどこまで把握しているのか、詳しくは分からないが、心の内を打ち解けてくれた時に「おばあちゃんに会いたい」と呟いていたことがあったので、苦しみを抱えながら生活をしていることは間違いないと感じていた。話を聞く限り、母国に帰る予定はないとのことだったので、異国の地「日本」で生活していくという覚悟が感じられた。

ロヒンギャ族はイスラム教徒なので、断食があり、この期間は食事が制限される。学校では周囲の子どもが食べているものを食べられなかったり、ルーツとするものが異なるので、大変な思いをすることもあったのだと知った。習い事に関して話した際、ロヒンギャの友達が多いとの話もしていたので、コミュニティがそこまで広くないことも分かった。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

上記のボランティア経験から、潜在化している悩みやニーズがあるのではないかと考えるようになった。今後の日本は高齢化がますます進むと同時に、コミュニティの衰退が止まらなくなると考える。地域福祉論の授業でも学んだが、地域の課題は見えづらく、周囲から見たら困っていると見えるものでも、本人はそもそもニーズを感じていないこともありえる。特に日本は少数者を排除してきた歴史がある。人種、出身、年齢問わず、安心して助け合いが出来る地域作りが必要だと思った。

ひと地域に集まって暮らし、学校外でのコミュニティもロヒンギャ族間の関わりで完結することが多いということは、地域が誰でも安心して暮らせる受け皿にはなっていないということだ。インターン先でも、各国から様々な事情で引っ越してきた外国人がいるが、必要としている機関と繋がっていないケース、そのための人材が不足しているという話を聞いた。このボランティアでの経験は、今後自分が人と人の繋がりを居場所を作っていくという将来の夢に繋がった。

4. 今後の課題、方向性

3年生になり、将来の道を考える上で、学生の中に海外にルーツを持つ子ども達と関わった経験は非常に大きかった。現在の目標は、地域活動や在住外国人の生活支援、多文化共生の推進に携わることだ。制度が上手く使えない人が抱える個別的なニーズへの向き合い方を考え続けていきたい。特に都内で災害が起こった時に、言語の壁から逃げ遅れを防ぎ正しい情報を伝達する「災害時のボランティア活動」に関心があるので、今後取り組んでいきたい。ボランティアや実習で出会ってきた人は、周縁化されてきた人が多くいた。これは本人が悪いのではなく、社会が変わらなければならないことだと思う。

普段生活している中では、同世代と関わるのがほとんどだった。ただ、ボランティアの中で出会った人は出身地も年齢もルーツも異なる人が沢山いた。ボランティア同士での関わりで新たな発見もあったので、視野を広げて新たな世界に一步飛び込んでみることは続けたい。実際、ボランティアをやりたくても何から始めればよいか分からなかった時に、1day という敷居が低いボランティアを1回経験したことで、次のステップに進めた。今度は自分が新たな道を作り、人との繋がりを増やしていく場の提供が出来る存在になりたい。

5. 私にとっての Do for Others

私にとって「Do for Others」とは、自分が関わりを持つ団体やコミュニティを外から俯瞰するのではなく、その内側に入り、自分を当事者化していくことだと考える。テーマに挙げた同じ目線に立つとは、社会福祉で言えばワーカーや支援者、日本語支援ボランティアで言えば先生という認識をされたいことだ。〇〇さんというように、役職や肩書ではなく一人の人間として認識をされた時に、誰かの為に動くことが出来たと思う。

多人数指導で「個」をみることの重要性

社会学部社会福祉学科3年 児玉 夏実

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

自分が障害児水泳クラブで活動を始めたのは知り合いの紹介である。学生時代から競泳に取り組み、他のスイミングスクール（集団指導）でコーチのアルバイトしている経験も生かせ、また子どもとの関わりの実践をより深く学ぶことができると感じたからである。

2. ボランティア実践の内容

クラブ（個別指導）では、障害をもつ子どもの自立支援を基盤とし、水泳というスポーツを通して、プールに来るまでの電車やバスの訓練・着替え・トイレの生活能力の向上や時間や順番を守る・コーチの話を聞くといった集団能力も身に付けられる。私は2年間の活動の中で、主に着替えの支援や水泳指導を行った。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

まず根本的な障害の理解として、2年次に受講した「障害者福祉総論」の内容を想起し活動した。障害に関わらず、選択肢を狭めない、その人らしい生活ができるようにするにはどういった行動が自分にはできるのかを考えた。水泳指導の中では、1年次の「社会福祉学」の講義で学んだことをいくつか活用した。例えば、声の説明理解が困難な子に対しては、ゆっくりお手本を見せたり、色を使って左右判断の手助けをした。また、親御さんが日々の生活の中で使用しているテクニックを参考にすることも多々あった。道具の工夫により、少しずつ水に慣れて、だんだんと4泳法が泳げるようになって行く様子は、近くで見ていて、感激した。練習時間以外での子どもたちとの他愛のない話や、親御さんとの日常生活に関しての話しから指導案のヒントを得ることができ、より子どもたちの人となりを知る機会となった。コーチも障害の知識があり、保護者との定期的な面談を通して、深く、長い期間で子どもたちの成長と自立を支援した。

対照的な2つの活動を通して、特に障害理解を深めて行くうちに、私は多人数指導の中にいる配慮が必要な子への支援の難しさを感じた。支援者側の知識の差、全体時間の制限、他の生徒の数などといった相違点が挙げられる。2つの活動の本来の目的と存在意義、業務内容が異なるが、障害を持っていても集団指導を選択することにそれぞれが意味を見出している。その実現のために私が工夫したことは3つある。目線を合わせること、名前を積極的に呼ぶことと、説明を全体と個別とを繰り返すことである。

1つ目の「目を合わせること」は、昨年実習を行った高齢者施設でも施設職員のきまりとなっていたくらい大切なことで、同じ言葉を発しても相手が抱く印象が変わる。特に子どもが私たちを見る高さはきっと想像の数倍の高さである。また、水の中は陸上と環境が異なるため、例えば水で1人で浮くという初歩動作にも、先生との信頼関係が絶対的に必要になってくる。その構築のためにも、目線を合わせて話すことは大切であると感じ実践した。

2点目は、「名前を積極的に呼ぶこと」である。名前を呼ぶことの1番よい点は、障害に関わらず誰でも呼ばれた人が必ずといっていいほど反応してくれることにある。指導者が名前を覚えられるようになることに加え、お互いに呼び合って、信頼関係を深めることができる。ふとした時に子どもの方から名前を呼ばれると、自分の言葉が届いていたのか、すこしはわかってくれていたのかとうれしい気持ちになる。

最後は、「動きの説明を全体と個別で繰り返すこと」である。全体では時間の制約もあって、口頭説明と1回の見本で終わってしまう。だが、中には普通に話を聞いていなかったり、じっと聞くことが難しかったり、ゆっくり見本を見せてやっと理解できる子もいる。そのため、それぞれを指導するとき、それぞれにあった言葉のチョイスや擬音語、体を使ってわかってもらえるように努める。この声掛

けは、障害児クラブから吸収したのも沢山あり、例えば、「足をもっと伸ばしてほしい」時に「もっとのばして」「ピンと」「お箸のように」「きれいな足で」などいくつか伝え方を考えている。同じ事柄でも理解速度には個人差があるので、どうすれば伝わるのか言語以外のコミュニケーション方法があることも、2つの活動をやってきての収穫だと感じる。

4. 今後の課題、方向性

多人数を相手にする時、障害など関係なく、みんなそれぞれが捉え方や認識の仕方が異なるという事実を頭に入れておくことが「個を見ていく」上での大前提だと思う。目に見えない静かな障害は、他者からみてわかりにくく、本人からの「わからない」という発信もない。そのまま全体の授業が展開していくと、1回の遅れがどんどんと大きなものになる。素直で個性が爆発する子どもの時期の関わりや声掛けというのは、その先の将来に大きな影響を与える。障害も1つの個性としたときに、それらの個性をつぶすのか生かせるのかは、どうありのままの個人をみていけるのかにかかっており、そのためにも、出会ってからではなく今の準備の内から人との関わり方法について沢山の選択肢をもっておくことが今後関わる上で大切であるのではないかと考える。自分の今までの経験を通して、一時的な支援ではなく、長期的な目線で多人数指導においての配慮について更に考えを深めていきたい。

5. 私にとっての Do for Others

私は「他人と思うおもいやりの実現」であると考えている。
相手がどんな個性を抱こうと、正直専門的な知識がなかったとしても、知ろうとする、関わろうとする姿勢で解決できることはたくさんある。いろんな知識をもった大人よりも子供のほうが同等に接する場面が多いのは、寄り添う気持ちの表れだと思う。他者のためになにか自分を犠牲にするのではなく、それぞれができることをできる範囲でやっていければ、「Do for Others」が達成できると考える。

問題解決の糸口を探す―他者との対話―

社会学部社会福祉学科3年 草野 萌実

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私は、高校の卒業論文でひとり親家庭の貧困問題を取り上げ、ひとり親家庭が抱える問題、また、貧困に陥ってしまう一因に「時間的制約」があることを述べた。時間的制約が解消すれば、時間的制約からもたらされる諸問題の緩和につながり、貧困から脱することができると考えていたのである。しかし研究を進めていくと支援というのは、人と人が対面し、対話をするのが重要であることを実感していったのである。同時に私は、ひとり親である親御さんや、ひとり親家庭で暮らす子どものこと、日本の現状について調べ、知った気になっていたのだと気が付いた。当事者の声も聴かず、ニーズがわかることなどないのである。そのため、大学では、座学に限らず、高校当初から抱えている問題意識の糸口を探すためにも、さまざまな考え、生き方をされてきた方々と直接かかわり、リアルな声を聴きたい、直接学びたい、という思いからボランティアを始めることにした。

また同時に、私は手話サークルに所属した。手話サークルを通じ関わった様々な属性を持つ人との出会いや手話の習得をするべく勉強に励むことで、当初から持つ問題意識に影響を与えるだけでなく、障害理解や組織運営の難しさ、相手を尊重するとは何なのか、役割期待や葛藤など、多くの経験と学びを与えていただいたと考えている。サークルでの学びや習得した手話を外部の活動にも活かしたいと考え、様々な人と出会い、学びを深めることができた。

2. ボランティア実践の内容

私は、明学の学生に手話を教える手話団体 orange に所属し、活動を行った。1日のできる手話講座を企画し、挨拶や簡単な自己紹介を会話の中で使い、楽しみながら手話を覚えられる企画の立案を行った。前年度よりも参加者が増え、活動後のアンケートでは「また参加したい」と書いてくださった方も多く、手話サークルでの学びを生かすことができた嬉しさを感じた。また当時の私は、手話の教え方に悩んでおり、たまたま母校である高校に遊びに行った際に、先生から、「手話に興味のある生徒がいるのだけれど、手話を習った経験がないから教え方がわからない」というお話を聞き、自分の悩みと一致したことから、手話講座を開催しませんか？と持ち掛けてみたことがきっかけで、年に1~2回ほど、母校で手話講座を開かせていただいている。

母校で開催された文化祭で、手話の掲示物を作りたいという声を聴き、携わらせていただいた。その際、「そもそも手話を掲示物にしていいの？」「私たちが勝手に…」との相談を受けたのである。私は、なぜそう思うのか一緒に考えることから始めることにした。すると次第に、「困っている人の役に立ちたい」「デフの方とお話したいから手話を勉強したい」という思いから、まずは掲示物を作ることに至ったという経緯を聞くことができた。日常的に手話を用いる方にとって、手話はツールであり見世物ではないと感じるのではないかと、手話や聴覚障害者の世界を知らない人が勝手に展示物を作って嫌な気持ちにならないだろうか、と考えたことから発せられた言葉だったのである。

私自身は聴覚に障害はなく、大学から手話を学び始めただけの人であるのだが、障害の有無にかかわらず、「誰かに何かを伝える」時にどうしたら伝わるのか考えることにこそ意味があると考えている。そのため、母校で開催した講座では、手話を用いても用いなくても相手に伝わるように考えることのできる「ジェスチャー伝言ゲーム」を取り入れた。自分が分かった内容が次の人に伝わるとは限らない。より分かりやすいジェスチャーを加えたり、もしくは情報を省いたり、相手の表情を見ながら考える必要があるのだ。懸命に体を動かし、伝えようと必死になる姿を見ると、日頃声に頼りすぎているな、と感じたり、耳で得る情報はなんて楽なのだろうと思ったりした。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私は多くの活動を通して、“相手を思う気持ちも含めて手話（対話）なのではないか”と考えている。

相手のことを知り、信頼関係を構築し、本音でぶつかったからこそ身のある活動を行うことが出来たのである。

そして私は、このような活動は全て学科の授業で学ぶソーシャルワークに通じているのではないかと考えるようになった。基礎演習、実習指導で学んだ、バーステックの7原則を取り上げたい。これはソーシャルワーカーのあるべき姿をまとめたものである。その中の1つに「受容」がある。これは、ソーシャルワーカーがクライアントの逸脱した態度や行動といったクライアントの現在の姿をありのままの姿で感知し、受け止めることを指している。「許容」でもなく「容認」するわけでもなく、「受容」することに意味や価値があり、私はここに、支援をする側、受ける側という考えではなく、相互扶助の力を感じるのである。活動でお会いした様々な人と対話を重ね、他者を知ることから始まり、それぞれの特性をお互いに受け止め合って構築した信頼や仲間意識は一生ものであると感じるのである。そして、将来目指しているソーシャルワーカーとして求められる姿を実践から学ぶことができたのだ。

4. 今後の課題、方向性

今後は机上での学びを実践への学びへ展開していきたいと考えており、4年次で行うソーシャルワーク実習において、高校当初から興味関心のある生活保護を受給して生活している方々の暮らしや自立支援、意思を尊重する支援、ソーシャルワーカーの関わりを学びたいと考えている。そして、「ソーシャルワーカー」という職種につくことを目標に自己研鑽を怠らないようにしたい。

5. 私にとっての Do for Others

私は「他者への貢献」を通して、私自身がエネルギーや多くの学びを与えていただいたと感じるため、私にとっての Do for Others は、他者を理解し・理解し合うためのツールであり、“対話を通じた営みである”と考える。

精神障害を理解し、個人に合わせた支援とは何か

社会学部社会福祉学科4年 宮本 果央

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私が、このテーマを設定したきっかけは二つある。一つ目は、大学生活ではじめてボランティアを始めるまで、精神障害という分野と関わった経験がなかったためである。特別養護老人ホームでの実習・アルバイトを通じ、実際にさまざまな高齢者の利用者と関わり、現場で働く職員さんと話すことで、座学よりも、多くの実際の現場の学びをすることができた。このことを踏まえ、当事者の方や、当事者の方々の支援をしている方々に直接関わり、お話を聞くことで、精神障害をはじめとする相手を理解することができると思った。

二つ目は、私の希望する進路である。私は、社会福祉職として、相手を支援するにあたって、出会うクライアントは、環境、背景、考え方など、それぞれ異なることから、その際に、クライアント自身に合わせた支援を行うことが大切だと考えた。ボランティアを通じて、多くの作業所のメンバーに出会い、それぞれの個性を知るといった学びを深めたいと思った。

2. ボランティア実践の内容

私は、精神障害者の就労支援B型の作業所にて、ボランティア活動を行った。活動の内容としては、荷札づくり、切手の仕分け、入浴剤の装飾作り、ボールペンの組み立てといった内職作業の補助、作業所周辺の地域清掃、郵便配達の下請けをしたチラシの仕分けである。また、この作業を行うなかで、作業所のメンバーとのコミュニケーションを行った。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

ボランティアを始める前は、作業所はもっと暗い雰囲気だと想像していた。また、実際に精神障害者の方と関わる前は、コミュニケーションをとることが難しいと思っていた。しかし、実際に関わると、人生や自分、人のこと、さまざまな面において、これまでの経験から深く考えている方が多く、多くの学びをさせていただいた。精神障害を通じて、その人を見るのではなく、まっすぐその人を見たうえで、得意なこと、不得意なことを知り、助け合うことの大切さを実感した。

このような経験を通じ、得られた学びのうち特に二つを挙げる。一つ目は、社会に居場所があることの大切さである。利用者の多くが、精神障害により辛い経験、孤独になった経験をもつことを知った。特に、ある利用者は、精神障害により家族と疎遠になり、孤独な生活を送った経験をお話ししてくださった。その方にとって、作業所での活動は、仲間との会話、自分の得意を活かした活動による達成感により、社会に自分を必要とする居場所があることを実感するとのことだった。また、「一生懸命貯めた工賃で、好きなものを買えることがとても楽しい。」と笑顔でよくお話しする姿が、とても印象的だった。この利用者との関わりを通じ、社会に居場所があること、自分自身にやりがいや達成感のある活動があることは、生きがいにつながると考えた。

二つ目は、生活保護における自立のあり方についてである。利用者の多くは生活保護を受給していた。生活保護は自立を助長する制度である。メンバーの活動へ向き合う姿を見て、規則正しい生活の中で、作業所に通い、やりがいを持って働き、趣味や人との関わりを楽しむことも自立のあり方の一つであることを学んだ。「昔、精神障害で家族や友人、周りの人と疎遠になって、困窮していたが、今では作業所でやりがいを持って働くことができている。」という話を伺い、自立のあり方はさまざまであり、特に、自立に向かって、小さなステップを一つずつ、確実に踏んでいくことが、大切であると感じた。

これらの学びを通じ、結果として、ボランティアだからこそできることについて、私の考え方が変化した。相談員などの支援者としての関係とは違い、ボランティアの活動内容は、職員よりもメンバーの活動内容に近い。作業時間内は、一緒に過ごす時間が多い。そのお陰で、多くのメンバーの経験談を伺う機会や、また私が作業内容を教えてもらう時間を過ごすことができた。ボランティアとして、メ

ンバーを支援することを目的とするのではなく、助け合う関係性を築くことができることを学んだ。この作業所では、ボランティアが私一人だった。そのため、初めてのボランティアであった私は、ボランティアとしてのあり方がわからないまま、活動を始めることとなった。しかし、この経験を通じ、私なりのボランティアとしてのあり方に辿り着くことができた。

4. 今後の課題、方向性

ボランティアは、助けることだけに目を向けるのではなく、助けられること、学ばせていただくことができることに気付かされた。また、実際に関わることで、相手について、またそれを取り囲む背景、環境、考え方を知ることができる。そして、さまざまな特徴や特性を持った利用者に関わり、それぞれ、相手に寄り添ったコミュニケーションのあり方について学んだ。

今後、社会福祉職として働く。そのなかで、障害、環境、考え方、さまざまな背景を持つクライアントと日々関わらと思う。その時には、まず、その人自身を知る姿勢を大切にしたい。そして、クライアントそれぞれのステップと一緒に考え、生きがいを持って暮らすことができるように支援したい。

また、ボランティアとして活動した経験を通じ、次は、ボランティアと連携する立場として、ボランティアの役割が、利用者、支援者にとって、互いの力を活用する支援の過程において、必要不可欠であり、柔軟な存在であることを理解し、より良い支援の形を模索したい。

5. 私にとっての Do for Others

支援者と利用者の関係を超え、助け合うことを意味すると考える。ボランティアを行う前は、ボランティアは他者のために尽くすことだと考えていた。しかし、活動を通じ、ボランティアから利用者へ支援する過程で、私が力をもらったり、活動を助けてもらったりするがたくさんあった。また、利用者の協力により、当事者の目線を知ることができた。このような経験から、私における「Do for Others」は、ボランティアを通じた支え合いであると考えます。

ボランティアは一石二鳥！ 社会だけでなく、自分の人生も豊かにできる！

国際学部国際学科3年 松井 遥

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私がボランティア活動を始めたきっかけは、2018年に起きた西日本豪雨である。被害の様子を毎日ニュースで見ているうちに、自分も助けを求める人のために出来ることをしたいと思うようになった。その後ボランティア団体に入り、様々な活動していくうちに、やりがいや活動を通して人と繋がる楽しさに気づき、大学でも積極的にボランティアをしようと考えた。

2. ボランティア実践の内容

私は3年間で、教育に関わるボランティア活動に多く参加した。最も積極的に関わったのが明治学院大学公認のボランティアサークルである、JUNKO Association だ。大学2年生の夏休みにはベトナムに渡航し、現地でボランティア活動を実践できたことが印象深い。また、外国にルーツを持つ子どもたちへの学習支援を行っている、わたぼうし教室にも1年間ボランティアとして参加した。私はそれまで、ボランティアというと海外への支援のイメージが強かったが、わたぼうし教室での経験を経て、国内にも支援を必要とする人々が多くいることに気づかされた。他にも横浜YMCAの語学学校に通う中国人の方にビデオ通話をしながら日本語を教えるなど、コロナの影響にも負けず、オンライン上でも対面でも様々なボランティア活動を行った。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

わたぼうし教室とJUNKO Associationの活動には深い繋がりがある。私はもともと発展途上国の教育に関して興味があったため、大学ではそれについてボランティア活動をしたと考えていた。そこで、外国にルーツを持つ子どもたちと学習できる環境(わたぼうし教室)に魅力を感じ、ボランティアを始めた。わたぼうし教室に通う子どもたちは、日本の子どもたちと変わらないように見えたが、責任者の方によると、中には外国にルーツを持つがゆえに家庭に問題を抱えている子もいると伺った。その事実を知ってから、子どもたちを勉強面でしかサポートできないことをもどかしく思うようになった。

その後、大学2年生の夏休みに、サークルで所属しているJUNKO Associationの活動でベトナムに渡航できる機会が訪れた。私は、わたぼうし教室での経験を経て、より海外の教育環境に興味を湧いたため、渡航を決意した。ベトナムでは、現地の小・中・高校・孤児院あわせて8校を訪問し、学習環境の調査や衛生検査を行った。現地を訪れたことで、私の視野は大きく広がった。ベトナムは発展途上国であるため、貧しい街並みを想像していたが、街に住む現地の子どもたちは綺麗な制服を来てキャラクターが描かれたカラフルなリュックを背負って、コンクリート造りの敷地の広い学校に通っていた。一方で、山の中の学校の環境は街の学校に比べて劣悪であり、支援が必要なところは多くあると思ったが、想像以上に学習環境が整っていたというのが率直な感想だった。上記のようにわたぼうし教室と得た経験をJUNKO Associationでの活動に繋げることができ、両者の活動を通して国内外の教育に関してより一層関心を抱くようになった。



(上記の写真はどちらも、ベトナムの小学校を訪問したときの様子)

4. 今後の課題、方向性

卒論で、フェアトレードタウンについて研究しようと考えている。1 Day for Others で逗子市のフェアトレードタウンのボランティア活動に参加したことをきっかけに、フェアトレードへの興味が深まった。もともと発展途上国の教育について興味があり、大学 2 年の頃からアフリカ地域研究のゼミに所属している。そこで発展途上国の経済とフェアトレード商品の関係について学ぶ機会があり、フェアトレードについて興味を持った。逗子市で開催されたフェアトレードのイベントにボランティアとして参加した際に、「フェアトレードタウン」という、自治体が積極的にフェアトレードに取り組む地域があることを知り、さらに深く学びたいと思ったため、卒論の研究テーマに決めた。現在はフェアトレードタウンやフェアトレードに関する先行研究を読んで知識を深めているが、公開されている論文が少ないのが難点である。そのため、今後はフェアトレードのイベントなどに参加し、自ら体験することを通して知識を吸収していきたいと考えている。

5. 私にとっての Do for Others

私にとっての「Do for Others」とは、他者への貢献を通して自分自身の可能性を広げることだ。自分のボランティアのテーマに「ボランティア活動は社会だけでなく、自分の人生も豊かにできる」という表現を入れたように、私は自分自身の活動を振り返って、ボランティアは他者だけではなく自分の人生も豊かにできるものだと感じた。「Do for Others」の精神もそれと同じように、他者へ貢献しようとする行動することや考えることが、巡り廻って自分を成長させ、可能性を広げることにつながっているのだと思う。

興味関心・ボランティア・学問の3点の相互作用性～多文化共生とアイデンティティ～

国際学部国際学科4年 及川 恵美

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私は小さい頃から父と母が中国語で会話しているのを見、他の国の人と交流することに興味を持ったことから、大学生になったら留学生のサポートや沢山の国際交流に挑戦しようと思っていた。そのため、主に「国際交流」をキーワードに、バディ制度で留学生のサポートをしたり、日本語の授業にボランティアとして参加したりした。2年次に履修した「多文化共生各論1,2」も当初は外国にルーツを持つ子どもたちに日本を学習支援ができるという「国際交流」の興味から履修を決めたが、その授業を通して移民・難民問題や在日外国人についてさらに学びたいと思うようになった。それが、阿部ゼミへの所属や交換留学をするきっかけになった。

私はこの4年間を通して、興味関心・ボランティア・学問は相互に影響を与え続け、どれもがその他の要素を活性化させるきっかけになっているということを知った。興味関心から始まったボランティアが学問につながり、それが次のボランティアへの挑戦や新しい興味として広がっていると感じる。

2. ボランティア実践の内容と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

主に日本語ボランティアに注力した。特に2年次に履修した「多文化共生各論1,2」では、わたぼうし教室に行き、「外国にルーツを持つ子どもたち」に向けて日本語学習支援を行った。私はそこでの学習支援を通して、日本での在住歴が長いというのは必ずしも日本語を理解しているということにつながらないのだと気づいた。私は、小学生の頃、同学年にフィリピンルーツの友達が3人おり、彼らの日本語が徐々に上達しているのを見て、勝手に日本での生活に慣れたからなのだと勘違いしていた。しかし、わたぼうし教室で担当した子どもの中には、6年以上日本に住んでいても、漢字の読み方がわからず、会話をして日本語を理解しているか怪しい子もいた。彼らは学校生活や家庭の事情により心の傷を抱えている場合があり、クラスメイトや学校の先生による心ない発言や表情が、彼らの感じたこと、思ったことを正直に言えないという環境にさせているということを知った。

また、授業では難民認定率が1%未満であることや(2022年度は2.0%(難民支援協会))、難民として認められなかった場合には「不法滞在者」とみなされ出入国管理局の施設に収容されること、たとえ「仮放免」になったとしても彼らには「移動の制限」「許可延長のための出頭」「就労の禁止」といった、制限があることを学んだ。これらの学びを通し、自身が長年日本に住んでいるのにもかかわらず、無知であったことにショックを受けた。ここから移民・難民問題・在日外国人・多文化共生に興味を持ち始め、所属しているゼミや留学の志望動機にもなっていった。

演習Aでは在日外国人の歴史について焦点を当て、指紋押捺制度など日本が在日外国人に対しどれほど差別的な法に取り組んできたのかを学び、演習2Aでは移民難民の現状や日本人の外国人に対する態度の冷たさが法で表されているということを知った。

多文化共生各論3では、在日外国人の現状について学び、彼らの共通言語は英語ではなく「やさしい日本語」であることを学んだ。「やさしい日本語」を話すためのポイントを意識しながら、当時ボランティアとして参加していた日本語実践初級の授業で活用した。

留学先のサンフランシスコ州立大学では、移民に対する法制度や多民族が集まる街・サンフランシスコの歴史を学んだ。留学前は、アメリカは多民族国家であるため、移民に対する法制度が寛容的であると思っていたが、Politics of Immigration in USという授業を通して、多民族国家であるがゆえに強い偏見が残っていること、そして厳しいルールが存在することを知った。多文化共生という点では自身のルーツについて改めて考える良いきっかけになった。サンフランシスコは、英語のほかにもスペイン語や広東語が聞こえるような様々な人種・民族が集まる街であった。だからこそ、1人の人間として人を見ているということ、ルーツの言葉話せるか話せないか関係なしに自身のルーツを大事にしており、かつ自身のルーツを誇りに思っていることを感じ取れた。これらの経験を通して、私は自身が台湾にル

ーツを持っているということに対しよりプラスに感じられるようになった。私も自身のルーツを大事にしたいと思った。

4年目である2023年度は、日本語ボランティアを継続しつつ、留学中に中国語のスピーキング力向上により自身のアイデンティティが変化した経験から、「アイデンティティの形成と変容」をテーマに卒業論文を書いた。研究を通じ、アイデンティティの形成には周囲の環境や自身の今までの経験が大きな役割を果たしていること・言語能力も必ずではないがその形成に関わっていることに気付いた。外国にルーツを持つ人にとって、日本社会の中で生活することは声を上げづらく、困難が付きまとう。もし、彼らに向けた支援がより活発になれば、日本に住む人々のアイデンティティの可能性を広げ、多様性が認められるような社会に繋がる一歩になると考えられる。

3. 今後の課題、方向性

私は台湾にルーツがあり、中国語を話すことができなかった経験やハーフとして日本に住み感じてきた違和感から、外国にルーツ持つ人および在日外国人の日本社会における生きづらさを他人よりは理解できると考えている。彼らは、日本で暮らしていく中で、言語面をはじめとした様々な悩みを抱えている。しかし、同時に彼らは「やさしい日本語」という共通語を習得している可能性がある。実際、現在のアルバイト先でも英語を母語とせず「やさしい日本語」を使用するお客様もいる。接客業という性質上、丁寧な接客が求められると同時に敬語を使うことが多いが、それはかえって理解を難しくさせる。そのため、「やさしい日本語」を使っていると分かった時点で、「はっきり・みじかく・さいごまで」を徹底した「ハサミの法則」で接客したい。

また、日本はもはや「単一民族国家」ではなく、「多文化共生社会」に向けて新たなフェーズに入ったと言える。これから先、職場内でも日本国外出身の人が増えると考えられる。仮に言語面は問題なかったとしても、彼らは日本社会で生きていく中で周りに理解者がいないという孤独感や不安を抱えている可能性がある。そのため、常に相手の文化を尊重する意識を持ち続けながら、コミュニケーションを取り続けることを意識していきたい。私にとっての Do for Others とは、自身のルーツを大切にし、アイデンティティを尊重し合える環境を作ることである。

「共感」からうまれるボランティア活動

国際学部国際学科4年 菊地 陽架利

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私が大学に入学した時期は、新型コロナウイルスの影響で大学へ通うことができなかった。私は少しでも何か大学生らしいことがしたい一心でボランティア活動を始めた。最初はオンラインでの活動がメインだったが、学年が上がるにつれ、対面での活動にも参加できるようになった。

2. ボランティア実践の内容

- ・ Language Exchange program
- ・ 1 Day for Others
- ・ 特定非営利活動法人 JUNKO Association

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

私はプログラムに参加した3年間、JUNKO Associationの活動に最も力を注いだ。JUNKO Associationは明治学院大学のボランティアサークルの1つであり、特定非営利活動法人でもある。ここでは主に学生が主体となり、ベトナムとミャンマーに教育支援を行っている。私は、ベトナムとミャンマーで学生が買い付けた商品をイベントで販売し、資金を得ることに力を入れていた。

私は活動を通して、「相手の心を動かすことの大切さ」を実感した。なぜなら、イベントでは外部の方に団体の活動内容やベトナムとミャンマーの状況を伝える必要があったからだ。最近参加したイベントの例として、白金祭が挙げられる。私がリーダーを勤めていた時の白金祭はコロナウイルスの感染拡大以来、初めてのものであった。コロナ前にイベントに参加したことのある先輩はほぼ卒業しており、右も左もわからない状況だった。1日目は白金祭の雰囲気を読むことで精一杯だった。しかし、2日目以降は勇気を出して外部の方に声をかけていった。すると、外部の方は団体の活動に真剣に耳を傾けてくれた。中には質問を沢山してくれる方もいた。この経験から私は、団体の活動や現地の状況などを言語化し、外部に発信していくことの大切さを学んだ。

以上のようなイベントでの経験の中で課題も見つかった。それは、現地や支援の在り方を詳しく知らないことである。具体的には、ベトナムの場合、支援をしている学校や地域にはどんな問題を抱えているかなどである。ミャンマー場合は情勢が不安定であるため日々情報を得ることが必要だと考えた。また私は外部の方に「日本にいる私たちができる支援は何か」と尋ねられた時にすぐに答えることができなかった。この経験から自身に足りないこととして、現地や支援の在り方、求められるボランティアなどの知識が足りないことに気が付いた。そして、この知識不足が原因となり、外部の方に団体の活動や現地への思いがうまく発信できていないのではないかと考えた。

この経験から私は国際学科の学びに繋げようと行動した。「多文化共生入門1」の授業では、外国にルーツのある人々がどのようなことを日本で求めているか知ることができた。また彼らが日本で進学するにあたり、言語の壁があることや情報が得られないことを知ることができた。それは日本国内に住む外国にルーツがある方だけではなく、ベトナムやミャンマーもそうかもしれない。「東南アジア地域研究」では、ベトナムやミャンマーなどの東南アジアについてあらゆる視点から学んだ。結果、現地ではインフラが整っていないことや困難な状況下で働かされている人々がいることを知った。この学びからは、学校までの通学路が整っていないことや、親の手伝いをしなくてはならず教育を受けている余裕がない子どももいるのではないかと考えることができた。以上の2つの講義は例に過ぎないが、学びを外部の方へ発信する際の言語化へつなげることができたと自負している。

4. 今後の課題、方向性

私はボランティアと学びの繋がりを社会人になってからも活かしていきたい。なぜなら、イベント

での経験をきっかけに、私は「人の心を動かす」ことに魅力を感じ、就職先も人の心を動かせる仕事に就くことに決めたからである。就職活動を終え、私は春から学習塾の教室長として働くことが決まった。

教室長の仕事は、教室のマネジメントや保護者対応など様々である。何をするにしても、自ら学び、学んだことを言語化して、相手の心を動かすことが必要になると考える。例えば、進路指導の場合、配属された教室近隣の学校の情報や入試制度を学び、それを生徒や保護者と共有し語り合う必要がでてくる。そして目標を決定し、それに向けてどう努力していくか説得させ勉強へのモチベーションを高める役割が教室長の仕事にはあると考える。このようにイベントの経験と同様に、自分自身がまず物事を理解して相手に発信し説得してもらう必要がある。そのためには、私が国際学科の講義の中で活動に関係する科目を履修したように、自ら学んでいく気持ちが大切だと考える。私は卒業後も、この姿勢を大切に社会に貢献していきたい。

5. 私にとっての Do for Others

他人のためだけではなく、自分のためにもなる活動

つながりを見出す場としてのボランティア

心理学部心理学科3年 小室 閑

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

大学入学時、コロナ禍で授業も全面オンラインかつ初めての一人暮らしが始まった。そのような中で、せっかく籍を置いているのだから大学に居場所を作りたい、コロナ禍ではあるけれどボランティア活動が盛んな大学で自分も何かやってみたいという気持ちから、ボランティアセンターに通うようになった。私自身、新しいことに取り組むことにほとんど抵抗がないため、大した用がなくてもボランティアセンターに行き、職員の方々と他愛もない会話をする日々を送った。その中で、気になるボランティアや紹介していただいたボランティアに参加した。

2. ボランティア実践の内容

1年次は、1 Day for Others にとにかく参加し、大学生に求められていること、大学生にもできることは自分が思っているよりもたくさんあるということ学んだ。

そして、1年の秋ごろ、ボランティアセンター職員さんから、心理学と関係するのではないかと Thoughtful Gift の活動を紹介していただいた。この活動は、精神障害により精神科病院へ入院することになった人のうち、さまざまな事情によって入院生活に必要な物が揃えられずにいる人に向けて、必要な物資を本人や家族に代わって揃え、無償で提供するというもので、事務作業から学内イベント・単独イベント実施まで幅広く活動に携わっている。

3. 実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

ボランティアの実践と日々の学習によって、「支援とつながり」「心の健康教育とつながり」「自分とのつながり」の3つの軸で私の取り組みをまとめることができると考えた。

まず、「支援とつながり」について、社会福祉学の授業にて、「地域共生社会」を実現させることを目指すということ学んだ。また、コミュニティ心理学から、コミュニティ感覚の高さは人生への満足感や主観的幸福感の高さなどに影響を与えることを学んだ。

この活動は、顔の見えない同士のやりとりではあるが、温かさやつながりも届けられたらと考え、メッセージカードを物資の中に入れるということを提案し、現在も実行している。実際に、退院しお礼の手紙をくださった人から「メッセージカードの言葉に励まされた」という声をいただいたりもする。これより、会えなくても目に見える形で示すことは、地域社会とのつながりを実感することに役立つのではないかと考えるようになった。

次に、「心理教育とつながり」について、先程述べた社会福祉学の地域共生社会の考え方に加えて、心理学的支援法で学んだ心の健康教育の考え方が活かせる。

ボラカフェを実施した際やイベント出店時に活動紹介を行ったが、活動を丁寧に説明したうえでメッセージカードを書いてもらうことによって、決して他人事ではなく自分事として理解し受け止めて、温かい言葉や色を残してくれていると感じた。誰でも簡単に情報を得られる社会であるからこそ、正しい情報の見極めや解釈をする必要があると考える。そして、活動を伝えていくことによって、感心を持ってもらうこと、正しい情報を知ってもらうことにつながるのであれば、今後も継続して学び、発信していく必要があると思う。

そして、「自分とのつながり」について、活動を紹介するために新たな情報を得たり、わかりやすく伝えるために専門的な内容を自力で噛み砕いて説明したりすることによって、自分の理解度を上げることに繋がっていると考える。また、座学では学べないリアルな現状と照らし合わせながら学びを深めることができているのではないかと考える。また、2年次より精神的な不調をきたし、思うように活動できない期間が続いたが、その際、Thoughtful Gift やボランティアセンターといったコミュニティに大きく支えられた。状況は多少違えど、気にかけてくれて待っていてくれる人がいるということのあ

りがたさを実感し、活動を促進する必要性も感じた。そして、ボランティア活動をするということは、支援先とのコミュニティを築くだけでなく、その活動場所自体が参加者のコミュニティ感覚に影響を与えているのではないかと考えるようになった。

4. 今後の課題、方向性

この活動は、入院患者と活動参加者だけでなく、院内スタッフや支援してくれる他団体や企業、イベントに来てくれる人など幅広くたくさんの人を一つのコミュニティとしてつなぐ活動なのではないかと考えている。そして、私自身、活動できない期間が長く続いたことから、大学生のうちにやりたいと思うことが残っている。

具体的には、これまで1 Day for Others で参加した団体と交流をしたり、同年代で別の活動をしている友人らと一緒に学内イベントを行ったりしてみたいと考えている。活動紹介の場だけでなく、それぞれの団体の特徴や良さを掛け合わせたコラボができると、ボランティア同士のコミュニティ構築に繋がったり、それを外に発信することで、心の健康教育の場のようになったりするのではないかとと思う。

また、新たにボランティアを始めようとしている人や新入生に向けて Thoughtful Gift に限らず、ボランティア活動に参加することで、地域社会との繋がりを持てることやコミュニティ感覚を高めることができるという点で、ボランティアに参加することを後押しするような活動をしてみたいと考えている。

5. 私にとっての Do for Others

私にとって「Do for Others」とは他者と共に生きていくことであると考えている。直訳は「他者への貢献」であるが、ボランティア活動をすることによって貢献すると同時に、コミュニティや学びという点で自分にも貢献していると感じた。Do for Others の中に自分という存在も見出すことによって、共生社会への実現にもつながっていくと考える。

私にとっての2つの Do for Others

心理学部心理学科3年 田中 大耀

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

「私にとっての2つの Do for Others」とは、「子供たちの居場所作りに関わること」と、「人から人へと巡っていくもの」である。

このテーマのきっかけは、私自身の中学生での不登校経験が大きく影響している。私は中学生のときに、人間関係の悩みから不登校になった。学校に居場所がないと感じる中で、面接室でスクールカウンセラーや、学習塾で先生と過ごしていると、ここが居場所であると感じることができた。今振り返ると、このように居場所を感じられる時間・場所があったからこそ、高校、大学への進学に繋がったのだと考える。これらの経験を通して、私は居場所の重要性を実感した。

その後、大学で心理学を専攻する中で、文部科学省が毎年公表している「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」を見て、不登校の児童生徒数が年々増加していることを知った。私は、自身が不登校のときに感じた居場所のなさや居場所の重要性から、大学で学んでいる心理学の知識を活かして、今度は自分が不登校の子供たちを支えたいと考えた。それがボランティア活動への参加に繋がり、戸塚無料塾での学習支援、おっち一塾での不登校支援・日本語支援を通して、「子供たちの居場所作りに関わること」ができた。

これら中学生での不登校経験から、大学での3年間のボランティア活動を通して、他者への貢献は「人から人へと巡っていくもの」ということを感じた。例えば、不登校の時期にスクールカウンセラー、学習塾の先生に支えられたことが、今のボランティア実践に繋がっている。そして、ボランティア活動で関わった子供たちが、新たな人の支えになったときに、それこそ他者への貢献が「人から人へと巡っていくもの」だといえる。

2. ボランティア実践の内容及び、学びと実践の結びつき

1. 戸塚無料塾

戸塚無料塾では、小学生・中学生に学習支援を行った。具体的には、毎回の活動で2時間ほど、スタッフと生徒が1対1、1対2で勉強を教えた。生徒たちが主体的にその日にやりたい勉強を決め、私を含めたスタッフはそのサポートをした。また、毎週の勉強以外にもイベントが開催され、私は他の学生スタッフと協同してクリスマス会の企画・実施を行った。

私は、戸塚無料塾での活動を通して、多様な生徒たちと出会うと同時に、生徒1人1人の気持ちを理解することの難しさを実感した。例えば、勉強に集中できず、スマートフォンを触ってしまったり、生徒への声かけが上手くできず、勉強の手が止まったりしてしまうことがあった。

そこで、大学での「学習・言語心理学」での「自己効力感と良い目標設定の関係性」についての学びを実践した。具体的には、自分がその結果を生む行動をうまく実行できるという期待・確信である「効力期待」と、行動を起こせば、特定の結果が得られるという「結果期待」を満たすものが、良い目標設定という学びである。講義の内容から、勉強に集中できないのは「効力期待」が低いのではという気づきを得たため、「効力期待」を満たすために「今日はどこまでやる?」「このページまで終わったら休憩しよう。」と近い目標を提案したり、「その調子だよ。」「すごい早いね。」などの声かけを行ったりした。

その結果、生徒の変化として、勉強に集中する生徒が多くなったと感じた。毎回同じ生徒を担当するわけではないため、以前との比較が難しいが、近い目標を設定することや適度な声掛けにより、勉強に取り組みやすくなったと考える。例えば、「このページまで終わったら休憩しよう。」という声かけで、そのページまではがんばろうとする姿勢が何度も見られた。

2. おっち一塾

おっち一塾では、小学生から高校生までの不登校支援と日本語支援を行った。具体的には、毎回の活

動で2時間ほど、生徒たちと雑談したり、ゲームしたり、勉強を教えたりした。学生グループでイベントの企画・実施を行い、私はスタッフ研修会と鎌倉散策に関わった。

私は、おっち一塾での活動を通して、生徒にただ質問をしても尋問のようになってしまい、会話は続かないということを実感した。

そこで、心理学科3年間を通しての学びの1つで、特に「心理的アセスメント」で学んだ「聴き方の技法」を実践した。具体的には、「聴き方の技法」として、繰り返しの技法や、オープンクエスチョンを実施した。例えば、生徒が「〇〇行ったよ。」と話してくれたときに、「〇〇行ったんだ〜」と生徒の言葉を使って言葉を返したり、「そのアニメってどういうお話なの?」といったオープンな質問を用いたりして、生徒と会話が進みやすくなるように努めた。

これらの結果、生徒との会話の面では、以前よりも会話が弾み、生徒の笑顔の時間が増えた。また、自分からお話や質問をしてもらえることが増え、生徒をより深く理解できることに繋がった。

3. 今後の方向性

私は、ボランティア活動を通して、実践と学びは密接に絡み合っていることを実感した。具体的には、実践の中で課題を発見し、その課題を解決するために学びを活かした。また、後から振り返って、学びが実践に活かされていたことも多々あった。このように学びと実践は密接に絡み合っているからこそ、これから学ぶより専門的な心理学の知識を活かして、子供たちの居場所作りに活かしたい。そして、子供たちの居場所になる場所を増やしたいと考える。

また、ボランティア活動を通して、他者への貢献は「人から人へと巡っていくもの」ということを考えた。このことは、ボランティア活動のみではなく、私が不登校の時に支えてくれたスクールカウンセラーや塾の先生のように、普段の人々の言動も、他者への貢献に繋がっていると考える。その中で、ボランティア活動は自分が貰ったものを活かして、他者に貢献できるものだと考える。だからこそ、他者から貰ったものを忘れずに、今後もボランティア活動に参加したい。

これまでのボランティア実践を振り返って

心理学部教育発達学科3年 明石 梨奈

1. ボランティア活動に至るまでの経緯

私が大学に入学する直前にミャンマーで軍事クーデターが起きた。その際に高校時代にミャンマーで医療ボランティアをされている方のお話を伺ったことを思い出し、私もその方のように海外貢献やボランティアをしたいと考えたのがボランティアに関わり始めたきっかけである。

2. ボランティア実践と学びをどのようにつなげ、どのように深めたか

この3年間で取り組んだボランティア活動と大学での学びとの関連について、1年次から順を追って振り返る。

入学当初はコロナ禍で、対面のボランティアに参加することが難しかったため、オンライン開催の1Day for Othersに参加していた。そこで、さまざまな方からご自身の経験や学び、それぞれの視点で環境問題やSDGsへの考えをお聞きした。特に印象に残っているのは、日本の農業の現状や今後の予測について聞いたことである。話を伺った方が私の地元で農業を営んでいる方だったこともあり、それまで遠い存在だった農業や第一次産業を身近に感じられるようになった。3年次から所属するゼミで、再びSDGsについて学ぶ機会に恵まれ、「はやまクリーンプログラム」を推進する葉山町でのフィールドワークでは、エシカルアクションを見つけ、学んでいたことでさらに自分も実践することができた。

1年次の終わりからは「りもぐるみ」の活動に加わった。私は、岐阜県下呂市の小中学校の外国にルーツを持つ児童生徒とのオンライン交流で主に関わっている。Aさんと仲間たちと出会っただけでなく、りもぐるみの活動を通して、家や大学から遠く離れた金山という土地に興味をもったことで、昨年の夏に事業所と交流するワンデーに参加した。

指定した科目の一覧で2年次の欄に記入した2つの授業では、異文化を持つ人との関わり方やあるべき考え方、やさしい日本語、外国籍児童へのより効果的な授業方法を学んだ。ここで学んだことは、Aさんとの交流や自分の普段の行いを顧みて軌道修正することにつながったし、交流の経験をもとに、自分がより良いと考える指導案を作成することもできた。

それまではなんとなく外国の人と言葉を交わすときは、間違えてしまわないか、話が通じるか緊張するし億劫だと感じていたが、これらの経験を通して授業担当の先生の紹介を通じて参加したボランティアで知り合った共通の趣味を持つ留学生と連絡先を交換し、来日した際は私から東京観光に誘い、一年以上が経った帰国後も連絡を交わしている。また、同時期に体験活動で週に1度横浜市内の小学校で、生まれてからほとんどずっと日本で暮らしているアフリカ系の1年生と関わっていた。入学当初から学校で不適応状態にあったため、その原因や、状況を打開する策を探した。

報酬について触れていたボランティア大賞での先輩の発表は、私のボランティアへの考え方が変わるきっかけになった。英語のvolunteerには日本で使われている奉仕活動家といった意味だけでなく、志願兵という意味もある。自ら希望して誰かのために行動することがボランティアで、無償の労働力として意思に反する扱いを受けたり、能力以上の扱いをされるのは、ボランティアじゃないのではないかと考えた。

3年次で指定した科目で挙げている「子ども家庭福祉」は、日本の子ども、家庭が置かれている状況や、彼らへの福祉策について学ぶ授業である。行政がまとめた統計や管理する施設を知ること、子どもたちが何に困っていきそうなのか、どんな支援が不足しているのかを考えられるようになった。

3. 今後の課題、方向性

今後もボランティアは積極的に続けていくつもりである。最近は新たにコロナ禍では開催が難しかった地域子ども食堂のボランティアスタッフを始めた。今はまだ調理と配膳の手伝いのみだが、いずれは大学でつけたスキルを活かして、若い児童を対象に読み聞かせや学習の補習も食堂内でできるよ

うにしたいと思っている。通ってくる子どもの中には、外国にルーツを持つ子どもおり、特に彼らやその保護者の支援には私の経験と学びが役に立つのではないか。

それから、もし、次年度りもぐるみに新しいメンバーが増えた場合には、これまで私が大学で学んできた外国とルーツを持つ児童とより良い関わり方や伝え方を教え、卒業した後も途絶えないようにしたい。

また、卒業論文では、日本国内の外国人が集住する地域で日本語支援や多文化共生支援に取り組んでいるボランティアやNPOを調査し、より良い地域日本語教育についての考察を加えられたら良いと考えている。大学での学びだけでなくボランティアに携わる上で得た知識も、参考になると思う。

4. 私にとっての Do for Others

私にとって「Do for Others」とは、良い気持ちをコミュニティ全体に循環させることである。映画「Pay It Forward」のように、やさしさや思いやりを誰かに渡すと少しずつやさしい気持ちが帰ってきたり、達成感や満足感が得られたり、また新しい誰かに広がったり、それが Do for Others ではないか。

5 ボランティアファンド学生チャレンジ（通称：ボラチャレ）

（1）概要

「ボランティアファンド学生チャレンジ」（以下「ボラチャレ」）は、学生が自ら企画した6か月以上1年以内の活動を応援する奨励金制度である。ファンドとなるのは明治学院消費生活協同組合で販売している「明治学院大学ボランティアファンド支援グッズ」の売上の一部で、教育理念“Do for Others”を実現するために、大学公式グッズの購入という形を通じて社会に貢献する仕組みとなっている。

ボランティアファンド学生チャレンジ 2022 の募集要項は、以下の通りである。

募集内容	テーマ：「社会課題にチャレンジ！」 社会の課題を発見し、解決のためにアクションを起こすチャレンジ精神のあるみなさんを支援します。分野は問いません。 奨励金：原則上限 20 万円
応募資格	・明治学院大学の学生による学生団体、ゼミ、サークル等による活動の企画であること。 ・個人の活動は対象外となるが、2人以上でチームを結成すれば申請できる。 ・メンバーに卒業生や他大学生、社会人等が含まれる場合、メンバーの半数以上が本学学生であること。
助成対象期間	2022 年 12 月 1 日（木）～ 2023 年 11 月 30 日（木）
応募方法	「明治学院大学ボランティアファンド学生チャレンジ応募用紙」をメールにて提出
選考	提出書類をもとにボランティアセンターと面談
援助対象	活動現場までの旅費交通費・宿泊費、消耗品費、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、使用料・賃借料（イベント会場施設使用料など）、保険料 ※次の項目を除く：人件費、飲食費（飲食が必須手段となる場合は可能）、懇談会・慰労会の会場費、機材購入費、寄付に該当する使用
活動報告/ 提出物	・中間活動報告会（2023 年春学期中）にて途中経過報告を行う ・活動終了後、2023 年 12 月末日までに、以下を提出 活動報告書および写真 「奨励金使途報告書」・領収書

なお、ボランティアファンド学生チャレンジ 2023 に向けては、採用期間および応募スケジュールの見直しを行った。これまで活動期間が1年のプロジェクトを支援対象としていたが、学年が上がりキャンパスが変わる・留学に行く等、様々なイベントに対応できるよう半年以上1年以内のプロジェクトを可能とし、学生が状況に応じてプロジェクトをデザインできるよう採用期間に弾力性を持たせた。また、申込時期を2ヶ月前倒しし、夏期休暇期間中に面談実施、秋学期より活動開始できるようなスケジュールへと見直しを行った。

（2）助成団体一覧**2022 年度助成団体一覧**（期間：2022 年 12 月～2023 年 11 月）

プロジェクト名	団体名	奨励額	使用額
小中学生と自然体験を通して暮らしを考える	Piece of Nature	¥200,000-	¥47,936
岐阜と明学の架け橋に！	OPENROOM	¥200,000-	¥193,381
生理用品プロジェクト	be the light MGU （旧：Voice Up Japan MGU）	¥195,870-	¥68,087
パヤオプロジェクト	Be with Phayao	¥200,000-	¥199,550

2023 年度助成団体一覧（期間：2023 年 10 月～2024 年 9 月）

プロジェクト名	団体名	奨励額
パヤオプロジェクト	Be with Phayao	¥200,000-
ベトナムの子どもたちにより良い衛生環境を	JUNKO Association	¥200,000
コンポスト活動で循環型キャンパスへ！	畑やろうじゃないか（コンポスト部門）	¥100,000-

（3）総括

2022 年度のボランティアファンド学生チャレンジの採用団体は 4 団体であった。

Piece of Nature は、2022 年度に活動が始まったばかりの新しいグループである。不登校の児童・生徒など、学校へ「行きづらさ」を感じている子ども（小～中学生）を対象とした自然体験の機会の提供を活動内容としている。今回のボラチャレ申請に先立ち、「いつでもボランティアチャレンジ」を活用し、活動メンバーで田んぼでの農作業体験をおこない、子どもを招いて実施するために必要な知識や技術を学ぶなど、受け入れ準備を十分におこなった上での挑戦だった。当初、なかなか子どもの参加がなく苦戦する形になったが、それにより、コーディネーターが紹介した人物を介して、それまで接点のなかったフリースクールとの関係構築につながり、子どもの参加も得ている。この経験は、同グループの今後の活動の展開に役立つだけでなく、同じようなテーマで活動するグループにも参考になることだろう。

OPENROOM は、障害者・障害児の施設、小学校でのボランティア活動をおこなってきたグループだが、コロナ禍をきっかけに、コーディネーターのつながりから岐阜県下呂市の金山小学校や竹原小学校の特別支援学級の児童・生徒、障害者の親子の会「ホープフルハーツ」とオンライン交流をおこなってきた。今回の応募は、それらの継続や活動に関する情報発信のほか、勉強会を開催することによる知識の獲得、現地に赴いての対面交流を含めた総合的なプロジェクトであった。報告からは、都市部との生活の違いに関して、対面交流ならではの体感的気づきが記さ

れている。オンラインでの活動では、交流している人たちが抱える難しさに注視し、個別のサポートの方法に意識を向けることになるだろう。しかし、実際にその人たちが生活している場に行くことで、その人たちを取り巻くコミュニティ/社会といった環境を実感でき、その人たちの生活をその良さと課題の中で考えることができたことがわかる報告となっている。

Be with Phayao による「パヤオプロジェクト」は、メンバー5人中2人が高校時代に、YMCA パヤオセンターと明治学院大学の中高大生との交流プログラム「明治学院中高大連携パヤオプロジェクト」に参加していたメンバーである。このプロジェクトにより、継続的に活動する人材が育っていることを実感させる応募であった。中高大連携パヤオプロジェクトでは、コロナ禍の中、貧困や人身売買の危機にあった子どもたちを保護する YMCA パヤオセンターとオンライン交流をおこなってきたが、今回、初めて渡航が実現することとなった。メンバー訪問中にパヤオセンターと明治学院大学の会場をつないだオンライン交流会には、明治学院高校と明治学院東村山高校からそれぞれ一人ずつ生徒が参加しており、人数は少ないながらもメンバーが高校時代に受けたような大きな影響を与える機会になったことが期待される。また、報告からは現地に赴いたことで、タイの山岳地域における貧困の問題への関心を深めている様子がうかがえた。

Voice Up Japan MGU (活動途中で be the light MGU と改名) は、前年度の活動の継続として申請があり、助成が決定した。この活動は、コロナ禍が長引く中、経済状況が悪化する人が増えることにより注目されるようになった「生理の貧困」の問題に取り組むものであった。この活動は、トイレットペーパーと同じように生理用品も提供されるべきであるという考えに基づいている。そのため、実際に生理用品を配置しながら、生理をめぐる人々の意識も変えていく活動となる。よって、生理用品をトイレに配置し補充するという活動が日々発生することになり、限られた人数でその活動をおこなうのは、大変な苦勞が伴っていた。他大学では、学校側が負担し生理用品を配置するという動きも出ており、be the light MGU では、その状況を調べながら大学との交渉の準備を進めている。さらなる継続申請は出されなかったが、この活動が大学での生理用品をめぐる「話しづらさ」を大きく変えたことは間違いない。

全体を通して印象に残ったのは、「格差」をめぐる学生たちの鋭敏な問題意識とあらたな気づき、それをより良い状況に変えていこうとする思いである。Piece of Nature は、学校に「行きづらさ」を感じている子どもたちとそうでない子どもたちとの体験の格差に注目し、それを埋めるためのプロジェクトであった。また、OPENROOM は、訪問により都市と地方の違いに実感し、それには良い面もあるものの「格差」となる面もあることを体感することになった。Be with Phayao は、パヤオセンターとのオンライン交流や学びを通して格差に関する知識は持っていたが、やはり訪問を通して、国や地域の間にある経済格差の問題を体感し問題意識を深めている。be the light MGU (旧 Voice Up Japan MGU) は、生理用品が女性の経験としてあるがゆえに社会的サポートの対象となっておらず、また語りづらい状況が作られていることに異論を唱えるものであり、ジェンダー間格差の問題に取り組んだと言えるだろう。

活動をおこなう上でそれぞれに違う苦勞が伴っていたが、今後もこうした問題意識を持ち続けていってほしいことを期待したい。

なお、活動期間が2024年9月までとなっている2023年度の採用団体は、2022年度の継続として Be with Phayao、1995年から開発途上国の子どものための教育の支援をおこなってきた JUNKO Association、明治学院大学横浜キャンパスのボランティアセンター脇にある畑を運用し、環境問題に関心を持つ学生たちの畑やろうじやないかプロジェクトとなっている。

(ボランティアコーディネーター 砂川 秀樹)

（４）助成団体活動報告

◆小中学生と自然体験を通して暮らしを考える

団体名	Piece of Nature
企画の目的	主に不登校や学校に行きづらさを感じている子どもたち（小～中学生程度）を対象に自然体験の機会を作る。自然が少ない首都圏に暮らしていて、学校主催の自然体験に参加ができていない子どもたちが、自然の中で過ごすことのできる時間を作りたいと考えた。また普段食べている食べ物が生産される過程を経験することで、食について考えるきっかけになればと考えた。子どもたちが外に出て体を動かすことのできる機会を作るとともに、自然の中で遊ぶ楽しさを伝えたい。

1. 実施概要

プロジェクトメンバーの学生の中には昨年度舞岡公園での田んぼ活動に参加した者もいた。4月の活動開始までに、主な活動場所である舞岡公園でのお花見や散策を通じたメンバー同士の交流をした。また近隣のフリースクールやボランティアセンター長が長く活動をされている見沼田んぼへの見学を通して、自然の中で活動する際の注意点を学び、子どもたちと一緒に活動するための準備を行った。メンバー募集中と子どもたちの募集のためのチラシも並行して制作した。子どもを募集するためのチラシは、見る人の印象なども考慮して作成した。活動は、2023年4月から12月までの間で、月1-2回のペースで、大きく分けて田んぼ活動、自然観察、もの作り体験、イベントの4種類の活動を計画した。具体的な活動内容については以下の表にまとめた。

子どもたちは近隣のフリースクールから募集した。プロジェクトの前半は子どもたちの募集に苦戦したが、フリースクールへの定期的な見学と宣伝を通して、子どもたちやフリースクールのスタッフの方に Piece of Nature の活動やプロジェクトメンバーのことを知ってもらえるようにつとめた。8月の潮干狩りには子ども2人とフリースクールのスタッフの方の参加があり、充実した回となった。潮干狩りは海での活動となるため企画段階から安全第一を意識したが、活動において誰一人怪我することなく、みんなで楽しく活動ができた。また、ボランティアセンターのコーディネーターの方を通じて新たなフリースクールとも繋がることができ、活動後半のみかん狩りやおもちつきには多くの子どもたちが参加した。

1年を通し、活動だけでなく、プロジェクトを通じて、人とのつながりができたことが大きな成果だと考える。

実施年月	実施内容	参加者（公募）
2023年4月	自然観察：お花見⇒中止	
5月	茶摘み⇒雨天中止	
6月	田んぼ：田植え	
7月	田んぼ：草取り	
8月	イベント：潮干狩り	子ども2人・大人1人参加
9月	ものづくり体験：かかし&たこあげ	子ども1人参加
10月	田んぼ：稲刈り	
11月	イベント：みかん狩り	子ども3人（両親も参加）
12月	イベント：おもちつき	子ども3人・大人3人参加

（国際学部国際学科2年 室田 素良）

2. 感想・活動を通して得た学び

今回のプロジェクトは、プロジェクトメンバー同士やフリースクール、舞岡公園との交流ができ、たくさんの視点からの刺激によって視野が広がり、外とのつながりを強く感じた活動であった。また、田んぼを中心とした活動であったため、普段何気なく食べているお米がどのような過程でつくられているかといった、お米に関する学びが深まった。

フリースクールでは、子供との距離感や接し方について一人ひとりで違うため難しさはあったものの、子どもの方からコミュニケーションを取ろうという様子が見られて嬉しかった。また、メンバー学生も子どもと積極的に関わろうとしており、お互いが笑顔で取り組むことができ楽しい活動になった。田んぼ活動やみかん狩りなどのイベントでは、子ども目線で活動することを意識していたため、子どもが楽しめるイベント運営ができてよかった。プロジェクトメンバーは子どもとのふれあいが好きな人が多く、義務感ではなく「楽しい」という気持ちをもって活動できたことがなによりも良いことだと思う。

子どもの様子について、協力して活動をすることで最初はかたかった表情が徐々に笑顔に変わっていくのがみられた。また、自然体験をすることで新たな発見があったとき、表情がやわらかくなっていた。これは、自然にふれることが少ない子どもに、自然体験という非日常的な体験で探求心や好奇心が刺激されたからだと考え。そのため、今回のプロジェクトでは、自然体験の機会をつくることでいつもの生活では得られない経験を提供することができた。また、普段食べている食べ物を周りの人と協力してつくることで、探求心・好奇心が刺激されるとともに食の興味へとつなげられた。子どもにとってこの体験が「大変だった」「疲れた」といったマイナスな経験ではなく成功体験として心に残るように、子どものバックグラウンドや性格を意識しながら接するよう工夫した。そのため「大変だったけど楽しかった」というフィードバックをもらったときにとてもやりがいを感じた。それと同時に、不登校や学校に行きづらさを感じている子どもたちは、その子どもに問題があるのではなく「周りの環境」という要因が大事だと学べた。

外とのつながりに関しては、プロジェクト開始時とイベント毎に発信していたお知らせ、さらに活動報告を通じて、つながりが深まったと感じる。お知らせ・活動報告は、内容が具体的かつ写真の添付により見やすいように工夫したことを、多くの方から高く評価していただけて嬉しかった。これは今後の活動にもつなげていきたい。

(心理学部心理学科2年 小野 くるみ)

3. 今後に向けて

多くの反省があげられるが、特に学生・子どもの参加についてより増やしていきたい。学生の参加について、まず活動の雰囲気を知ってもらうために、SNSでの配信や1 Day for othersで募集をかけたい。また、目を引く立て看板の作成や学園祭への出展などの広報にも力を入れて、学生に興味を持ってもらう機会を多く増やそうと考えている。子どもの参加については、より多くのフリースクールに声がけや、フリースクールへの見学をすることで参加人数を増やしていきたい。また、活動のお知らせの発行をより早く行なうことを意識していきたい。さらに、普段食べている食べ物の生産過程を1番感じられる田んぼ活動の参加人数が少なかったが、これは、田んぼ活動をするための衣服の準備や活動後の汚れた衣服の扱いに大変さを感じるからかもしれないと考えた。そのため、来年度はレインコートなどの衣服の貸出ができないか検討したい。

来年度に挑戦したいことについて、田んぼ以外の活動についても子どもからの興味がみられたため、ハイキングや県外での活動も視野に入れていきたい。参加した子どもから蛍観察をやりたいなど要望を聞くこともある。そのため、子どもがやりたいことをより大切にしていきたい。

今回のプロジェクトでは、つながりの大切さをとても感じた。来年度もプロジェクトを通じてできた人とのつながりを活かし、イベントを一緒に考えてみるなど、関係を大切に活動していきたい。

(心理学部心理学科2年 小野 くるみ)



活動報告 (参加者に送ったものの抜粋 2023年7月)



稲穂を乾燥させる
10月22日@舞岡公園



たわわに実った稲穂
11月@舞岡公園



稲刈り後の田んぼの様子
10月22日@舞岡公園



みかん狩り 11月26日
@汲沢オレンジファーム



脱穀作業の様子
11月5日@舞岡公園

◆岐阜と明学の架け橋に！

団体名	OPENROOM
企画の目的	地域格差や障害児への思い込みをなくす足がかりとなること

1. 実施概要

私たちは、主に以下の五つのことを実施した。

第一に、岐阜県下呂市立竹原小学校、金山小学校の特別支援学級の生徒とのオンライン及び対面交流である。オンライン交流では、月ごとの行事に合わせたクイズや、体や物を使ったゲームを行った。新たな活動として、誕生日月の小学生へ誕生日カードを郵送し、交流会で誕生日会を行ったり、大学生活の様子を伝えたりした。対面交流では、岐阜へ赴き、体育館で体を動かすゲームや、教室で座って楽しめる様々なゲームを行った。また、給食や掃除の時間も共に過ごし、手作りの自由帳とアルバムをプレゼントした。6年生との交流も行い、大学生活や将来への向き合い方について発表を行った。

第二に、障害を持つ親子の会ホープフルハーツとのオンライン及び対面交流である。オンライン交流では、恒例行事となったクリスマス会の実施に加えて、2回のお話会を開催した。クリスマス会では、都市部と地方のイルミネーション動画交換を行い、都市部と地方のクリスマスの違いを共有したり、クリスマスソングを歌ったり、ミニゲームを行ったりした。お話会では、近況報告や大学生活について、夏休みの過ごし方などを共有した。対面交流では、ご飯会を開催した。岐阜の郷土料理をいただきながら、近況報告や将来のことについて共有した。

第三に、障害児・障害者勉強会である。講師として元明学ボランティアコーディネーターの田口めぐみ氏をお招きし、交流している障害児への理解をテーマにクラス編成や支援の連携についてを学んだ。

第四に、情報発信である。戸塚モディへの出展、白金祭への出展を行った。OPENROOM の活動報告や障害に関するクイズをしたり、岐阜県の観光地や特産品を活用したゲームを行ったりすることで、障害児への理解や都市部と地方の暮らしについてを、明学生や社会に向けて発信した。

第五に、下呂市役所に訪問した。上記に示した小学校と障害者団体との対面交流で岐阜へ赴いたことと併せて、下呂市役所にお招きいただき、OPENROOM の活動報告と下呂市の今後についての意見交換を行った。地方の活性化について意見を交換し、都市部と地方のそれぞれの良さを改めて認識した。

〈オンライン交流〉



〈モディ出展〉





〈岐阜訪問〉



2. 感想・活動を通して得た学び

上記の企画から得た学びとして、以下の三点が挙げられる。

第一に、地方と都市部の生活の違いと良さである。地方と都市部の違いで特に印象に残ったのは、子どもの数の違いである。地方は都会に比べ子供の人数が少なく、クラスの数も少なかった。だが、人数が少ない分、地域住民との関りが密接であり一人一人のことを気にかけているように感じられた。しかし、就職先や進学先が少ないことが原因となり、若者が都会に出てしまう問題があった。そのため子どもは大学生の年代の若者との交流が少なく、将来について見通しが持てないという意見があった。そこで、都市部に住んでいる私達が実際に岐阜に行き、大学や都市部について伝えることで、子ども達の将来に貢献することができた。地方と都市部の良さについては、都市部に住んでいる私たちだからこそわかる地方の良さを都市部の人に伝えた。また、地方の人に都市部の良さを共有し、地方がそれらを取り入れることで、都市部と地方が繋がったと考える。互いの良さを共有することで、普段知りえなかったことを知ることができた。このように情報共有をすることで、「格差のない社会の実現」に繋がるのではないかと考える。

第二に、子ども達の吸収力と可能性の大きさである。私たちは障害児への理解を深めることを目的の一つにして発達に特性のある子ども達と関わってきた。どのような配慮が必要なのか、どのような声掛けをしたら良いかなどを気かけながら、楽しんで交流していた。しかし、子ども達にとって、OPENROOM との交流は楽しむ場だけでなく、様々なことを吸収する場として機能しているということに、あることをきっかけに気が付いたのである。11月の交流で白金祭の出展をしたことについて子どもたちに報告したところ、ある児童が「もっと勉強を頑張って、みんなが行っている大学に行って、白金祭を体験したい」と言ってくれた。先生の報告によると、交流会終了後タブレットで明治学院大学の学部や学費などを調べていたそうである。これを聞いて、私たちは予想をしていない大きな反応を貰ったことに驚いたと同時に、発達の特性に関わらず、子ども達は日々様々なことを吸収し、新たな発見をしながら将来の可能性を着々と広げていっていることに気が付くことができた。私たちの活動がそのような子供たちの可能性を広げていることに繋がっていることを実感した瞬間でもあり、感動と喜びを感じた。

第三に、情報発信をすることの重要性である。OPENROOM の活動で得た体験や学びを他者に共有することで、子どもの特性に興味を持ってもらったり、岐阜県(地方)の生活を知ってもらったりすることができた。私たちだけでなく、他者にも新たな発見や学びをしてもらう機会を設けることは、私たちの身近な社会から、地域格差や障害児・者への思い込みの改善につながっていくことに気が付くことができた。このような理解の伝播が拡大していくことで、分断された社会ではなく、社会が1つになる、そんな世の中が実現してほしいと思った。

3. 今後に向けて

今後は、主に二つのことを目標に、活動していきたい。

第一に、地域格差の解消と障害児・障害者への思い込みの改善を目指し、活動することである。地方格差の解消においては、地方と都市部の良さや違いを理解し、互いに共有することが重要であると考え。また、障害児・障害者への思い込みの改善においては、障害の幅を広げた対面交流の実施、障害児・障害者の就労についての学びを深めることである。さらに、定期的に障害児・障害者についての情報発信を行うことで、思い込みを改善したい。

第二に、サークル運営の改善である。活動の幅が広がったことから、運営を幹部のみで行うことが困難に感じたこともあった。そのため、幹部の下に係をつけるなどをして、組織の改善を行いたいと考える。また、当サークルはオンライン交流が中心であるため、部員同士の交流が少なく、意見を共有する機会が少ないのも懸念点である。今年度は、一度だけオンラインでの「学生意見交流会」の機会を設け、部員のサークル活動内容に対する思いを聞くことができ、運営をしていく上で非常に重要な時間だったと感じた。今後は、より一体となった活動をするために、対面で集まる機会を定期的に設け、部員の意向をしっかりと活動に活かしたい。

(心理学部心理学科3年 由良 友萌)

◆生理用品プロジェクト

団体名	be the light MGU (旧 Voice Up Japan MGU)
企画の目的	① 必要な時に生活必需品である生理用品にアクセスできるキャンパスづくり ② 学生の生理への理解を深めるためのサポート

1. 実施概要

生理用品は、生理を経験する人にとってトイレトペーパーと同様に生活必需品である。しかし、生理が予期しないタイミングにくることや経済的理由などから必要になった時に、本学では必要な生理用品にすぐにアクセスできる環境がまだ整っていない状況にある。そこで、生理用品が無償で必要な時にすぐ手に入ることが当たり前になるキャンパスづくりを目指し、生理用品を無償で設置する活動をおこなった。また多くの明学生が生理に対して性別に関わらず正しい理解を深め、より他者を思いやることのできる人になるサポートをすることも目的の一つである。本プロジェクトは前年度より活動しており、前年度の成果と学びから継続的かつ発展的な活動の必要性を感じ、活動を継続することにした。

生理用品については、横浜キャンパス 8 号館 1 階、C 号館 2 階、6 号館 2 階の女子トイレ・多目的トイレに、生理用ナプキン 2 種類とタンポンの設置をおこなった。また設置の際に使用したボックスに生理用品の無償提供による効果と生理に関する認識を調査するために QR コードを付け、Web アンケートを実施した。さらに性別を超えて生理に関することや生理用品の必要性を広めるために、女子トイレと多目的トイレ同箇所の男子トイレにも、生理用品の展示とアンケートの QR コードの掲示をした。

アンケートには 58 件の回答が集まった。そのうち「急に生理がきたから」という理由で利用した人は 80% 以上であった。また、持ちあわせていなかったときや予測していなかった突然のトラブルが起こったときに、サービスを利用して「助かった」「安心した」という声が集まった。このように生理用品がトイレに置いてあることで緊急時に対応できるとともに、利用者の精神的な安心に繋がっていることがわかった。

設置期間中に毎月の利用数を集計した。その結果、予想よりアンケートの回答数があまり得られなかったにも関わらず、ナプキン 2 種類合計で平均して月に 1000 個程度、タンポンは 100 個前後の利用があった。またトイレに在庫がない時には、直接ボランティアセンターに取りに来る学生も見受けられた。このことから、生理用品の提供の需要および必要性は非常に大きいということを知ることができた。

また今年度の新たな試みであった男子トイレへの設置を実施して、男子トイレの利用者にも私たちの活動を広めることができた。生理を経験しない人からもプロジェクトに肯定的な意見が見受けられ、性別の壁を超えて生理について考える機会が生まれつつあることを確かめることができた。

活動期間終盤には、株式会社 TENGA ヘルスケアの性教育 Web メディア「セイシル」とのコラボイベントを実施した。学生ならではの生理やピル、コミュニケーションに関する悩みを集め、セイシルの方にお話していただいた。参加者は少なかったが、これを機に正しい知識を知ってもらうことの重要性を感じた。



生理用品の設置



セイシルとのイベントでの展示物

2. 感想・活動を通して得た学び

生理用品がすぐに手に入る環境が必要とされている現状があるにも関わらず、学生及び大学職員の方々へその必要性や自分達の活動を広めていくことは簡単ではなかった。アンケートへの回答の協力を呼びかける活動を定期的におこなったが、なかなか回答は集まらなかった。特に関心がない人に、興味や問題意識をもってもらうための働きかけは非常に難しかった。アンケートには、生理のイメージについて「大変」という意見の次に「オープンな場所で話しにくい」という意見が多かった。私たちの活動をきっかけに考える機会は生まれているが、自ら意識をもつ学生は少なく、まだ気軽に話せるような雰囲気も広くいきわたっているわけではない。誰もがもっと気軽に生理について考えることができる環境づくりについては課題の残る部分があった。

私たちプロジェクトメンバー内で人手が足りないこともあり、学生自身が補充や記録、管理など徹底した運営をしていくことは想像以上に大変なことであった。設置方法や必要としている人の手に平等に渡るような工夫について考えさせられた。アンケートに答えてくれる人が少なかったことや、思うようにいかないことも多くあり、時にくじけそうな時が度々あったが、友人やアンケートの回答からの「助かる」「安心する」「応援している」という声に勇気づけられるとともに、私たちの活動の意義を感じた。



男子トイレへの展示

3. 今後に向けて

このプロジェクト活動は私達だけの力では成すことができないことばかりであった。多くの方に協力いただいたからこそ活動を遂行していくことができたと思う。

今後は、最終的な目標である必要な時に必要な生理用品が当たり前の手に入る環境にすることを目指し、活動で得られたわかったことや資料などをもとに、大学へ生理用品の無償設置を交渉していく予定だ。アンケートには、「横浜キャンパスだけでなく白金キャンパスにも設置してほしい」という声がいくつか見受けられた。より多くのトイレに‘生理用品が置いてある’という安心できる環境が整うことを目指し、さらにプロジェクトを進めていきたいと思う。また活動を通して私たちも学内外の様々な支援機関やコミュニティと繋がることができた。明学生が大学の支援を最大限活用できる架け橋にもなっていきたい。そして私達 be the light MGU の SNS を通して、生理に関する正しい情報などを投稿し、生理に対してより理解のある学生が増えるよう発信を続けていきたい。

(心理学部教育発達学科2年 橘 莉乃)

◆パヤオプロジェクト

団体名	Be with Phayao
企画の目的	貧困を理由に人身売買の危機にある子どもたちを保護するタイのYMCA パヤオセンターとの交流・支援をし、日本国内で人身売買について知るきっかけを作る。

1. 実施概要

今年度、「明治学院大学ボランティアファンド学生チャレンジ 2022」のご支援を受け、私たち Be with Phayao は1年を通して充実した活動を送ることができ、私たちの目的である、貧困や人身売買の危機にあった子どもたちを保護するYMCA パヤオセンターとの交流・支援をすることができた。

私たちは年間を通して、タイのYMCA パヤオセンターへの訪問、パヤオクラフト販売、パヤオセンターとのオンライン交流・勉強会の3つのことを実施してきました。

(1) タイのYMCA パヤオセンター訪問

2023年3月1日から3月7日に本団体学生2名がタイ王国パヤオ県にあるYMCA パヤオセンターを訪問。コロナウイルスによるパンデミックの状態が比較的落ち着いていた時期であったが、ワクチン接種やPCR検査の実施、マスクの着用など細心の注意を払い渡航した。

センター滞在中、センターの設立と運営に関する講義、人身売買に関する講義、センターに住む子どもたちが通う小学校の訪問、タイとラオスの国境近くの山岳地帯にある少数民族の村の訪問、センター内での農業・堆肥作り体験、子どもたちと日本とタイの文化交流、タイのスイーツ作り、パヤオ湖訪問、そして子どもたちとの遊びなど、1週間を通して様々な貴重な体験・活動をすることができた。オンラインでは実現できない、パヤオセンターの生活を体験し、子供達やセンター職員と直接対話・交流することで子供達が興味を持っている日本のことを伝えたり、オンラインでは聞けなかった人身売買の事実の詳細や現状を聞くこともできた。

(2) パヤオクラフト販売

パヤオクラフトとは「バンコク YMCA パヤオセンター」に暮らしている山岳少数民族出身の子供達が刺繍したクラフトだ。販売売上の全額がYMCA パヤオセンターに贈られ、センターの運営と子供達の自立に役立つ。

【横浜キャンパスクリスマスマーケットで販売】

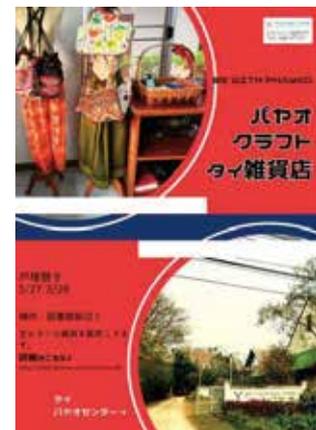
2022年12月に本学横浜宗教部が主催したクリスマスマーケットに出店させて頂き、初めて大学で販売を行った。初めて手に取る方、元々クラフトを知っている方など様々だったが、多くの学生や教職員にお買い上げ頂いた。

【戸塚まつりで販売】

2023年5月の戸塚まつりでパヤオクラフトの販売。(売上金 65604 円)

(3) パヤオセンターとのオンライン交流

2023年3月5日、本団体学生2名がYMCA パヤオセンター滞在中に日本とパヤオセンターをオンラインで結び、明治学院の中・高・大学生と教職員を対象にオンライン交流会を実施した。当日は明治学院高校の生徒1名、明治学院東村山高校の生徒1名、明治学院大学の学生7名、教職員3名、学校法人明治学院より小暮前学院長の合計14名の方にご参加いただいた。交流会では、子どもたちが踊りを披露、絵当てクイズを行った。その後、日本からオンライン参加している明学生からセンター職員に対して



人身売買に関する質疑応答の時間をとり、私たちも理解を深めることができました。

2. 感想・活動を通して得た学び

(1) タイのYMCA パヤオセンターへの訪問

●私自身が高校2年生の時から交流を続けてきて、世界的なパンデミックでなかなか訪問することができなかったが、今回遂にセンターを訪問することができた。センター滞在中、職員の方に人身売買の現状やそれを防ぐための警察・YMCA パヤオセンター・弁護士など専門家などで構成される組織について、訪問当時にセンターに住んでいた子ども達がどのような過程を経てセンターに来たのかをお話して頂き、時に胸が痛くなるようなこともあった。また一部の子どもの出身地であるラオスとの国境近くの山岳の村に足を運び、山岳地帯に住む人々がどのような暮らしをしているのか視察をした。率直な感想として、家の造りは完全なものでなくとも貧しく、驚きを隠せなかった。今回の訪問を通して、「人身売買」だけでなくタイにおける「貧困」というものにも着目すべきであると気づくことができた。2023年度も本制度の採用を受け、活動を継続するため、今後は貧困の根幹を探り、少しでも自分たちが何か改善できないかを探りたいと考えている。

(法学部グローバル法学科2年 丸山 智義)

(2) パヤオクラフト販売

●戸塚まつりではパヤオクラフトの販売を通して、多くの人とパヤオの現状についてお話しすることができた。またメンバーにとっても今まで以上にコミュニケーションを取ることができ、仲を深める機会となった。今後も積極的にこのような機会に参加し、少しでも多くの方に自分たちの活動を知っていただけたらと思う。

(国際学部国際学科2年 飯見 来未)

●パヤオクラフトを販売した事で、パヤオの子ども達を支援できただけでなく、日本の方にも、我々にとっても、パヤオの現状や素敵な子ども達によるクラフトの緻密な技術、また、この活動の概要を知る良い機会になれたと思う。更に、横浜YMCAやセンターの方々とも深く関わる事ができたきっかけの活動だったので、今後は戸塚まつりやクリスマスだけでなく様々な場所で展開し、沢山の人がクラフトを通してパヤオの人たちの凄さについて、また、様々な問題について知ってほしいと思った。



(法学部グローバル法学科2年 宮崎雅空)

●クラフトの販売を通して、我々の活動やタイの現状を多くの人に広めることができたと思う。実際に購入して下さった方に限らず、興味を持ち足を止めて下さった方がいることに大きな意味があると思う。今後もパヤオクラフトを通じて日本国内でのタイの実態の認知、そしてタイの子ども達への支援へと繋がられるよう活動に励んでいきたい。また、Be With Phayaoメンバーとの交流の機会になり仲を深めることができたので嬉しかった。

(文学部フランス文学科1年 三上 真歩)

●戸塚まつりでパヤオクラフトを販売したことで多くの方にパヤオの子ども達の現状を知って頂けた。想像以上に興味を持って頂く方が多く、自分達の経験をお話できる良い機会であった。また、YMCAの方々のサポートがありこのような活動をすることができた。今後は、引き続き訪問をして感じたこ

とやパヤオの子ども達の現状をクラフト販売だけでなく多くの機会では伝えられたら幸いだ。また、クラフト販売は今年度2回のみだったので販売できる機会を増やせたらと思う。

(法学部グローバル法学科2年 宗像 大樹)

(3) パヤオセンターとのオンライン交流・勉強会

- 実際にパヤオの子ども達と交流する事で現地の状況やセンターの環境、子ども達が踊ってくれたタイ北部の伝統ダンスなど、タイの文化を知るきっかけとなった。また、現地の方々にとっても折り紙や日本のクイズなど日本の事を知ってもらえる良い機会になったと思う。

(法学部グローバル法学科2年 宮崎 雅空)

- 実際にパヤオセンターとオンライン交流をしたことで、センターでの子どもたちの生活や置かれている状況をこれまで以上に知ることができた。また、タイと日本の互いの文化を理解し合い、学び合う機会となった。タイの貧困や人身売買についての知見を深めることができ、このことが勉強会の成功に繋がったと思う。多くの人にタイの現状を認知してもらうためには、まず我々自身が十分な知識を得る必要があると勉強会を通して感じた。そのために今後も現地との繋がりを大切に、今まで以上に活発な交流を図りたい。

(文学部フランス文学科1年 三上 真歩)

3. 今後に向けて

今後、日本と現地の交流を通じて、異文化交流や、貧困、人身売買など、様々な課題への理解を深め、その知識を実践的に活用することで、支援活動や新たな取り組みを展開していきたい。来年度の活動として、パヤオセンターの訪問とパヤオクラフト販売の継続、そしてパヤオミールプロジェクトを新たに企画したいと考えている。このプロジェクトを通じて、現地で知ったタイ料理を学食で提供し、「食」を切り口に貧困・人身売買について広く明学生に知ってもらえる機会を作りたいと考える。

(法学部グローバル法学科2年 丸山 智義)

6. いつでもボランティアチャレンジ（通称：いつボラ）

（1）総括

「いつでもボランティアチャレンジ（以下、いつボラ）」は、本学の在学生在が自ら企画したボランティア（社会貢献）を实践したいと思った「その時」に申請できる奨励金制度である。年度内のいつでも申請ができ、ボランティアセンターの教員（センター長、センター長補佐）、職員（含むボランティアコーディネーター）が面談を実施し、プロジェクトの採用可否を判断する。

募集要項は、以下の通りである。

テーマ	「社会課題への第一歩」 社会課題を発見し、解決のためにアクションを起こすきっかけとなるプロジェクトを支援します。これまで活動実績がないスタートアップ的要素の強い取組や、単発の企画を歓迎します。
奨励金	個人：上限 20,000 円 団体：上限 50,000 円 ※減額して採用となる場合があります。 ※採択金額に未使用金が生じた場合は、未使用金額を返還する必要があります。
応募資格	・本学に在籍する教職員（非常勤も可）が、一人、または複数メンバーで実施するプロジェクトであること。 ・活動開始から活動終了まで3ヶ月以内で完了するプロジェクトであること。 ・個人または団体の採用回数が、1年度で2回を超えないこと。
応募方法	「いつでもボランティアチャレンジ応募用紙」をボランティアセンターメールアドレス宛に提出
選考方法	応募書類（「いつでもボランティアチャレンジ応募用紙」）をもとに、面談（45分程度）を実施
援助対象	活動現場までの交通費・宿泊費、消耗品費、イベントゲストへの謝礼・交通費、図書購入費、印刷・製本費、通信・運搬費、使用料・貸借料（イベント会場施設使用料など） ※次の項目を除く：人件費（プロジェクトメンバー自身の給料やアルバイト雇用等）、会議会合費（「食」等をテーマとし飲食がプロジェクト遂行上必要な場合は使用可）、機器やアプリケーション購入費（パソコン、タブレット、プロジェクター、ビデオなど）、寄付に該当するもの

2023年度は、12件の申請があり、全件が採用となった。うち1件が教員応募で、昨年度の応募資格変更（教職員にも応募資格を付与）の成果がみられた。扱う社会課題も、多文化共生、文化、環境、人権、障害、LGBTQ、地域など、バラエティに富んでおり、ゼミや授業で学んだことを現場で実践するようなプロジェクトも昨年度に続き採用されている。秋学期に応募が集中しているが、春にコロナウイルス感染症が5類に移行したことに伴い、活動の立ち上げや活動内容の検討が進み、秋学期以降の応募につながったものと考えられる。

一方で、昨年度の応募実績より、応募のきっかけはボランティアセンター職員からの声かけまたは教員からの紹介がほとんどであることが明らかとなり、直接的なアプローチ以外の制度周知が課題となっていた。そこで、今年度は学内での制度の浸透を目指しチラシの作成を行った。チラシには実際の採用者の経験談も掲載し、制度の活用イメージを具体化できる内容となっている。今後チラシを使いより広く、効果的な制度活用を促していきたい。

ボランティアセンターの制度
いつでもボランティアチャレンジ応募受付中（チラシ）



（職員 菊池 範子）

(2) 2023年度助成企画一覧

応募日	実施日	プロジェクト名	決定額	使用額	申請者(団体の場合は団体名)
2023年 6月15日	2023年 8月6日	多文化共生ワークショップ	¥50,000	¥50,000	多文化共生の会
2023年 7月25日	2023年 10月27日	当事者から学ぶ認知症とともに生きやすい社会づくりプロジェクト	¥50,000	¥50,000	社会福祉学科 金ゼミ
2023年 9月25日	2023年 11月2日	金山小・金山中との対面交流	¥50,000	¥50,000	りもぐるみ
2023年 10月3日	2024年 2月7日	華道で繋ごう地域の輪!	¥20,000	¥17,427	石井 優衣
2023年 10月18日	2023年 12月14日	神奈川在日コリアンインカレサークル映画上映会	¥50,000	¥44,460	神奈川在日コリアンインカレサークル
2023年 10月27日	2023年 12月16日	外国にルーツを持つ子どもの居場所作り(クリスマス交流会)	¥50,000	¥31,826	明石ゼミ
2023年 11月13日	2023年 12月13日	MSC 漁業認証の認知度向上のためのスタートアップイベント(仮)	¥5,000	¥4,968	私立大学初の 海の環境プロ ジェクト
2023年 11月10日	2023年 12月13日	デリバリーボーイズって何? aktaと語る性の話	¥20,000	¥20,000	松田 実久
2023年 11月10日	2024年 1月10日	手話映画上映会&講演会	¥50,000	¥46,390	手話学習者の 集い
2023年 11月20日	2023年 12月8日- 2024年 3月8日	つながりと居場所を考えるプロジェクト~ふらっと集まることの可能性~	¥46,000	¥40,446	クローバーハート Jr.
2023年 12月11日	2023年 12月23日	クリスマスお菓子でつくろう! ~Create opportunity~	¥25,000	¥16,967	Create opportunity team
2023年 3月12日	2024年 3月19日- 3月24日	四万十町における鉄道を利用した地域活性化プロジェクト	¥20,000	¥20,000	田畑 宏基

多文化共生ワークショップ 活動報告書

2023年8月21日

多文化共生の会 社会学部社会学科3年 山田 康裕
国際学部国際学科4年 大塚 千雛

活動実施日 2023年8月6日

活動実施場所 海鮮居酒屋浜焼き「かいちゃん」

1. 活動内容

① 企画の背景と目的

このイベントの企画に思いついた背景は①在日外国人の問題を一人でも多くの人間に知ってもらう、②日本人と在日外国人が共に交流できる場所を作る、③学生のレポート課題のもとなる体験の提供を作るという3つの動機から始まった。このイベントでは、「在日外国人と日本人がともに社会で生きていくために必要なことは何か考える」を目的とした。

② 当日の活動実施内容

内容
<p>ワーク1 街歩き</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループごとに外国につながるスポットを探す街歩きを行った。多文化共生に関するビンゴカードを使い、身近にある「多文化共生」について考えた。

<p>昼食・レクリエーション</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ミャンマー料理を食べながら、ミャンマーに関するクイズを行い、異文化への理解を深めた。
<p>ワーク2 在日外国人の「リアル」に向き合う</p> <ul style="list-style-type: none"> ・在日ミャンマー人の日本での生活を中心とした講演を行った ・講演後、参加者からゲストスピーカーに対する質疑応答を行い、在日外国人の現状に対する理解を深めた。



ワーク3 ワーク1・ワーク2を通して、考えたことの話し合い・発表
当日の活動を通じて、グループで多文化共生に向けて必要なことは何か、ダイヤモンドランキングを使いながら、考え、それを発表した。



2.活動を通じて得た学び

今回、このイベントでは、参加者の方々が在日外国人に積極的に質問し、在日外国人の現状を知ろうとする姿や他の参加者と共に多文化共生に向けて考え、一生懸命話し合っている姿を見て、このイベントの目的を達成したと考える。今回のイベントで、日本人と在日外国人が話し合う姿を見て、在日外国人と日本人が気軽に交流できる場所や機会を作ることが重要だとより深く学んだので、このようなイベントを増やしていきたいと思う。

ました。今回は、お互いの近況報告をするために、30分ほど面会しました。まず、昨年交流に付き添ってくださった先生からBさんの近況について伺い、次に、Bさんのクラスの合唱練習を拝見しました。その合間にBさんが来てくれて、少し話をしました。

◇ 活動を通して得た学び

まず、少人数クラスの子どもたちとの交流を通して、私たちと会わなかった半年間で、子どもたちはかなり成長したと感じました。彼ら同士の団結力が高まり、しっかりとけじめのある行動がとれるようになっていたことから、オンラインでも定期的に交流することの重要性に気づきました。

月1回という数頻度の少ない交流を楽しみに、次の交流までに何をできるようにしたいか、何を話したいかを考えて生活することにより、心身の成長が促進するのではないかと考えました。このことから、オンラインの交流であってもボランティア活動を通して子どもたちに与える影響は決して小さくはなく、子どもたちにとって価値ある経験をさせることができているのではないかと気づきました。

次に、金山中学校のBさんに関して、付き添いの先生は、「交流前は落ち着きがなく、他の同学年の生徒に比べて忍耐力や協調力に欠ける部分があったものの、ここ半年間は自分から進んでクラスの仕事をしたり、学業面で飛躍的な成長を遂げたりしている」とおっしゃっていました。実際に私たちが見たところ、Bさんは他の生徒に完全に溶け込み、仲良く過ごせている様子でした。Bさんと話した時も、前よりも落ち着いて話を聞けるようになったり、人の話に突っ込みを入れることさえもできるようになったりして驚きました。

このことから、以前Bさんと交流した際、私たちは、話し手に回りBさんのペースに合わせることや、何か少しでも進歩があったらたくさん褒めることに留意していましたが、そのスタンスがBさんの自己肯定感を上げ、成長に繋げることができたのではないかと改めて考えます。また、交流終了後も、クラスの生徒や先生など周囲の人が温かく見守ってくれていることも、Bさんの成長に繋がっていると考えます。今後も機会があれば訪問し、私たちもみんなを見守っているということを、交流を通して伝えていくことが重要であると気づきました。



華道で繋ごう地域の輪！

文学部芸術学科2年 石井 優衣

✿活動実施日 2024年2月7日

✿活動実施場所 前田町町内会館



活動内容

私は、大学生と地域コミュニティとの繋がりが非常に薄いことに問題意識を持っていました。小学校、中学校では、私自身公立学校であったこともあり、部活や学校として地域のイベントに参加する機会も多くありました。しかし、大学生になり学校が少し地元から離れると、自然に地域のイベントや自分の地域そのものとは疎遠になると実感しています。

そこで、何か地域と大学生の繋がりを強めることに貢献できないかと考え、私の特技である華道を活かして、イベントを開催することを決めました。私の地元の東戸塚にある、東戸塚地域ケアプラザ様にこの企

画を提案させていただき、手厚いお力添えのもと前田町町内会館のサロンひだまりでのイベントとして実現に至りました。

今回の企画において私が目指したのは「華道教室」ではなく「華道を用いた繋がり」であったので、当日は、トランプを使ったゲームなどのレクリエーションを取り入れて、「上位入賞者は花の優先選択権が得られる」というルールを設定しました。そのあとは、参加者の方に、レクチャーを交えながらお花を自由に生けていただいて、写真を撮り合ったり、お互いを褒め合ったりと楽しくコミュニケーションをとることができました。

活動を通して得た学び

実施当日より前の日程で、顔合わせもかねて参加者の皆さんと一緒にボッチャで遊んだ時に、「若い人と話すことがないから新鮮でうれしいわ」と言っていたことが印象的でした。私だけではなく、若者全体が地域との繋がりが薄くなっていることを実感しました。年齢もとても離れているので、参加者の皆さんとうまくコミュニケーションが取れるか不安でしたが、実施当日は、レクリエーションを取り入れたことで、私自身も、「主催者である私」から、「参加者の私」になることができ、和気あいあいとした雰囲気を作ることができたと思います。

また、反省点として華道を教えることに夢中になり、いわゆる「雑談」が少なくなってしまうことに気が付きました。人と人の関係を作るためには、やはり相手自身のことも知らなければならないと思います。ボランティア活動外での地域の繋がりを継続するために、これは不可欠な要素であると考え、新たな課題として次回のボランティアに活かしたいと思います。

参加者の私。

「参加者の私」という視点が今回得られた一番の成果であると思います。前回のボランティアの際は、主催者の私と参加者の方という関係を当たり前として認識していましたが、今回のボランティアにおいて、自分が「一参加者」になれたことで相手も受け取りやすく、コミュニケーションの活発な、「人のためのボランティア」が実現すると確信しました。



レクリエーションの様子



沢山の方に参加していただきました！



参加者の作品

「神奈川在日コリアンインカレサークル映画上映会」

団体名「神奈川在日コリアンインカレサークル」
2023年12月14日(木) 17:00-19:00
明治学院大学横浜キャンパス 8号館 821教室

活動内容

2023年が関東大震災から100年という節目の年ということもあり、その際に起きた朝鮮人虐殺の証言映画である『隠された爪跡』(作・呉充功監督)を上映した。昨今「朝鮮人虐殺はなかった」などといった言葉たちが喧伝されている中、「あったことをなかったことにしてはならない」という作中の台詞のように、人災で犠牲になった人々を記憶し、どのようにこの問題と向き合うべきかを考えるべく企画を始めた。映画の上映にとどまらず、朝鮮近現代史や在日朝鮮人史などを専門とする本学の教養教育センター鄭栄桓教授とともに「Q&Aセッション」を実施し、ともに考えていく機会とすべく様々な意見が交わされた。セッションにおいては、映画を見ただけでは掴みづらかった時代背景や、後景化された日本人と在日朝鮮人の関係性などについて言及がなされた。加えて、参加者からの質問に鄭教授が答える形で議論がなされた。朝鮮人虐殺についての政府の対応について鄭教授は「解決の手段を取らず、隠蔽という方策をとってきた」と指摘し、事後処理の問題点を述べた。そして、現代に生きる私たちはこの問題にどう向き合うかについては「差別の対象となっている人を同じ人として考えられるか」という思考が重要であるとした。国際化が進む日本社会において、関東大震災時の朝鮮人虐殺について考えないことは、植民地主義的な思考を放棄しないことと同義である。このように関東大震災時の朝鮮人虐殺を記憶し、ともに考えていく」きっかけになったと考える。

活動を経て得た学び

日本人という属性をもって朝鮮人虐殺を考えていくことは、鄭教授が述べたように「瞬間的に苦しいことではあっても、人間性を回復するプロセス」となりうる。二度とこのような惨劇が起こらないように、そして加害の土壌が生まれぬように学び続けることが大切であると実感した。これからも在日朝鮮人として歴史に向き合う立場というものを忘れずに活動し、サークルのメンバーとともに学んでいこうと改めて考える機会となった。



【上映会の様子】



【Q&Aセッションの様子】



【観客の皆さま】

いつでもボランティアチャレンジ 団体活動報告書

① クリスマス交流会

明石ゼミ

活動実施日 12月16日 活動場所 多文化共生スポットワールドキッズ



クリスマス会 プログラム

活動内容

秋学期から横浜市内にあるコミュニティハウスで外国にルーツをもつ子どもたちを対象とする学習支援に参加していました。その活動を通し、学習支援という座学だけでは日本語を使う機会も減り、楽しさを伝えることに限界を感じました。そのため座学ではない環境で日本語を楽しく学んでもらうことができる機会づくりとしてクリスマス会の開催を企画しました。

具体的には内容の企画、当日の進行サポートを行いました。支援員の方と相談を重ね、日本語に壁がある子どもたちにも楽しんでもらえる企画に努めました。まず中国語できらきら星、日本語でジングルベルを合唱し、その後フルーツバスケット、爆弾ゲームなどのゲーム、ダンス発表、最後にサンタクロースからプレゼントを渡してもらいました。司会台本などを作製し、中学生には会を進めてもらう運営側の経験をしてもらい、簡単なゲームを行うことで小学生など日本語があまり分からない子たちにも楽しんでもらえるような会を意識しました。



フルーツバスケットの様子



ツリーの飾り付けを作る

活動を通して得た学び

普段は言語の壁などもある子どもたちだが、歌やゲームなどを通し日本語を使ってコミュニケーションを取る場でも楽しさを感じてもらえた結果、母語ではない言語を使う環境でも子どもたちに居場所として感じてもらえるきっかけづくりになったのではないかと思う。私たち自身この活動を通して、子ども達の課題を

6. いつでもボランティアチャレンジ (通称：いつボラ)

実際に目の当たりにし、楽しんでもらえる環境があることが永続的な居場所づくりにも繋がるということを感じ学びとなった。





海の環境プロジェクト

【活動内容】

プロジェクトの大きな目的は、大学の食堂でMSC認証商品を使ったメニューを取り入れることです。食堂でのメニューを提案すると同時に、生協にてMSC認証付きの商品を置いて頂くことも目標のひとつとして活動していきたいと考えております。このプロジェクトを通して、学内でMSCの認知度を高め、ひとりでも多くの人が生活の中にサステナブルな食材を取り入れるきっかけをつくることが目標です。食を通して私たち学生が参加できるハードルを下げて、「身近に」、そして「持続的」につなぐ社会貢献の場を大学に導入したいと考えました。そこで、2023年11月27日（月）に「MSCとは何か」を知ってもらう機会をつくり、学内でプロジェクトを立ち上げるに至った経緯と共に、海の現状とMSCの重要性についてプレゼンを行いました。イベントには、学生10名（3.4年生8名、2年生2名）と、本学の卒業生向けの学内誌「Do For Others」より取材のご依頼を頂き編集担当3名の方にご参加頂きました。プレゼンの説明の途中で参加者に問いかけたり、答えてもらったりする場を設け、「明学生と共にプロセスの内側から作り上げる」イベントとなりました。



「MSC認証具材のおにぎり」を
参加者にプレゼントしました！！



【活動を通して得た学び】

初めに、イベントの運営にご協力してくださった鶴田先生、ボランティアセンターの方々、ありがとうございました。

今回、開催したイベントはプロジェクト運営メンバーが直接話せる場であると同時に、参加者との「対話をつくる場」でもありました。私たちに欠けている部分を「参加者の声を拾い、補う」ことの大切さに触れる学びになりました。このイベントに参加してくださった学生に興味を持っていただき、人から人へと興味関心の輪を広げ、学内プロジェクトとして盛り上げていきたいと思えます。

【イベントでの反省点】

- ・機材の準備が滞ってしまった→プロジェクターの事前予約を把握しておらず、直前になって使用許可が必要なことに気づいた為
- ・講演中に流す予定の動画の再生がスムーズにいかなかった→本番の条件下でのリハーサルをしておらず、詰めが甘かった
- ・少し時間が押してしまった→講演時間を短く見積もってしまった為

【イベント後に繋げたいこと】

教室の確保から講演本番、そして退室までの流れを掴むことができたので、イベントを執り行う上での経験を次に繋げたいです。加えて、基本的な機材の準備、スライドでトラブルがないかの確認、入念な時間の管理は、発表を行う中では基礎的なことではありますが、そこで一歩ずつ正確にステップを踏むことでスムーズに講演を進めることができるという学びも次回の活動に繋げることができると思えます。

デリバリーボーイズって何? akta と語る性の話

国際学部国際学科 3年 松田 実久

活動実施日 2023年12月13日(水) 12:00-14:00

活動場所 明治学院大学横浜キャンパス 4号館

【活動内容】

近頃、梅毒やHIVなどの性感染症に関するニュースを頻繁に目にするようになった。これを受けて、明学生にも性への関心を持ってもらいたいと思い、気軽に考えることができる場として、講演・ワークショップイベントを開催した。講演には新宿2丁目で活動を行うコミュニティセンターaktaのメンバーに登壇してもらった。aktaはアジア最大のゲイタウンと呼ばれる新宿2丁目でHIVの予防啓発活動を行うNPO団体である。活動の一環として、新宿2丁目のBARやクラブにコンドームを配達する「デリバリーボーイズ」があり、ボランティアとして参加したことをきっかけに今回のイベントを開催した。

当日は、開催時間の前にイベントの告知として、ボランティアセンター前でコンドームとaktaのパフレットを配布した。ワークショップでは「新宿2丁目ではなく、明学でコンドームを設置したらどんな反応が返ってくるか?」についてaktaのメンバーと一緒に考えた。



配布の様子



配布した資材

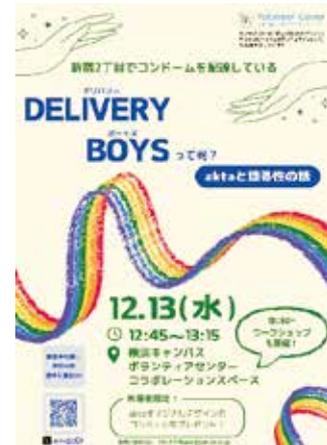


aktaメンバーによる講演

【活動を通して得た学び】

講演・ワークショップともに新しい意見を学生から聞くことができ、非常に充実した時間であり、私自身、勉強になることばかりだった。今回最も印象に残っているのは、告知のためにコンドームを配布した際、学生によって反応が全く異なっていたことである。ある女子学生には「私は使わないので要りません」と返されたり、ある男子学生には喜ばれたりした。そして、留学生は興味を持ってはくれるものの、「要らないです」と断られた。他さまざまな反応を見て、コンドームは男性が使用する物や恥ずかしい物と考える学生が多いということが今回の発見だった。使用の有無に関わらず、コンドームそのものに触れてみるという機会が必要であり、それが性感染症の予防や知識に繋がるのではないかと今回の企画を通して考えることができた。

今回、いつボラ制度を利用して初めて企画を実施したが、苦勞したことはタスクの多さである。考案から実施まで期間が短かったこともあるが、ポスターや広報文章の制作、メール対応や制作物の修正など、限られた時間の中ですべて1人で進めなければいけなかったことが非常に大変だった。そんな状況の中、akta のメンバーやボランティアセンターの職員の皆様方の手厚いお力添えのおかげでイベントを成功まで導くことができた。



広報用ポスター

そして活動を進めるにあたり、自分自身も性感染症への関心がより強くなり、今後も性に関する勉強会やボランティアなどの活動に参加していきたいと感じた。加えて、イベント企画のきっかけとなった akta の活動にも更に関わりたいという思いと共に、他の明学生にも akta の活動を知ってもらいたいと今回のイベントを通して強く感じた。今後は今回自身が感じたことやワークショップで出た新しい考え方を参考に、より明学生に性感染症や新宿 2 丁目に関心を持ってもらえるようなイベントを企画したい。

手話映画上映会&講演会 活動報告書

☆**団体名** 手話学習者の集い

☆**活動実施日** 2024年1月10日(水) 17時-19時

☆**活動実施場所** 横浜校舎821教室

☆活動内容

手話が「手真似」と呼ばれて禁じられ、口の動きを読み取る「口話」で話すことを強いられていた時代をテーマにした聾宝手話映画「卒業～スタートライン～」を鑑賞し、実際に谷進一監督のお話を聞くことで、障がい者差別の歴史への理解を深める、ということを目的にこのプロジェクトを発足しました。それにより、現代にもある差別について考えることで社会的課題の一つである障がい者差別の解消を図る、ということも最終的な目的です。このプロジェクトは明学生を対象に実施しました。企画開催にあたり、教養教育センター猪瀬浩平教授の授業「グローバル社会と市民活動入門」にて企画開催の旨をアナウンスする機会をいただき、そこで出会った同じ目的を共有できる仲間と一緒にプロジェクトを立ち上げることになりました。その後は、谷監督への連絡や会場の手配、当日どのような流れで進めるのか、等の打ち合わせをしました。当日は企画メンバーと参加者で映画を鑑賞し、谷監督を交えて映画の感想の共有やそれに伴うディスカッションをしました。

☆活動を通して得た学び

手話映画の上映ということで、上映会に来てくださった方々は学内手話サークル「ぼっけ」のメンバーが多くいました。上映中は皆が集中して映画に見入り、その後のディスカッションでは熱のこもった会話が会の終了時間ギリギリまで続きました。その時代の歴史を映画で知ること、過去から現代にもある障がい者差別について考えるきっかけになった、という意味では上述の企画の目的は十分に達成されたと考えています。この活動を通して学んだことは、様々な人と意見を交わすことで同じ映画でも違った見方ができる、という点です。手話学習者の集いのメンバーの一部は既にこの映画を何度も観たことがあります。しかし、その後の意見交換では私が想像もつかなかった意見がたくさん出てきて、一人ではなくたくさんの人と同じものを鑑賞することで新しい発見がある、ということ学びました。今後は学外にも視点を広げ、この映画をきっかけとしてもっと色々な人と意見交換がしたいと考えています。

☆活動の様子☆



つながりと居場所を考えるプロジェクト ～ふらっと集まることの可能性～ 活動報告書

団体名：クローバーハート Jr.

背景

以前より都内の河川敷のゴミ拾いや生活困窮者の支援をしているグループに参加していたが、2023年の春からは社会福祉学科生/卒業生/他大学の有志学生が中心となって川沿いのゴミ拾いと野宿生活者へのアウトリーチを始めた。さらに、以前から交流のある生活困窮者の方の居場所作りや講師の方と自分達の活動を考える学びの場を設けることを目指して本企画は始まった。ただこの企画は参加者の自己負担で活動しており、活動をより持続可能な形にするためにいつボラに応募した。

企画目的

生活困窮者の方の孤立に焦点を当て、当事者の方々がつながりや居場所を少しでも感じられる場を作ることを目的とした。生活困窮者の方は経済的理由等から外出機会が少なく、社会的孤独に陥りやすい。このことに課題意識を持ちまた交流のある困窮者の方々の外出機会を作り、楽しみとつながりを感じられる会を設けることでこの課題への解決に一步でも繋げていきたいと考えた。

また、河川敷の清掃活動と通して出会った野宿生活者の方との関わりから、この人がある周辺住民から疎まれて、またある周辺住民は受け入れて会話をしていることを目の当たりにし、この人との関わりを通して貧困と排除の問題を考えようとした。

加えて、自分達の活動を振り返る学びの場を設けることで「居場所があるということの意義」など居場所とつながりについて考えを深め、困窮者支援だけではなくさまざまな社会課題に対して今後自分達がどのように行動していくのか考えたいとした。

本企画の概要

① 清掃活動とアウトリーチ

月に一度、駅から河川敷まで道端に落ちている吸い殻やペットボトル・空き缶を中心にゴミ拾いを行い、河川敷で暮らす野宿生活者のもとへのおにぎりや飲み物を持って伺う。

② クリスマス会

大学近くの公共施設にて、生活困窮者の方をゲストとして迎えてみんなで楽しむ会を行なった。普段は外出機会が非常に限られている方々なので共にゲームを行い、水族館でイルカショーを楽しむなど人とのつながりや居場所を感じられる場を作ることを心がけた。

③ 勉強会

明治学院大学社会福祉学科卒業生で明学の非常勤講師の吉羽弘明先生と、私たちが今まで向き合ってきた社会課題について知見を深める機会を作った。この活動以外の生活困窮者支援活動に参加し、孤立の問題について関心があるメンバーが多いため、孤立の典型例の一つであるひきこもりの支援に関するドキュメンタリーを視聴し、それを糸口に貧困、つながり、居場所ひいては社会について考え、今までの活動や自分と社会の関わり方を見つめ直し、今後の在り方を模索する時間を持った。

「クリスマスお菓子でつくろう」活動報告

主催 Create opportunity team 滑川 遼(社会学部社会福祉学科 3年)
児玉 萌花(社会学部社会福祉学科 3年)

〈活動内容〉

2023年12月23日(土)に、放課後デイサービスの子どもたちとクリスマスにちなんでお菓子を使って思い思いの作品を作る企画をふれっぷ金沢文庫で実施しました!

チョコパイにチョコペンでキャラクターを描く子どもや、ウエハースやポッキーを使って家を作ったり、船を作るなど子どもたちの独創性が光るたくさんの作品が目を引きました。コンセプトであるクリスマスにちなんで、プレゼントがもらえるようにビンゴ大会を実施し、子どもたちも楽しく活動を終えることができました!



〈活動準備〉

活動に使用のお菓子は、子どもたちにより独創性のある作品を作ってもらえるように、ウエハースやポッキーなど組み合わせやすいお菓子を選び購入しました。

また、参加学生や職員の配置も子どもの特性や好みに合わせて事前に事業所と協議して決定しました。



〈活動反省〉

当初は子どもたちとお菓子を作る企画を構想していたが、障がいの程度が子どもによって差があったため、全児童、生徒が参加しやすいお菓子を使った工作企画を実施することとしました。それでも子どもによってはなかなか参加が難しい子どももいたため、再度実施する際には、より多くの子どもが参加できるような企画を立案したいと考えています。



四万十町における鉄道を利用した 地域活性化プロジェクト

文学部芸術学科2年 田畑 宏基

【活動概要】

高知県四万十町を走る JR 四国の路線、予土線。清流四万十川沿いを走るローカル線が現在、存廃の岐路に立っています。JR 四国の中で最も経営が厳しい路線の一つですが、地域の足や観光資源としての役割を持っています。このまま無くなってしまうのは地域社会にとって大きな損失だと考えています。現地と関わるきっかけとなった「ボランティア市民活動論」(猪瀬浩平先生)の授業では予土線についてのレポートを執筆し、活性化案をいくつか提起しましたが、今回はその具体化あるいは新しい案の実現に向けた第一歩として現地での聞き取りを実施しました。

活動日時:2024/03/19~2024/03/25、活動場所:高知県四万十町、四万十市など

【四万十町役場での聞き取り】

事前に提案した活性化案として以下の5つがあります。役場の皆様にはこれらを提案したうえでご意見をいただきました。

1. 待合室を活用した学生向け自習室
2. 高齢者向け割引定期券
3. 車内販売による地産品の販売
4. 周辺施設と連携した企画乗車券の販売
5. レンタサイクルの拡充

・にぎわい創出課/地域おこし協力隊の方より

にぎわい創出課の方2名と地域おこし協力隊の方1名にお話を伺うことができました。地域おこし協力隊は予土線沿線の大正地区で商店街活性化と道の駅支援にそれぞれ一名ずつ配属されている(2024年3月時点)ほか、十和地区でもまちづくり支援に関わる協力隊員がいらっしゃるとのことです。このほかにも特産品づくりや農業、地域振興などに関わる方が、予土線沿線にいらっしゃるとのことです。次回ヒアリング時にこちらの方々とも交流できればと考えます。鉄道関係だけでなく、地域全体を盛り上げることが本プロジェクトの目的であるので、様々なフィールドで繋がればと考えます。

・企画課の方より

企画課の予土線担当の方2名にお話を伺うことができました。こちらでは活性化案についてより具体的にお話しさせていただきました。

1. 自習室について、窪川駅構内は JR 管轄のため、費用対効果を考えると難しいそうです。いっぽうで土佐大正駅は町の管轄のため、実現の可能性があります。
2. 割引定期券については JR と町と密に連携したうえでの取り組みとなります。財源の確保や費用対効果を考えるとこちらもハードルは高そうです。ただ、鉄道の定期券で並行する

【↑土佐大正駅コミュニティスペース】バスも乗車可能となる「モーダルミックス」の実証実験が行われているため、利便性向上の取り組みとしてはすでに始まっています。

3. 車内販売については運営側で積み込みの算段や衛生管理を厳格に行わなくてはならないとのこと。(なお、木工品などは衛生面では影響なし)また、一般運用向けに行う場合には収益問題もあります。一方で、観光向けにはすでに「しまんトロッコ」車



6. いつでもボランティアチャレンジ（通称：いつボラ）

内で実績があり、観光向けとしての施策であれば実現可能性はあるそうです。

4. 企画乗車券についてはこれまでの活性化案の中で最も動きやすい可能性があるとのこと。周辺施設（例えば「海洋堂ホビー館四万十」など）との調整は必須ですが、すでに予土線の駅から施設へのバスも走っているため、これらを組み合わせてのパッケージ化も可能かもしれません。

5. レンタサイクルのさらなる拡充については、愛媛県支庁の一つ、南予地方局が詳しいとのことでご紹介頂くことが出来ました。

事前に考えた以上の案についてご意見を頂いたとともに、新たな案についてもお話が出来ました。現在、役場内では体験型のツアーの取り組みなどを実施したいという声があるそうです。四万十町の魅力を盛り込んだ地域の自然や文化の体験プログラムとして実施し、その中に予土線を組み込むことも考えられます。車窓から自然を楽しめるほか、地域交通について考えてもらう機会とすることもできます。またもちろん鉄道は移動手段であるので、ツアーには組み込みやすいのではないのでしょうか。

【四万十町観光協会での聞き取り】

四万十町観光協会では企画の「広報」面でご協力いただけるとのお話を頂きました。鉄道を利用したのとして実際に同じく四万十町内を走る「土佐くろしお鉄道」を組み込んだツアーもすでに広報されていて、予土線の場合も審査を通れば可能とのことでした。

【地元住民の方の声】



・クラインガルテン四万十の方の声

県外からの方も多い滞在型農業体験施設「クラインガルテン四万十」利用者の方には鉄道利用者目線での話を伺いました。「1日数本は使い物にならない」「ディーゼルの独特なおみや、揺れが苦手」という鉄道へのマイナスイメージを持った方もいらっしゃいました。そして皆さんが「車がないと生活できない」と話されており、鉄道やバスの公共交通で需要を満たせていないことが分かりました。

・四万十町在住の方の声

【↑クラインガルテン四万十での交流会】 四万十町十和地区（十川駅の地区）に在住の方々は「地元利用について、地元住民がもっと深刻に考えるべきだ」と話されていました。また、窪川地区在住の方からは予土線の「荷物輸送についてもっと強化してみたらどうか」とご意見を頂くことが出来ました。地元の方も予土線に対してもっと関心を持つような取り組み・仕掛けが必要であることを感じつつ、これまでの鉄道の固定観念に縛られずに新たな可能性を見つけることも課題として見えてきました。

【路線実地調査】



ヒアリングのほかにも今回の訪問では実地調査として予土線の列車3本と窪川、土佐大正、十川、江川崎の各駅を調査しました。列車調査では「鉄道ホビートレイン」「普通列車」「しまんトロッコ」の3種類に乗車しました。このうち観光需要がある「鉄道ホビートレイン」と「しまんトロッコ」は乗車人員も20人程度ありましたが、「普通列車」に関しては5人以下と厳しい現実を実感しました。「普通列車」での活性化の取り組みを展開させられれば、より需要も増えるかもしれません。駅調査では季節の飾り付けやコミュニティスペース・ふれあいノートの設置、駅へのアート作品の施しなど各駅工夫されていることが分かりました。

【↑しまんトロッコ】
現在、利用者の数は厳しいところですが、地域住民が仮に鉄道を利用しない時でも駅が交流の場になれば、活性化につながるのではないのでしょうか。

【活動を通じた学びとこれからの展望】

大学で文献やデータをもとに執筆したレポートの内容を基にしてヒアリングを行いました。やはり現地で暮らす人だからこそ見える視点や思いがあることがよくわかりました。まずは地域の方々と連携することが今後、具体的に地域活性化の取り組みを行うにあたって重要であることを実感しました。今回の訪問では人、モノ、自然について現地の空気を感じ、交流する「実際に訪れて学ぶこと」の重要性を感じました。今後は予土線を体験型ツアー・フィールドワークと組み合わせて、地域交通について考えてもらうプロジェクトなどを第一弾として実施することも考えています。その中で出た意見やフィードバックを「地元の方により関心を持ってもらえる取り組み」「地域利用促進の取り組み」に繋げれば、長期的な取り組みが可能だと考えます。

7. 1 Day for Others (通称：1Day)

(1) 総括

2023年度の「1 Day for Others(1日社会貢献プログラム)」は、年間90プログラムを実施し、延べ367名の学生が社会貢献活動を体験した。新型コロナウイルス拡大の影響から「1 Day for Others」も、ここ数年は縮小せざるを得ない状況が続いていたが、2023年度はコロナ禍以前の2019年度並の実施を目指し、年間プログラム数は過去最多を更新することができた。様々な現場で学生が活動させていただく機会をいただけたことは、受入団体の皆様のご尽力があったからこそであり、まず冒頭に感謝申し上げたい。

2023年度のプログラムそれぞれの内容について、特に意識をして受入団体の皆様と検討したことは、いかにダイレクトに学生が現場の社会課題に触れることができるか、という点である。座学やワークショップよりも実際に現場の方々と関わることや直接的に活動をして現場を知ること比重をおき、かつ少人数でのプログラムを多く実施した。実際に現場で活動することによって活動を自分事として捉えながら、当事者意識を持って体験に取り組めたことに加え、少人数で活動をしたことにより「明治学院大学から来た大勢の中の自分」ではなく「一人ひとりとしての個人」である意識が参加した学生の中に芽生え、一人ひとりが主体性を持って活動ができたように考える。その結果として活動をした後も、体験を大学に持ち帰ってその領域について深く考えたり、さらには受入先での活動を継続している学生も多く見受けられた。

一方で、2023年度の参加者は、年間延べ人数で367名に留まっており、これは最多参加人数を数えた2017年度の762名から、半数以下に減じていることになる。はじめの一歩として1日だけボランティアに触れてみる間口が広いプログラムの性質からみると多くの学生に広くボランティアの機会を提供しているとは言い難く、大きな課題と言える。2023年度は、専門職であるボランティアコーディネーターを中心に新規受入先として様々な団体に協力をお願いをし、多くの新規プログラムを実現することが出来た。2024年度についても、上述のように新規プログラムを増やすことを検討すると同時にコロナ禍の影響でプログラム実施を中断していた2019年度以前の受入先の皆様にもプログラム再開を無理のない範囲でご検討いただけるよう、働きかけたい。そして、2024年度も学生一人ひとりにとって「1 Day for Others」への参加がボランティアの楽しさを感じる機会、ボランティアの意義を考えるきっかけ、ボランティア受入団体の想いを知る一助になることを期待する。

(職員 青木 洋治)

(2) プログラムのようす



スペシャルオリンピックス日本・神奈川



久地円筒分水サポートクラブ



マドレボニータ



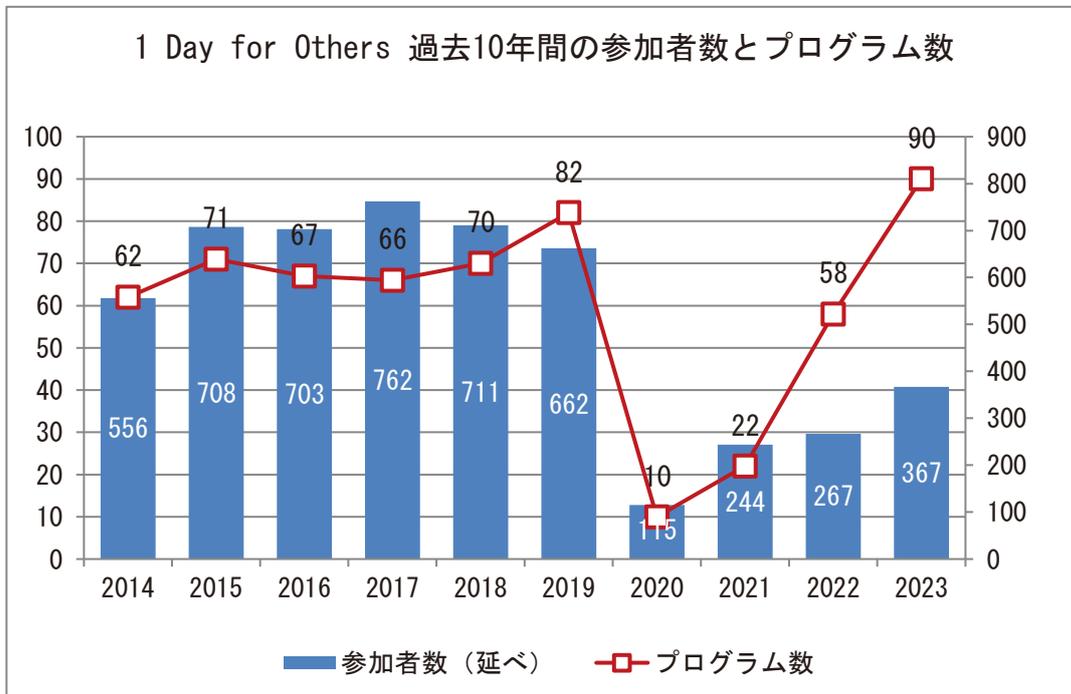
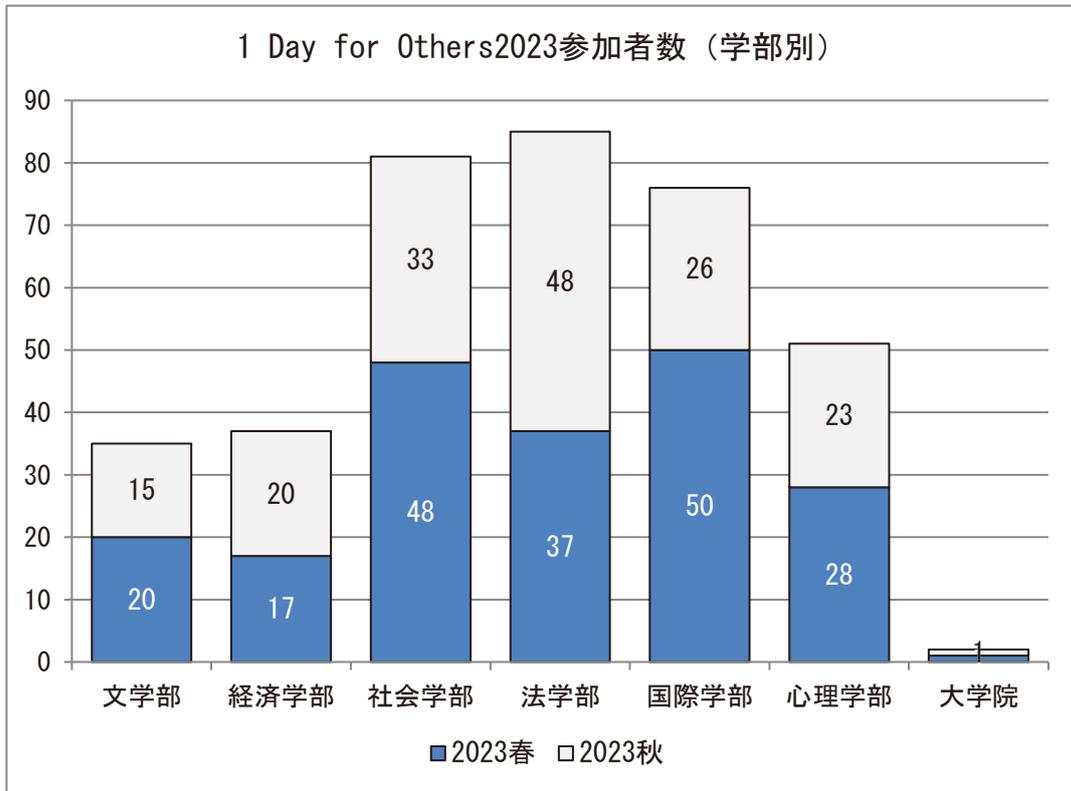
日本赤十字社本社



銀座ミツバチプロジェクト



港区立エコプラザ



1 Day for Others

(2) 実施プログラム一覧

<春学期>

NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	参加者 (名)
1	ファイバースイクルネットワーク (FRN)	着物の再循環! 「春のリサイクルきものフェア」①午前の部	4/26	3
2	ファイバースイクルネットワーク (FRN)	着物の再循環! 「春のリサイクルきものフェア」②午後の部	4/26	3
3	社会福祉法人 興望館	学童の子どもたちと思い切り遊ぼう!	4/26	3
4	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ①田おこし編	4/29	5
5	社会福祉法人 興望館	学童の子どもたちと思い切り遊ぼう!	5/11	4
6	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ②代かき編	5/13	6
7	社会福祉法人 興望館	学童の子どもたちと思い切り遊ぼう!	5/19	4
8	港区立エコプラザ	エコライフ・フェア	5/20	4
9	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ③苗取り・田植え編	5/20	3
10	逗子フェアトレードタウンの会	フェアトレードを通したまちづくりに参加しよう	5/20	10
11	芝の家	多世代交流拠点「芝の家」を体験! 世代を超えたコミュニティづくり	5/20	4
12	特定非営利活動法人ワールドランナーズ・ジャパン事務局	チャリティーリレー for Africa	5/21	8
13	特定非営利活動法人 銀座ミツバチプロジェクト	銀座の屋上でサツマイモを植えよう!	5/24	8
14	横浜市立倉田小学校	小学校の遠足をお手伝いしよう!	5/31	10
15	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク①	6/4	1
16	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク②	6/7	4
17	久地円筒分水サポートクラブ	住宅街にも国の登録文化財はある! 円筒分水の美化活動に参加しよう!!	6/10	8
18	戸塚桜セーバー	柏尾川プロムナード花壇の花植え	6/10	6
19	横浜山中中華学校	中華学校の子どもたちと、SDGsをテーマにゲームやクイズと一緒に遊ぼう!	6/14	10
20	チャレンジコミュニティ・クラブ(港区社会福祉協議会)	誰もが暮らしやすい街へ 港区バリアフリーマップ作成 大門駅~芝公園周辺	6/15	3
21	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク③	6/18	3
22	見沼たんぼ福祉農園	農業で人の「輪」を広げよう! ー見沼たんぼ福祉農園【※6/18(日)@見沼たんぼ、6/23(金)@横浜校舎 両日参加できる方】	6/18	6
23	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク④	6/21	3
24	特定非営利活動法人マドレポニータ	エクササイズを通して、育児の課題やライフプランについて考えよう!	6/24	5
25	特定非営利活動法人 ブラチナ美容塾	男女共同参画フェスタinリーブラ ジェンダーフリーのおもちゃブースボランティア①	6/24	2
26	特定非営利活動法人 ブラチナ美容塾	男女共同参画フェスタinリーブラ ジェンダーフリーのおもちゃブースボランティア②	6/25	2
27	チャレンジコミュニティ・クラブ(港区社会福祉協議会)	誰もが暮らしやすい街へ 港区バリアフリーマップ作成 日向坂周辺	6/29	2
28	社会福祉法人 のびのび福祉会	障がい者支援に1日参加しよう	6/30	2
29	特定非営利活動法人 国際交流ハーティ港南台	日本語学習ボランティア~様々な国の方々と国際交流をしよう~	6/30	7
30	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク⑤	7/2	4
31	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク⑥	7/5	4
32	港区立麻布子ども中高生プラザ	子ども達と七夕遊びをしよう!	7/5	7
33	一般社団法人神奈川県障がい者スポーツ協会	バラスポーツ教室体験会	7/8	9
34	神奈川県立地球市民かながわプラザ (あーすぶらざ)	第22回カナガワピエンナーレ国際児童画展 表彰式	7/9	7
35	100人のお産展実行委員会	100人のお産展! 関連企画・映画『SANBA』とお産の振り返りシェア会をサポートしよう!	7/27	2
36	平塚バプテスト教会	教会の会堂で「こひつじ食堂」のサポートをしよう	7/28	2

7. 1 Day for Others (通称：1Day)

37	日本赤十字社	日本赤十字社本社見学とワークショップ	8/3	11
38	港区立エコプラザ	エコプラザ夏まつり2023	8/6	3
39	港区立エコプラザ	エコプラザ夏まつり2023 ペーパークラフトブースサポート	8/6	2
40	横浜市港南国際交流ラウンジ	外国につながる子どもたちの夏休みの宿題をサポート！①8/21	8/21	4
41	横浜市港南国際交流ラウンジ	外国につながる子どもたちの夏休みの宿題をサポート！②8/22	8/22	6
42	戸塚区生活支援センター	精神疾患のある方との交流を楽しもう！	8/28	1
			計	201

<秋学期>

NO	企業および団体名	プログラム名	実施日	参加者 (名)
1	港区高輪地区総合支所	子ども防災フェスで活躍！防災ブースのお手伝いで子どもたちと交流しよう	9/23	5
2	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ④稲刈り・稲架かけ編	9/23	3
3	柏尾川魅力づくりフォーラム	みんなで川をきれいに！「第33回戸塚駅周辺魅力づくりアップキャンペーンin柏尾川」	9/30	8
4	特定非営利活動法人 舞岡・やとひと未来	舞岡公園「小谷戸の里」で稲刈りイベント	10/1	4
5	港区立エコプラザ	区民まつり 綿織り体験ワークショップ運営①	10/7	4
6	港区立エコプラザ	区民まつり ミツロウエコラップ作りワークショップサポート①	10/7	1
7	下倉田地区連合会	2023年度第22回下倉田地区連合会スポーツレクリエーション大会	10/8	4
8	港区立エコプラザ	区民まつり 綿織り体験ワークショップ運営②	10/8	4
9	港区立エコプラザ	区民まつり ミツロウエコラップ作りワークショップサポート②	10/8	1
10	特定非営利活動法人 ブラチナ美容塾	芝浦港南ふれあいまつりに出展「ブラチナ美容塾の展示ブース」運営を手伝おう！①	10/14	3
11	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク⑦	10/15	3
12	特定非営利活動法人 ブラチナ美容塾	芝浦港南ふれあいまつりに出展「ブラチナ美容塾の展示ブース」運営を手伝おう！②	10/15	3
13	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク⑧	10/18	2
14	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ⑤脱穀編	10/21	3
15	特定非営利活動法人 ブラチナ美容塾	高齢者施設での"ハンド&ネイルボランティア"①	10/23	2
16	特定非営利活動法人 ブラチナ美容塾	高齢者施設での"ハンド&ネイルボランティア"②	10/25	2
17	特定非営利活動法人 銀座ミツバチプロジェクト	銀座の屋上でサツマイモを収穫しよう！	10/25	8
18	チャレンジコミュニティ・クラブ(港区社会福祉協議会)	港区社会福祉協議会バリアフリーマップ作成	10/26	3
19	有限会社 ネバリ・バザーロ	フェアトレードの現場を体験！	10/27	2
20	とつか宿場まつり	2023とつか宿場まつり (10/28)	10/28	6
21	とつか宿場まつり	2023とつか宿場まつり (10/29)	10/29	5
22	芝の家	多世代交流拠点「芝の家」いろはにほへとまつり！ 世代を超えたコミュニティづくり	10/29	5
23	公益財団法人横浜YMCA 湘南とつかYMCA	YMCA祭・い〜とつか祭「キャンドルホルダーライトづくり」	11/3	2
24	NPO法人 みなと外遊びの会	高輪森の公園 プレーパーク⑩	11/8	2
25	はだの子ども支援プロジェクト ゆう	外国ルーツの子どもたちをサポートしよう①	11/8	2
26	はだの子ども支援プロジェクト ゆう	外国ルーツの子どもたちをサポートしよう③	11/8	2
27	はだの子ども支援プロジェクト ゆう	外国ルーツの子どもたちをサポートしよう②	11/8	2
28	特定非営利活動法人 スペシャルオリンピックス日本・神奈川	舞岡公園「小谷戸の里」お米作り体験 ⑥荒おこし編	11/11	2

7. 1 Day for Others (通称: 1Day)

29	チャレンジコミュニティ・クラブ(港地域パーキンソン病友の会)	港地域パーキンソン病友の会支援	11/12	3
30	上倉田地区連合会	上倉田地区連合会主催の防災訓練でこどもとあそぶ!	11/18	2
31	MOA美術館 神奈川県児童作品展 戸塚児童作品展実行委員会	「戸塚児童作品展」ギャラリーのスタッフを体験してみよう	11/19	2
32	認定特定非営利活動法人JUON NETWORK (樹恩ネットワーク)	多摩の森・大自然塾	11/19	1
33	港区立エコプラザ	プラザ神明フェスティバル	12/2	2
34	神奈川県立地球市民かながわプラザ (あーすぶらざ)	キャンドルナイト2023	12/2	5
35	あーすフェスタかながわ企画委員会 ステージ部会	あーすフェスタでかながわの多文化共生を盛り上げよう!	12/3	10
36	戸塚桜セーバー	柏尾川プロムナード花壇の花植え	12/9	10
37	横浜市戸塚区役所区政推進課	戸塚区のオールストーリー インタビューー募集!	1/17	1
38	チャレンジコミュニティ・クラブ(港区立赤羽小学校)	赤羽小学校 昔遊び授業協力	1/18	1
39	特定非営利活動法人 地球の木	ラオスに絵本を届けよう	1/18	2
40	横浜山手中華学校	横浜中華街で春節を飾ろう!	2/8	6
41	有限会社 ネバリ・バザーロ	フェアトレードの現場を体験!	2/16	3
42	とつか宿駅前商店会	「とつか宿こんびら市〜にぎわい祭〜」を盛り上げて、能登半島地震の募金活動しよう!	2/17	6
43	戸塚区民文化センターさくらプラザ	さくらプラザ 春の芸術祭2024 ホールイベント	2/18	2
44	特定非営利活動法人 イランの障害者を支援するミントの会	国際協力団体の活動を紹介! ~かながわボランティアフェスタでブースサポート~①	2/22	2
45	特定非営利活動法人 イランの障害者を支援するミントの会	国際協力団体の活動を紹介! ~かながわボランティアフェスタでブースサポート~②	2/23	2
46	特定非営利活動法人 ブラチナ美容塾	~高齢者向けサポート講座~ パーソナルカラーで春を楽しく	3/13	3
47	Connection of the Children	障がいのある子どもたちの「一歩を踏み出す」お手伝い	3/20	7
48	神奈川県立地球市民かながわプラザ (あーすぶらざ)	世界のあそび王座決定戦2024	3/23	3
			計	166

8. ボランティア・カフェ (通称: ボラカフェ)

(1) 総括

「ボランティア・カフェ (以下、ボラカフェ)」は 2020 年度のコロナ禍における模索の中で、自宅から参加できるオンライン対話の場「おうち de ボラカフェ」として始まった。2022 年度より対面 (オンライン参加とのハイブリッド型を含む) 開催が多くなり、2023 年度は全 10 回 (2022 年度は 7 回) を対面で開催することができた。内容として、上映会 1 回、中高大連携 4 回、横浜開催 5 回、白金開催 6 回であった。

2023 年度の特徴の一つは、ボラセン外部からの求めに応じてカフェを企画したことである。大学生に社会課題やそのための活動について知ってほしい、という外部団体からの要請を受けて、そのための場づくりを行なった。中には学生自身が携わっている団体のボランティアを増やしたいという理由で、学生が企画したものや、教員による持ち込みの企画も行われた。各回で少数ではあるが、教職員の参加が見られた。

また、本学がウクライナから招聘している研究員との交流の機会を設けた。ウクライナを戦争の視点からのみ見るのではなく、文化理解や国際交流を目的に、高校生を交えて楽しく英語でコミュニケーションする機会となった。

一方で、ボラセンの内部企画ではなく、持ち込みの企画が優先されたことから、ボラセン内部での日程調整が難しく、同日開催で重複してしまった回が 2 度もあった。また、12 月～1 月は学生の参加が少なく、開催時間の設定や関連授業との連携を図るなどの工夫が課題としてあげられた。

(ボランティアコーディネーター 磯野 昌子)

開催日	タイトル	ゲスト	場所	参加数
4/25(火) 12:45-13:25 13:30-13:50	命のボランティア	京極徳幸さん (東京都赤十字血液センター)	白金校舎ボラセン 横浜校舎コラボ	10 人 (学生 10)
6/29(木) 15:15-16:45	LGBTQ をめぐる社会状況と若者の居場所づくり	遠藤まめたさん (一般社団法人にじーず代表)	白金校舎 1454 教室	22 人 (学生 21) (教員 1)
7/21(金) 13:00-15:45	Let's try Ukrainian cooking! ～料理で学ぼう! ウクライナ～	ウクライナ招聘研究員	横浜校舎コラボ MG カフェ	15 人 (学生 9) (高校 5) (職員 1)
7/31(月) 13:30-15:00	JICA 専門員に聞く、国際緊急救援の最前線!	勝部司さん (JICA 国際緊急援助隊事務局/国際協力専門員)	白金校舎 1252 教室	28 人 (学生 13) (学姓 11) (高校 2)
10/25(水) 15:15-16:30	SDG3「すべての人に健康と福祉を」～イランの障害者の自立をめざして～	パシャイ・モハメッドさん (特定非営利活動法人ミントの会理事長)	横浜校舎コラボ	8 人
12/13(水) 13:00-15:20	Let's enjoy Ukrainian Christmas! ～ウクライナのクリスマスを楽しもう～	ウクライナ招聘研究員	白金校舎記念館 2 階大会議室	9 人 (学生 6) (高校 2) (職員 1)

12/13(水) 13:00-14:00	子どもへのメンタルヘルス教育 ~授業内容を考えてみよう!~	横浜チャイルドライン 古森恵美子 (企画・サポート学生/社会福祉学科3年)	白金校舎 1251 教室	3人
12/22(金) 13:30-15:00	緊急上映会『ぼくたちは見た ガザ・サムニ家の子どもたち』	明治学院大学国際平和研究所共催	白金校舎 1253 教室	5人 (学生1) (高校2) (教員2)
1/15(月) 12:45-15:00	パレスチナのために私たちができること	高橋英江さん (〈パレスチナ〉を生きる人々を想う学生若者有志の会 / Climate Justice 活動家)	横浜校舎 536 教室	5人 (学生3) (教員2)
1/16(火) 12:50-13:20 13:30-14:30	1部: 「やさしい日本語」って知っていますか? 2部: 「地域の日本語教室」ってどんなところ?	かながわ国際交流財団	横浜校舎 420 教室	9人 (学生8) (教員1)

(2) 各回報告 (サポート学生の学年は2023年度当時)

SDGs カフェ「命のボランティア」	
ゲスト：京極 徳幸さん (東京都赤十字血液センター)	
2023年4月25日(火) 12:45-13:25、13:30-13:50	
ボランティアセンター (白金)、(横浜) コラボレーションスペース	
参加者：学生 10名	
内容	
<p>毎年学内で献血を行なっている「東京都赤十字血液センター」の京極さんより、「命のボランティア」と題して、赤十字社の重要な活動である献血について、ドキュメンタリー映像等を見ながらお話をお聞きした。白金にゲストと学生が一人、その他の学生はすべて横浜のボラセンに集合してオンラインでお話をお聞きした。2部制とし、後半は昼休み後にグループディスカッションを予定していたが、授業のために途中退出する学生が多く、個人的な質疑応答にとどまった。</p>	
参加者の声	
<p>◎「命に直接関わる仕事」に初めて触れることができたことが衝撃だった。近所にも献血カーが高頻度で訪れていて、日常の光景のようにになっているが、献血カーの役割は私の想像以上に大きく、命を背負って活動していることに、生死の根源に関わる献血の重要さを感じた。若者の献血参加人数がどんどん減っていることに対し、高齢者の人数が増えているということで、献血に対する意識の違いに気づいた。キャンペーンを企画したり、通いやすい献血ルームを設置している中で、そもそも若者の「社会貢献」に対する考え方にも社会人と差があるのではないかと思った。若者を取り込むために複数の課題があり、すぐには解決できない難しさを感じた。</p> <p>◎献血を必要としている8割の人々が、病気によるということを知りました。また、針が怖い、実際に誰かのためにしているという実感しにくいといった意見は承知ですが、なぜ、年々、献血をする人の数が減少しているのかをもっと詳しく調べてみたいと思いました。</p>	

LGBTQ をめぐる社会状況と若者の居場所づくり

ゲスト：遠藤 まめたさん (一般社団法人にじーず代表)

2023年6月29日(木) 15:15~16:45

白金キャンパス 1454 教室

参加者：学生 21名、教員 1名

内容

最近、ネットを中心に LGBTQ の人権運動に対するバックラッシュが大きくなっている。中でも、特にトランスジェンダーに関するデマが広がり、当事者への攻撃も激しい。ゲストの遠藤まめたさんは、トランスジェンダーとしての自身の経験を語りながら、LGBTQ の若者向けの居場所づくりなどの活動をしてきた。また、サイト「trans.101 はじめてのトランスジェンダー」で、トランスジェンダーに関する SNS 情報のファクトチェックをおこなうなど、ネット上で流れる情報に対して介入してき

た。そうした活動経験から見えてきた、現在の LGBTQ の置かれている状況について講演していただき、ネットの力が増す中で、デマに抗する方法、あるいは飲み込まれない力とは何かを考えた。

まず、LGBT の子ども・若者の居場所についての話があった。遠藤まめたさんが代表を務める「一般社団法人にじーず」は、2016年に発足した「10代から23歳までのLGBT(かもしれない人含む)のための居場所」である。東京や埼玉、札幌、仙台、新潟など全国各地で運営されており、現在14拠点で開かれている。こうした場所が必要なのは、LGBTQ ユースが、学校でも家庭でも「本当の自分」を誰も知らず孤独感を抱えがちであり、困りごとを相談できる場所が周囲にないことが多いからだ。にじーずでは、「周縁化されている子ども・若者が集まる場そのものに力がある」と考え、「問題」ばかりにフォーカスせず、ユースを支援対象者としてのみ見るのではなく、社会の多様性を促進するパートナーとしてとらえるという理念を大切にしているという。

その後、SNS を中心に激しさを増している LGBT 団体が行うユースワークへの偏見に基づいたネガティブキャンペーンや中傷、トランスジェンダーに対するデマや「女性 vs. トランスジェンダー」という誤った構図によるバッシングについての現状と、それに対抗するための取り組みについて話された。遠藤さんは、後者に対する策として、トランスジェンダーに関するデマに関するファクトチェックをサイトで公開したり、トランスジェンダーの人たちの実際の様子を知ってもらうための冊子を作ったりすることで対抗策をとってきた。そして、最後に反差別運動の難しさについても触れられた。ネット上で、すでに本人が間違いを認めて謝罪している昔の発言を蒸し返して攻撃してしまう問題や、怒りは拡散されるが穏健派に「ミュート」されてしまう問題について触れ、「活動とは、本来は積みあげていくもの」と語った。

参加者の声

◎ LGBT の当事者の方から生でお話を聞く機会というのは中々ないため、とても貴重な時間だった。当事者の方が実際にどのようなことで悩みを抱えていて、どのような取り組みがあるとそれらが改善されるのかなど、具体的なお話を聞いた点が良かった。

◎ なかなかオープンデーを開催できない各地方での活動をどう増やしていくかという問題の話で、そもそもの田舎の人間関係の密着さを起点に何故活動が難しいのかととても分かりやすくお話し下さり興味を持ってました。地方に行けば行くほど嫌な密着さは深くなっていくであろうし、それを原因に LGBTQ+ に該当する大人が都会へ出てきてしまう為、にじーずの様な理解ある大人による活動の拠点を持つのが難しいという話でしたが、これを解決するには田舎のあり方そのものが変わる必要があると思うので、いずれ少しずつ実現されていって欲しいがかなり根深い問題であると感じました。



<中高大連携>

「Let's try Ukrainian cooking! ～料理で学ぼう! ウクライナ～」

ゲスト：ウクライナ招聘研究員 2名

2023年7月21日(金) 13:00～15:45

ボランティアセンター (横浜) コラボレーションスペース/MG カフェ

参加者：大学生 9名、高校生 5名、職員 1名

内容

本学で招聘研究員として来日しているウクライナからの研究員 2名を講師に招き、ウクライナ文化や地理など、英語によるプレゼンテーションを聞きながら、伝統料理の一つ、ヴァレーニキを調理して試食した。明治学院高等学校から高校生の参加もあり、当初は緊張した雰囲気だったが、全員が英語で自己紹介を行い、その後参加者自身からも好きな日本食は何か、といった質問をゲストに話しかけるなど、積極的に交流を楽しみながら、ウクライナ文化への理解を深め、料理を通してコミュニケーションの面白さや新たな視野を発見することができた。

参加者の声

- ◎ウクライナがとても自然豊かな国だということを知らなかった。
- ◎ウクライナ料理を食べたことはなかったが、身近な日本の食材でも簡単に作ることができ、美味しかった。



<中高大連携>

JICA 専門員に聞く、国際緊急救援の最前線！

ゲスト：勝部 司さん（JICA 国際緊急援助隊事務局／国際協力専門員）

2023年7月31日（月）13：30～15：00

白金キャンパス 1252 教室

参加者：大学生 11 名、高校生 2 名

内容

中高大連携プログラムの一環として実施し、高校生や大学生が、国際緊急救援の現場の話や講師の姿から、将来のキャリアを考えたり、世界の他者を想像できる力を養うことを目的とした。

昨今、気候危機の影響もあり、世界中で地震や台風などによる大規模な自然災害が起きている。地震大国である日本では、災害対策に関する豊富な経験と技術的なノウハウが蓄積されており、それらを開発途上国の災害救援に活かすべく「国際緊急援助隊」が JICA 内に組織されている。緊急救援の専門員として世界各国を現場で活躍されている勝部司さんより、緊急救援の実際、現場で起きていることについてお話を聞いた。まず、JICA という組織が行っていることの包括的な説明をしていただいた後、トルコ・シリア地震やフィリピンでの台風被災地など、海外緊急支援現場での体験談をお話いただき、現場での課題についても生の声をお聞きした。

参加した高校生からは、キャリア形成や語学力向上のための方法、必要な言語についてなど、将来に向けて、日頃の学習にいかすための意欲的な質問が活発になされた。

参加者の声

- ◎異文化の人たちと関わる時は、お互いの共通点を見出すという事や、どの場所に行っても知的な好奇心や関心を持ち続けることが大切だという話がとても印象的でした。知識を得るだけでなく、実際にその場所に行き行って実体験する機会を大切にしていきたいです。
- ◎全く現場のイメージがなかったので、お話を聞いて少し理解できたかと思います。たくさんの方が救助に向かって混乱する中で、連携と調整がより効率的に行動するためのカギだとわかりました。また、防災の重要性がわかりました。
- ◎近年紛争や地震など、海外で様々な困難に遭遇している中、実際に国際緊急救援の最前線に立っている方のお話を聞いて、大変勉強になり貴重な機会でした。特に、救援上の「ありがた迷惑」は物資だけではなく人材にも言えるということにはっとさせられました。どれだけ能力がある人が応援に行っても、混乱の中現地で大人数の統制を図るのは難しく、一人一人が冷静さを持って行動する必要、相手の状況を汲み取りながら上手く連携を育む必要があり、やる気だけではどうにもならない現状を知りました。

SDGs カフェ「すべての人に健康と福祉を」～イランの障害者の自立をめざして～

ゲスト：パシャイ・モハメッドさん (特定非営利活動法人ミントの会理事長)

2023年10月25日(水) 15:15～16:30

ボランティアセンター (横浜) コラボレーションスペース

参加者：大学生 8名

内容

自ら外国の地で障害者として暮らしながら、自国の障害者のために奮闘する講師の姿から、真の国際協力や多文化共生のあり方を考えることを目的に実施した。

初めにイランのお茶(ローズティーとシナモンティー)を淹れていただき、飲みながら歓談した。サモワールというインドの茶器も見せていただき、イランのお茶の文化に触れることができた。

それから、パシャイさんを囲んで、実際の活動の様子やテレビでとりあげられた時の映像などを見ながらお話を聞いた。おしんやアニメなどで日本に興味を持ったパシャイさんは、約20年前に来日し、専門である建築関連の仕事に従事したが、建設現場で事故にあい半身不随になった。日本で手術・リハビリをして車椅子で動けるようになったが、母国のイランに帰国したら自分は家から出られないことが分かり、母国の障害者のために活動を開始した。日本で使用されなくなった車椅子を集めて送り、使い方マニュアルを作成して指導したり、専門家を派遣したり、リハビリの施設を作った。日本のwiiなどのゲームもリハビリに利用した。さらに、故郷の自治体に働きかけ、道路の70%のバリアフリー化を実現した。さらに現在は、VRなどの新しい技術も使用して、障害者が様々な体験ができるよう挑戦されている。

参加者の声

- ◎自分が思いついた支援すべきこと(車いすを送る)だけではなく、相手のニーズ(道路舗装、使い方ガイドなど)を考えることの大切さを改めて実感させられた。話を聞くだけでなく、ゲストの方々とたくさん話せて良かった。イランのお茶がとてもおいしかったです!
- ◎日本とイランとの間の取り組み、繋がりを理解することができ、福祉について学ぶことができた。
- ◎ボランティアセンター内や、コラボレーションスペースまでの動線、多目的トイレの場所など、車椅子利用の視点から検討したことがなかったため、学内のバリアフリー化が未整備であることが分かった。車椅子のみでなく、多様な視点からのバリアフリー化を進めていく必要を実感した。



<中高大連携>

Let's enjoy Ukrainian Christmas! ～ウクライナのクリスマスを楽しもう～

ゲスト：ウクライナ招聘研究員 2 名

2023 年 12 月 13 日 (水) 13:00～15:20

白金校舎 記念館 2 階大会議室

参加者：大学生 6 名、高校生 2 名、職員 1 名

内容

2023 年 7 月に実施したボランティア・カフェの連続企画として、冬の時期に合わせてクリスマスに関連するワークショップを実施した。ウクライナでのクリスマスのお祝いの仕方など、講師からプレゼンテーション形式で紹介があり、その後参加者同士でウクライナの伝統的な布の人形と、クリスマスオーナメントを制作しながら交流を行った。地域でそれぞれ異なる祝い方や捉え方があることを学び、さらに質疑応答を通してウクライナの言語や文化についても理解を深めることができた。



参加者の声

◎ウクライナについて、ウクライナの伝統的なクリスマスについてたくさん知ることができた。伝統的なお祝いの仕方や慣習、食べ物など、全く知らないことが多く楽しかった。オーナメントやお人形作りを通して実際に自分の手で異文化を体験できたのも貴重な経験だった。

◎白金校舎での開催だったが、他学部の方や高校生など多くの方が参加していて、楽しく交流することができた。

◎ウクライナでのクリスマスの過ごし方についてプレゼンテーションを聞いた後、実際に参加者や研究員、職員の方とデコレーション作りができて、貴重な体験ができた。

子どもへのメンタルヘルス教育 ～授業内容を考えてみよう！～

2023年12月13日(水) 13:00~14:00

白金校舎本館 1251 教室

参加者：大学生3名

内容

特定非営利活動法人よこはまチャイルドラインで活動する学生による学生による企画。よこはまチャイルドラインは、子どもの声を受け止める活動をしている。

団体の活動概要をお話ししてもらった後、大学生ボランティアが主に担っている、子ども向けの出前授業について、参加者と一緒に意見交換を行った。

参加者の中には、団体の活動自体に興味を持ち、活動に関わった学生もいた。

参加者の声

- ◎ 子どもにかかる心身の不安定は顔や表情、行動に出るため私は、子どもと関わる時には敏感になります。良い情報を大学生に発信し、学生の持つ知識を持って子どもたちを助けられればいいと思います。

企画・サポート学生

古森 恵美子 (社会福祉学科3年)



<中高大連携>

緊急上映会・SDGsカフェ『ぼくたちは見た ガザ・サムニ家の子どもたち』

明治学院大学国際平和研究所共催

2023年12月22日(金) 13:30~15:00

白金校舎本館 1253 教室

参加者: 大学生1名、高校生2名、教員2名

内容

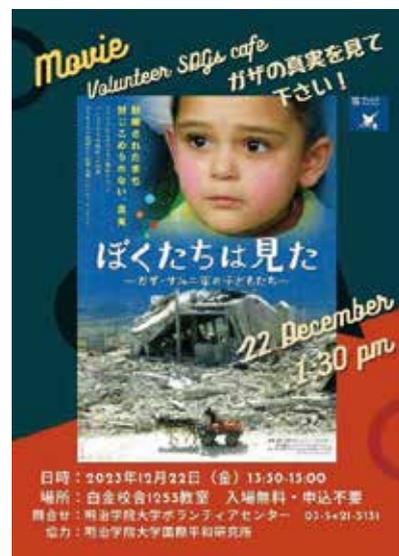
2023年10月7日に始まり日ごとに激化するイスラエルによるパレスチナ自治区ガザ侵攻を受けて、SDGs 16「平和と公正をすべての人に」の実現のために、緊急上映会を開催した。ガザでは、2008年末にもイスラエル攻撃により民家、モスク、工場、学校、オリーブ畑など、あらゆるものが破壊され、3週間で1400人が犠牲になった。大半が民間人であり300人以上の子どもたちが含まれていたことに衝撃を受けた古居監督は、真実を伝えるべく現地に入り撮影を行った。

今回は、古居みずえ監督により本学国際平和研究所に無償でご提供いただいた映像をお借りして、ボランティアカフェとして上映会を開催した。

「映画は、爆撃の下で子どもたちは何を経験したのか、そして爆撃のあと、どんな暮らしをしているのかということ、子どもたちの言葉と絵で描いています。それは同じ地球上で起きていることであり、遠い昔の話ではなく、今、このときも苦しんでいる子どもたちの話です。この子どもたちの心の叫びを、できるだけ多くの方々に耳を傾け、観ていただきたいと思います。(古居みずえ)」

参加者の声

◎15年前にも同じようなイスラエルによる攻撃があり、多くの子どもたちを含む一般市民が無差別攻撃によって犠牲になったことを知らなかった。攻撃が終了した後も、家族を失って心身を傷つけられた子どもたちが必死に生き抜こうとする姿に涙が流れた。今も同じ状況がガザで起きているのに、何もできないでいる自分をもどかしく感じた。



パレスチナのために私たちができること

ゲスト：高橋英江さん（〈パレスチナ〉を生きる人々を想う学生若者有志の会
/Climate Justice 活動家）

2024年1月15日（月）12:45～15:00

横浜校舎 536 教室

参加者：大学生 3 名、教員 2 名

内容

イスラエルによるパレスチナ自治区ガザへの攻撃に対し、世界各地で抗議活動が行われている。日本でも様々な抗議活動がおこなわれているが、関心を持ちながらもどのように関わったら良いのか迷っている人も少なくない。今回のボラカフェでは、「〈パレスチナ〉を生きる人々を想う学生若者有志の会」のメンバーを招き、抗議活動を始めることに至った経験を聞き、パレスチナで起きている問題への理解を深めるだけでなく、社会課題に直面したときに自ら活動を起こすことについて考えた。

この企画の発案者である本学社会学部の宮崎理准教授が進行を務めた。最初にゲストスピーカーの高橋英江さんから、Climate Justice 活動家としておこなってきた自身の活動内容についての紹介があり、占領や戦争こそが最大の環境破壊であるという問題意識について語られた。

その後、参加者それぞれこの問題についての考え、今後何ができるかということについて意見交換がおこなわれた。大学内で教員もこの問題について語ることを避ける傾向にあることへの疑問が出されると同時に、何かできたらと思っていながらきっかけを掴めずにいる学生もいるという話も出された。

また、昨年、学内の学生団体 be the light MGU でおこなったガザ地区で亡くなった人たちの追悼と、この問題に対する意識を喚起するためにキャンドルイベントを企画した学生から、同イベントについての報告もあった。足を運ばなくとも目につく形で可視化し、気持ちに訴えかけていく形の運動の有効性を評価する声も聞かれ、今後、明学内でできることについての意見交換がおこなわれた。



1部: 「やさしい日本語」って知っていますか?

2部: 「地域の日本語教室」ってどんなところ?

ゲスト: 諏訪 淳美さん、一氏 隼人さん (公益財団法人かながわ国際交流財団
・地域日本語教育推進グループ)

2024年1月16日(火) 12:50~13:20、13:30~14:30

横浜校舎 420 教室

参加者: 大学生 8 名、教員 1 名

内容

第一部では、多文化共生社会において、コミュニケーションに求められる「やさしい日本語」とはどのようなものか、なぜ必要なか、具体的にはどのような言い換えができるのかななどを、実際に使用しているテキストなどを見ながら実践的に学んだ。

第二部では、神奈川県内に約 250 あり、その多くがボランティアによって支えられている「地域の日本語教室」について、お話をお聞きした。地域の日本語教室は、日本語を学ぶだけでなく、生活情報を得る身近な場、仲間と出会う居場所であり、日本語を通じた相互理解・交流など、さまざまな役割を果たしている。後半では、「わたしの日本語教室」というテーマでどのような日本語教室を作りたいかを考えるワークを行った。学内のサークルと子どもたちを繋ぐ教室や、大学を拠点とした学習支援を行う教室など大学生ならではのアイデアが出された。

参加者の声

- ◎ やさしい日本語とはどのようなものかを知ることができました。授業で多文化共生について、学ぶ機会がありましたが、それらと関連付けて聞くことができました。
- ◎ 「やさしい日本語」をどのように使ったらよいか、具体的に説明していただき、わかりやすかったです。多文化共生の推進にあたり、神奈川県内には多くの国際ラウンジがある事がわかった。ボランティアの高齢化が懸念される中で、大学生としてどのようなことができるか、積極的にアイデアを出していきたいと感じた。
- ◎ やさしい日本語を教えるにあたって初めて知ること(言葉の選択によって伝わるものと伝わらないなど)たくさんあって学びになった。



SDGs Volunteer Cafe
ボランティアカフェ

24万人もの外国人居住者が暮らす神奈川県には約360の日本語教室があり、その多くがボランティアによって支えられています。授業を学ぶだけでなく生活情報を得る身近な場所でもある「地域の日本語教室」について知り、多文化共生社会について考えたいませんか?

・どちらか一方だけの参加も歓迎

1部: 「やさしい日本語」って知っていますか?
12:50-13:20 ラウンジとリナからでもOK

2部: 「地域の日本語教室」ってどんなところ?
13:30-14:30 611と有明ホール

ゲスト: 諏訪淳美さん、一氏隼人さん
(公益財団法人かながわ国際交流財団、地域日本語教育推進グループ)

1 / 16 Tue. (12:50~13:30)
会場: ボランティアセンター (横浜)

問合せ: 順治学院大学ボランティアセンター
Contact: 045-663-2056 (横浜)
申込みはボランティアポータルサイトから





9. 国際機関実務体験プログラム

(1) 総括

国際機関実務体験プログラムは、横浜・みなとみらい地区の国際機関で45時間から100時間の実務体験を行う、公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）と本学を含めた6大学との協働事業である。

国際協力や国際交流の実務を体験することにより、大学で修得した学問と実務機関での実践の融合をはかり、将来、国際性豊かな資質を持って世界的な問題を視野に入れて活動することができる人材育成を目的とする。

実務体験は、夏期と春期に行われ、派遣国際機関は6大学で割り振られている。2023年度は夏期・春期合わせて3名が公益財団法人横浜市国際交流協会（YOKE）、独立行政法人国際協力機構 横浜センター（JICA 横浜）、国際連合世界食糧計画 WFP 協会でのインターンシッププログラムを修了した。

緊張と不安に満ちた表情でプログラム開始を迎える学生たちが、最終報告会では派遣時よりも頼もしく、さらに成長した姿を見せてくれるのが、このプログラムの一番の醍醐味である。普段の学生生活では味わうことのできない新たな出会いや経験を通して、学生自身が今後の目標を考え、飛躍の機会となることを期待したい。

（職員 杉山 佳奈）

◇2023年度夏期プログラム実績

派遣人数	2名
派遣先	公益財団法人 横浜市国際交流協会（YOKE）1名
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップへの参加 ・多言語サポーター派遣・紹介事業（通訳ボランティアのための講座等）への参加 ・多言語情報発信事業への参画 ・中間、および最終報告会での活動報告
派遣先	独立行政法人国際協力機構 横浜センター（JICA 横浜）1名
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・各プロジェクトの見学、ヒアリング ・海外移住資料館等の運営補助 ・夏休みフェスタの企画、打ち合わせ、当日運営 ・中間、および最終報告会での活動報告

◇2023年度春期プログラム実績

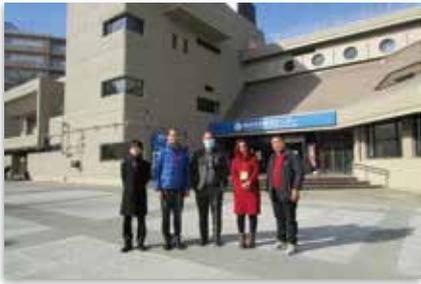
派遣人数	1名
派遣先	特定非営利活動法人 国際連合世界食糧計画 WFP 協会
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ・広報活動の補助、提案 ・学生企画（LINE スタンプ）の運営、打ち合わせ ・学校講演の補助 ・中間、および最終報告会での活動報告

(2) 派遣学生生活動報告

1. 派遣学生	文学部芸術学科2年 酒井 景多 ※学年は派遣当時
2. 実務体験先機関	公益財団法人横浜市国際交流協会 (YOKE)
3. 志望動機	私は一年間、留学生が住む国際学生寮で日本人サポーターとして彼らと衣食住を共にしてきた。その際、「私は何者か」という自己のアイデンティティについて問う機会があった。YOKE で様々な方と交流することでより自分のことをより深く知ろうと思い、プログラムに応募した。
4. 実習テーマ・ 達成度	<p>実習テーマ (興味・関心の中心、重視したこと、特に注力したいことなど) 様々な人の話に注意深く耳を傾けること、そしてそれを基に自分で行動することを最も重視した。</p> <p>達成度 (実習を振り返って) 大学の講義内でのグループ活動やアルバイト先からも「動きが変わった」と評価いただく機会が増え、実習テーマを達成し、自分の成長につながったと思う。</p>
5. 実務体験内容	<p>スケジュール、内容等</p> <ul style="list-style-type: none"> ●地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業への参加 <ul style="list-style-type: none"> ・YOKE 外国人親子日本語教室「なつやすみ YOKE おやこでにほんご」 ・ドゥルーズィ日本語ワークショップ ・日本語ボランティア入門講座 (外国人コース) ●ラウンジ連携支援事業への参加 <ul style="list-style-type: none"> ・国際交流ラウンジ協議会第1回連絡会 ・ウクライナ交流カフェ ●多言語情報発信業務 <ul style="list-style-type: none"> ・よこ yoko10 月号記事のやさしい日本語書き換えチャレンジ ●YOKE 語学講座の受講、補助 <ul style="list-style-type: none"> ・第3回～4回 コミュニティ通訳講座 ・英語 準中級、中級Ⅰクラス
6. 学び・気づき	<p>新たに学んだこと 最も印象的だったのは、「YOKE が作る地域コミュニティの特異性」「地域通訳における非言語的コミュニケーションの重要性」「やさしい日本語が持つ優しさと易しさの違い」の3点だ。インターン中に自分自身で感じたことであるが故に、自分の中のこれらの学びが持つ存在意義は大きいといえる。</p> <p>実習前と実習後の変化 初めてお会いする方々と一緒に実習や業務に参加するのは自分自身にとってかなりチャレンジングであった。それゆえ、実習開始直後は、自分で行動することをためらい、やや受け身の姿勢であった。しかしながら、回数を重ねるにつれ、自分の役割を自ら考えることが増え、結果的に自発的かつ活動的になっていった。実習を終え、その変化ないし成長は、報告書の中で言語化できるまでになった。</p> <p>実習によって得た知識やスキルなど 私が得た最も大きなスキルは、批判的思考だといえる。実習当初は、自分の存在価値を見出すのに試行錯誤を重ねた。その結果、私が見出した方法が批判的思考の活用である。外部から活動に参加する人間でないと分からないことが必ずあるからだ。実際、YOKE 語学講座の進行方法に関して、さらに改良できるのではないかと、これまでの経験から提案をさせていただいたこともあった。こうしたことの積み重ねが、批判的思考を伸ばしたといえる。</p>

<p>7. 特に印象に残ったこと</p>	<p>最も印象に残ったのは、YOKE に集まる方々の多様性である。ウクライナ避難民の方についてはニュースで耳にするだけであり、実際にお会いする機会があるとは想像していなかった。日本語ボランティア講座では、日本語を母語としない方々が、「日本人の振る舞い方」に関して議論しているのを見て、様々な思いが駆け巡った。また、出身国だけではなく、YOKE 語学講座には、シニア世代の方々が多く集まっており、英語に堪能な方もいた。様々な背景を持つ方々が集まる YOKE は、まるでつぼのようだった。</p>
<p>8. 課題・改善点</p>	<p>実習を通じて自分自身の課題と感じたこと、改善点 この実習を通して浮き彫りになった私の改善点は責任感の欠如だと思われる。確かに自発性をもって様々なことに挑戦したが、それに責任感が伴っていたか、と内省している。スケジュールの管理、片付けなど、誠実に対応できなかった場面もあったが、この実習を通して気づけたということをも前向きに捉え、改善を進めていきたい。</p>
<p>9. 今後へ向けて</p>	<p>この実習をどのように今後の研究・キャリアに活かしていきたいか “最も多様性に溢れた都市”ニューヨークシティに留学しようと考えている。今回の実習を通して、多文化共生に関する手がかりはつかめたものの、自分自身の専攻である芸術学との繋がりを未だに見出す事ができていない。そのため、この経験をアウトプットしながら、留学に活かしたいと思う。</p>
<p>10. プログラム風景</p>	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>外国人親子日本語教室「なつやすみ YOKE おやごでにほんご」に参加した際の様子</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>グローバルサンデーマーケットに参加した際の様子</p> </div> </div>

1. 派遣学生	国際学部国際学科4年 大寺 杏胡 ※学年は派遣当時
2. 実務体験先機関	独立行政法人国際協力機構 横浜センター (JICA 横浜)
3. 志望動機	私は高校生の時からずっと国際協力業界で働きたいと思っていました。そして大学生の間に、国際協力と言っても色々な形があることを改めて知り、自分と向き合うことで、今後の進路として、「臨床心理士として国際協力で貢献したい」と思うようになりました。 しかし、大学での自分の専攻と全く違う方向に進むことに不安が消えませんでした。そのため、今回のインターンで実際に業務を体験し、またそこで働いていらっしゃる方々のお話を伺うことは、自分のこれからの進路とは少し異なる観点から国際協力での貢献を知る機会になると考えました。
4. 実習テーマ・達成度	実習テーマ (興味・関心の中心、重視したこと、特に注力したいことなど) 自分のキャリアデザインを明確にする ①JICA で働く方々のキャリアパスを知る、特に心理系 ②JICA での働き方を知る ③自分の社会の立ち周り方を知る
	達成度 (実習を振り返って) おおむね実習テーマを達成することができたと考えます。また自分が想定していたよりも、はるかに充実した経験、多くの情報や人々に触れることができました。
5. 実務体験内容	スケジュール、内容等 ①事業概要説明、オリエンテーション ②所内挨拶、事業概要 ③日系人に関して、ライフヒストリー 海外移住資料館案内、ボランティア体験談、 海外移住資料館業務、運営手伝い ④ライブラリー業務 ⑤パワポ発表、訪問プログラム見学 研修医事業見学 ⑥ベトナムフェスタ 企画準備・打ち合わせ、振り返り ⑦最終報告会準備 全体振り返り・JICA 最終報告会
6. 学び・気づき	新たに学んだこと ・ JICA で働く方々の様々なキャリアパスや業務を知ることができた。 ・ 自分のキャリアデザインを相談したときに、「何を勉強したらいいかではなく、自分が好きな分野を探求し、専門性を高めれば良い。先進国にも新興国にも問題はあるとのことだから。」という言葉をいただき、まずは今自分の興味がある道を突き進んでみようと思っている。
	実習前と実習後の変化 ・ 心理の道に進むというのが確固なものになった。 ・ より国際協力業界で働きたいと思うようになった。
	実習によって得た知識やスキルなど ・ マイクロソフトのアプリの基本的な使い方 ・ 企画を一から立案すること

	<ul style="list-style-type: none"> ・資料館などを運営する側の知見を得られたこと
7. 特に印象に残ったこと	<p>JICA 横浜で働く方は、多種多様なバックグラウンドを持っていらっしゃるって、私も自分が好きなように進もうと思えるようになった。</p> <p>開発協力に対して疑問点があったが、授業で聞くよりも、実際に働いていらっしゃる方を見ることで、様々な工夫や心配り、準備があることを知れたことは非常に良かった。</p>
8. 課題・改善点	<p>実習を通じて自分自身の課題と感じたこと、改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対応力の無さ ・ファシリテーション力の無さ <p>もともと事業を始める前にリスクを洗い出すなどの準備をして本番にのぞむ計画型なので、突発的な対応や俊敏性が求められた際にうまく動くことができなかった。</p>
9. 今後へ向けて	<p>この実習をどのように今後の研究・キャリアに活かしていきたいか</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開発協力の関心を高める機会にしたい。 ・これを機に国際協力業界に実際に足を踏み込んでみたい。
10. プログラム風景	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>ネパールから来日した方々と 横浜市民防災センターを視察</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>ベトナムフェスタ・紙芝居を 行っている様子</p> </div> </div>

1. 派遣学生	社会学部社会学科3年 平原 愛理 ※学年は派遣当時
2. 実務体験先機関	国際連合世界食糧計画 WFP 協会
3. 志望動機	JICA の大学連携プログラムで食、農業を通じた国際貢献に興味をもち更なる知識習得をしたかったから。また、実務経験を通じた業界イメージや業務把握、社会に出る上でのマナーを身につけたかったから。
4. 実習テーマ・達成度	実習テーマ（興味・関心の中心、重視したこと、特に注力したいことなど） 『とにかく恐れず挑戦する』 ・より良い発表を作る為の資料集め、職員の方々の質問を通し現状理解をすること ・フィードバックを頂きながら、自分が作成した企画書をレベルアップできるように意識すること ・実習中思いついた企画案を実際に実行すべく、職員の方々への聞き取りを行ったり、実施機関へ提案すること
	達成度（実習を振り返って） 未来の自分に何ができるのかを考えることができた。
5. 実務体験内容	スケジュール、内容等 ・広報課題解決案の提案 ・学生による LINE スタンプ企画への参加 ・学校講演のお手伝い ・カップヌードルミュージアムでの研修 ・企画ミーティング
6. 学び・気づき	新たに学んだこと ・社会人スキル、礼儀について。 ・メール、office365 の使い方について。 ・根拠をもとに伝えること。 ・SNS を使った広報の課題について。 ・ターゲット層によってアプローチを変えること。 ・団体イメージを保ちながら広報活動を行うこと。 ・飢餓問題の現状とその対策について。 ・多様な寄付方法の展開とその課題について。
	実習前と実習後の変化 世界中で起こっている「飢餓」という社会課題をより当事者意識に近づけて考えることができた。
	実習によって得た知識やスキルなど ・プレゼンテーション能力 ・課題に対する現状、問題分析 ・ニーズに合わせた解決方法の提案 ・説得力をもたせた提案書の作成

7. 特に印象に残ったこと	<p>同じ派遣先で会った学生と飢餓問題について話していた際に、「支援されている国と支援している国が線引きされていて、いかにも可哀想な国という印象操作をされている点が腑に落ちない」という考えに衝撃を受けた。飢餓の問題を抱える国に対して、可哀想、といった暗い印象ばかりを持ってしまっていた自分に気づき、考えさせられる内容だったと感じている。また、カップヌードルミュージアムでの研修で学んだ日清食品創業者である安藤百福さんの言葉一つ一つが魅力的で、これから人生において悩んだときも、クリエイティブな思考を忘れず、様々な視点から物事を考えていけるようになりたいと思います。</p>
8. 課題・改善点	<p>実習を通じて自分自身の課題と感じたこと、改善点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・興味をもってもらうためにどのように情報を届けるかといった広報活動の難しさ ・WFP の理念を守りながら、既存の媒体や SNS を使うなどしてより間口の広い広報を工夫していくこと <p>飢餓問題の捉え方によって伝え方、伝わり方もかわりより多くの人に興味を持っていただくきっかけになるのではないかと思う。</p>
9. 今後へ向けて	<p>この実習をどのように今後の研究・キャリアに活かしていきたいか</p> <p>今後も関心を高めるために積極的に飢餓問題について考えるきっかけを提供したい。大学でも WFP の活動に関連した企画を検討しているため、成功に向けて頑張りたい。また WFP ウォーク・ザ・ワールドにボランティアとして参加し、実際に現場で参加者の方々と触れ合いながら、WFP 協会や飢餓問題への認知度を体感したい。</p> <p>将来的には国際貢献、国際開発の道に進みたいと考えている為、ファーストキャリアでは食、農業またはそれ以外のスキルを身につけられるような会社への就職を検討している。</p>

10. キャンパス別プロジェクト

白金校舎:TAKANAWA HOP WAY (高輪ホップコミュニティ活動)

(1) 総括

「TAKANAWA HOP WAY」は、東日本旅客鉄道株式会社(JR 東日本)が中心となって行っている高輪ゲートウェイ駅周辺のまちづくり活動で、ビールの原料となるホップを高輪地域の住民の方々、企業や学校などと協働しながら育て、収穫したホップで高輪産クラフトビールやソーダ、石けんなどをつくり、地域の絆やコミュニティの力を強め、高輪地域を盛り上げていく活動である。

明治学院大学では、この活動を開始した2021年度より法学部のゼミ活動として、総合企画室社会連携課とともに参加し、大学内でのホップ栽培を始めとし、ビールのラベルデザインやイベントでの商品販売の手伝い、地域の方々との交流など様々な活動に取り組んできた。3年目を迎えた2023年度はこのプロジェクトの管轄について本学学内で事業移管がなされ、ボランティアセンターが担当部署となり、全ての学部の学生を対象に公募した結果、手を挙げた2年生2名、3年生6名、4年生4名の計12名の学生がプロジェクトメンバーとして活動に取り組んだ。

2023年度のプロジェクトの特徴として、過去2年間に行っていた学内でのホップの栽培育成やビールラベルのデザインなどに加えて、本学と同じくホップを育てる拠点となっている高輪地区内の小中学校へ訪問して、作業をともにしながら交流する活動を行ったほか、地域イベントにブース出展をして、ホップを使った石けんづくりが体験できるワークショップを実施するなど、ボランティアセンターで活動をする意味をプロジェクトメンバーで考え、地域交流やまちづくりとボランティアを結び付けながら、新たな取り組みにも複数挑戦した。

2024年度も明治学院大学としては、継続してボランティアセンターが担当部署として「TAKANAWA HOP WAY」に参画することが決定し、2023年度と同様に12名の学生が選出され活動が始まっている。それに加えて、昨年度のプロジェクトメンバーも複数名オブザーバーとして活動に関わるようになった。今年度もJR 東日本をはじめ、地域の皆様や企業の皆様と連携し、高輪のまちに関わる人、このプロジェクトに関わる人の想いを大切に、明治学院大学もプロジェクトの一員として、まちの活性化の一助となるべく、プロジェクトメンバー一人ひとりが主体性を持って活動に取り組むことを期待したい。

(職員 青木 洋治)

(2) 活動報告



4月 ホッププランター設置



5月 ビール味決めイベントのようす



学生がデザインしたビールラベル2種



8月 ホップ収穫のようす



10月 港区内イベントでの石けんづくりWS



12月 最終イベントでのメンバー集合写真

横浜校舎：畑やろうじゃないか

(1) 総括

「畑やろうじゃないか」は、大規模農業による環境負荷や大学と地域の関係の希薄さに着目し、横浜校舎 4 号館のボランティアセンターに隣接する緑地スペースを活用して地域の農業技術者と交流しながら、学内で農作物を育てることで農業を通じたコミュニケーションを広げ、小規模農業の意義を考えたい、という学生の声から始まった活動である。2022 年度より本格的に活動を開始し、近隣の舞岡公園で農作業を行っている地域住民の皆様にもお力添えをいただきながら、春と秋にそれぞれ季節の野菜を自分たちで育て、収穫している。また、野菜の栽培と併せて学生が企画した「コンポスト活動で循環型キャンパスへ」は 2023 年度ボランティアファンド学生チャレンジの採用を受け、環境問題に関心のある学生たちが活動に参画している。

2023 年度は上級生による活動の甲斐あって新入生メンバーも集まり、空いた時間に交代で水やりや野菜の様子をチェックするなどして、無事に大根や里芋などの野菜を収穫することができた。また、農作業で出た不要な枝などを回収してコンポストで堆肥に変える取り組みも軌道に乗りつつある。収穫した野菜を使って、春学期はカレーを、秋学期は豚汁を学生たち自身が作り、お世話になった地域の方々も試食会にお招きして地域とのつながりや新鮮な野菜の美味しさを実感する機会もあった。机上ではなかなか学ぶことのできない、自然に触れることの楽しさや、仲間と何かを成し遂げることの喜びを全身で学ぶ学生たちの姿が印象的で、今後どのような活動を展開してくれるか、期待したい。

(職員 杉山 佳奈)

(2) 活動報告

メンバー	10 名
収穫した野菜	ミニトマト（春学期）、大根、人参、里芋（秋学期）
1 年間の主な活動内容	定期ミーティング、野菜の管理・収穫（4～7 月、9 月～12 月）、調理大会の実施（6 月・12 月）



5 月 土づくり



11 月 収穫



12 月 調理大会



5 月 ミニトマト支柱立て



12 月 調理大会



3 月 種まき（新年度の栽培に向けて）

Ⅲ. 新入生アンケート

新入生のボランティア意識とセンターの課題 「2023 年度新入生ボランティア活動アンケート」

1. アンケートの実施方法と回答者について

ボランティアセンターでは、2001 年度から毎年 4 月に新入生にボランティアへの意識などを把握するためのアンケートを実施している。開始当初から 2019 年度までは、学科ガイダンス時に対面でアンケートを実施してきた。しかし、新型コロナウイルスの蔓延により 2020 年度はアンケートを実施できなかった。そして 2021～2023 年度はポートヘボンのアンケート機能を利用して Web アンケートを実施している。

対面で実施していた頃のアンケートでは全入学者のうち 90%ほどが回答し、2,500 人前後の回答を得てきた。一方で、Web アンケートでは、最初の 2021 年度の回答率が 6.4%、2022 年度は 34.2%。そして、2023 年度は 37.9%の 1,125 人が回答していて、対面実施時に比べると少ないが、回答率を上昇させることができています。

2023 年度における回答率を学部ごとに比較してみると、国際学部が 60.1%、心理学部が 49.5%と高い。一方で、経済学部が 28.5%、法学部が 31.8%と低くなっている。この理由として学部ごとのボランティアに対する意識が異なるなど、アンケート回答者の属性による要因と、アンケートの周知の方法など、制度的な要因の双方が影響していると考えられる。

本稿では、2023 年度とそれ以前のアンケート回答を比較しながら新入生のボランティア意識とセンターの課題について述べていく。ただし、先に述べた 2021～2023 年度は Web アンケートであり、対面時アンケートのときに比べて回答率が低い。そのため、ボランティアに関心が強い学生やアンケート回答などに積極的に協力する学生に回答が偏っている。この点を注意したうえで考察していく。

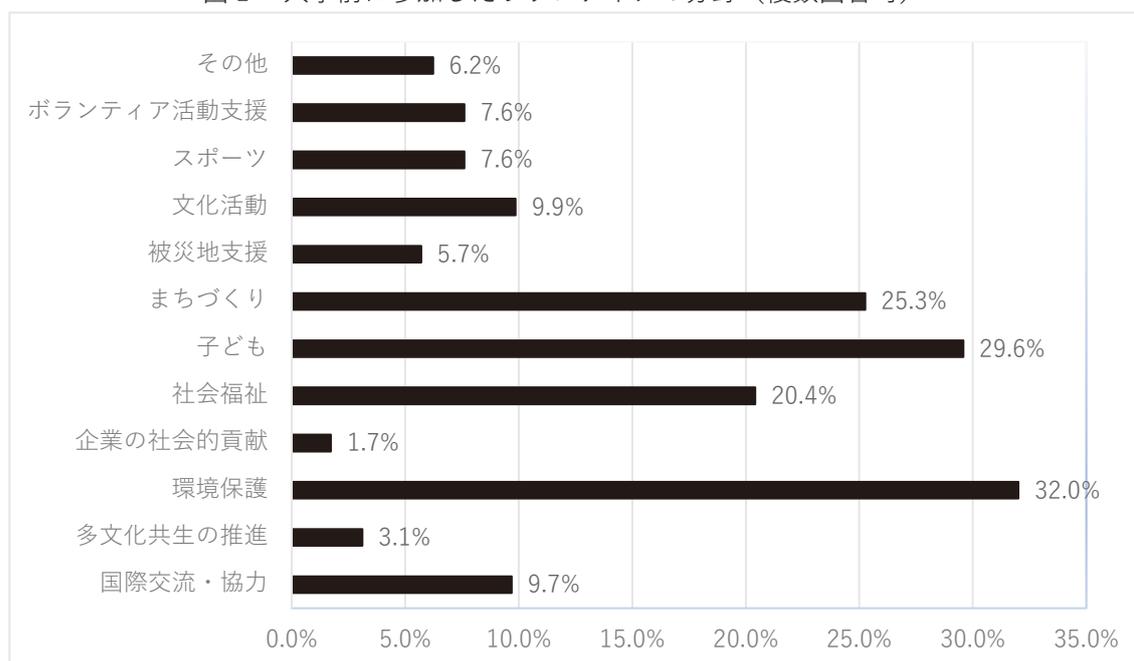
2. 大学入学前のボランティア活動

2023 年度新入生の大学入学前のボランティア活動への参加については、参加経験のある人が 51.4% (578 人)、ない人が 49.2% (553 人) である。参加経験のある人は、2021 年度が 53.9% であり、2022 年度は 52.8%となっており、比較するとやや減少している。一方で、2018 年度では 44.5%、2019 年度では 47.9%であった。入学前にボランティア活動をする学生数が、コロナ前は上昇傾向にあったが、コロナ後にやや減少傾向になっていることがわかる。

参加経験がある 578 人に、「参加したことがあるボランティアの分野（複数回答可）」を聞いた。この回答について、参加経験がある 578 人を母数として、各分野の割合を図 1 にまとめた。例年の傾向として「子ども」、「社会福祉」、「環境保護」と「まちづくり」の 4 分野への参加経験が多くなっているが、2023 年度はその中でも「環境保護」が 185 人と特に多かった。近年は SDGs や ESG などの環境保護に関するワードが社会的な課題として注目されていることなどが影響して考えられるだろう。

どのような経緯でボランティア活動に参加したかについては、「学校の行事として参加した」が 39.3% (232 人)、「自分から興味があって参加」が 37.1% (219 人)、「どちらの場合もあった」が 23.7% (140 人) であった。

図1 入学前に参加したボランティアの分野（複数回答可）



3. ボランティア活動に対する関心

「ボランティア活動を通して学ぶことに興味がありますか」という問いについて、経年のデータを図2にまとめた。2021年度に比べると2022年度、2023年度はボランティア活動を通して学ぶことに興味のある学生の割合が大幅に減少しているように見えるが、これは2021年度はコロナ禍のため、アンケート回収が一部の学生に偏っていた影響だと考えられる。コロナ前の傾向では「大いに興味がある」と「ある」を合わせた割合は70%前後で推移している。一方でコロナ後の2022年度と2023年度は興味がある学生の割合が8割付近と例年の平均と比べて1割近く高いことがわかる。

また、「ボランティアに関するニュースに興味がありますか」と聞いたところ、「大いに興味がある」が16.1%（181人）、「興味がある」が44.2%（597人）、「どちらともいえない」27.3%（307人）であった。例年と同じ傾向だが、「ボランティア活動を通して学ぶこと」に比べてニュースへの関心では、中間的な回答が多くなる。

次に、ボランティア活動の中で、新入生がどういった分野に興味を持っているのか、みていきたい。「どのようなボランティア活動に興味がありますか（複数回答可）」と聞いてみた。その結果について、母数を回答者数の1,125名として、それぞれの分野に興味を持っている人の割合を図3にまとめた。

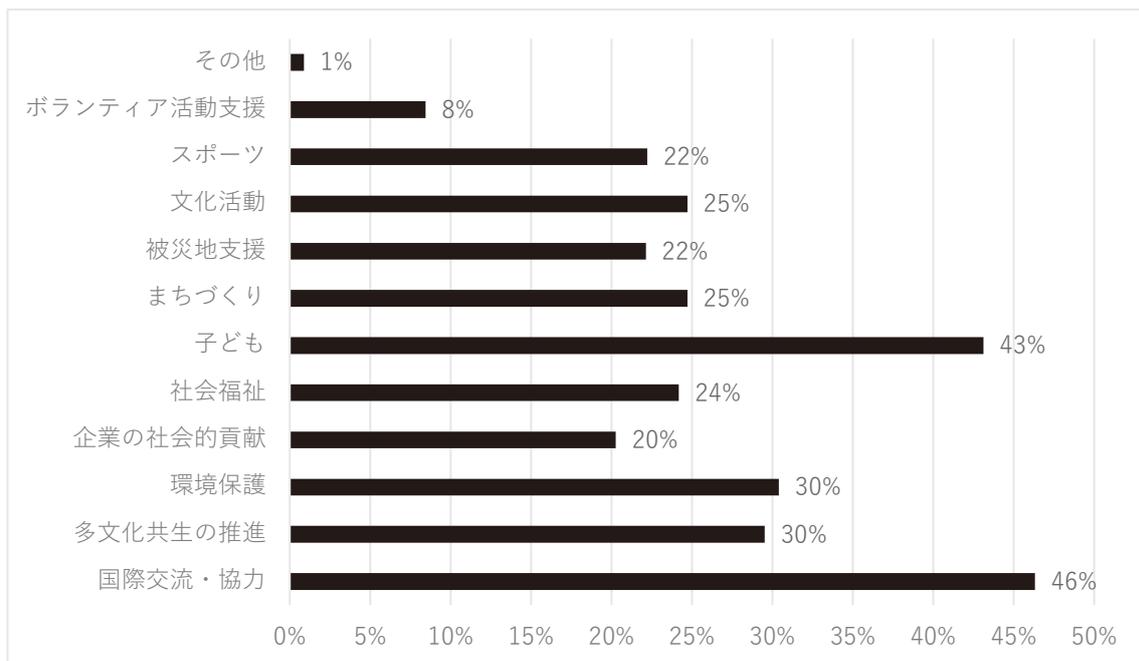
入学前に実際に参加したボランティアでは「環境保護」が最も多かったが、興味関心の先は多岐に渡っている。その中でも「国際交流・協力」や「子ども」の2項目が40%を越えている。また、「環境保護」と「多文化共生の推進」の2項目は30%以上を越えている。

また、図3で記載していないが、その他の分野として、「動物保護」や「保護犬・保護猫」、など、動物関連のボランティア活動に興味のある学生が数名いた。大学だからこそできるボランティア活動も多いだろう。ボランティアセンターとしては、学生に向けて幅広い分野のボランティアに関する情報発信や、多様なボランティアに取り組めるようサポートをしていきたい。

図2 ボランティア活動を通して学ぶことに興味がありますか

	2018		2019		2021		2022		2023 (今年度)	
	回答者数	割合 (%)	回答者数	割合 (%)	回答者数	割合 (%)	回答者数	割合 (%)	回答者数	割合 (%)
大いに興味がある	527	19.4	445	19.1	86	45.0	341	31.8	351	31.2
ある	1,320	48.7	1,198	51.5	91	47.6	534	49.9	542	48.2
どちらともいえない	645	23.8	548	23.6	8	4.2	140	13.1	149	13.2
あまりない	167	6.2	103	4.4	3	1.6	35	3.3	47	4.2
全くない	41	1.5	25	1.1	1	0.5	8	0.7	19	1.7
未回答	11	0.4	6	0.3	2	1.0	13	1.2	17	1.5
全体	2,711	100.0	2,325	100.0	191	100.0	1,071	100.0	1,125	100.0

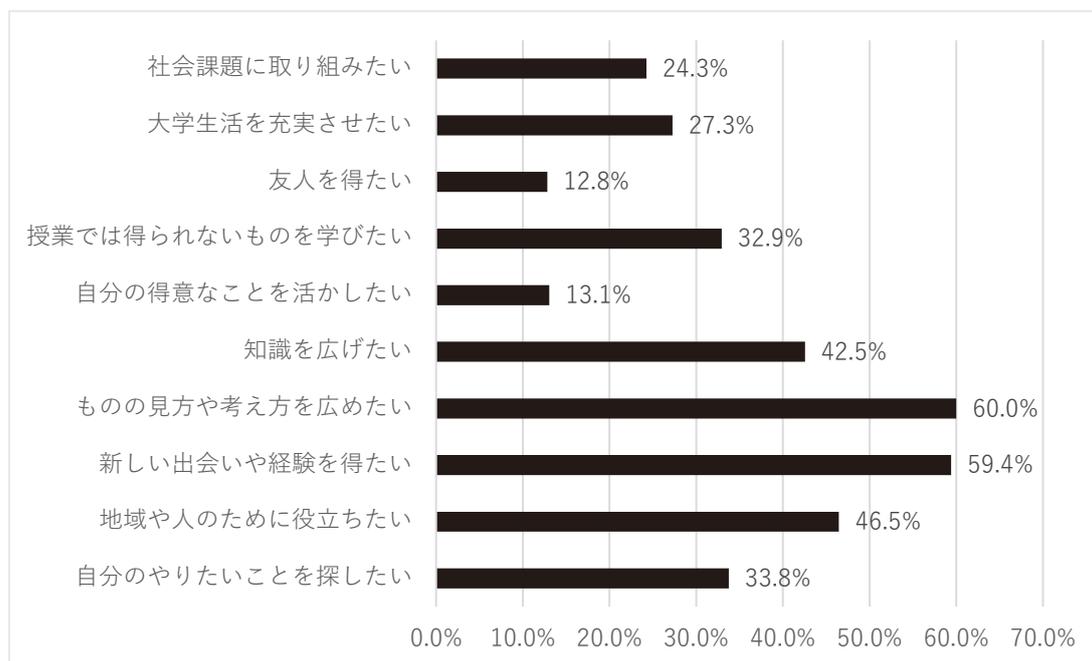
図3 どのようなボランティア活動に関心があるか



4. 大学でのボランティア活動

「大学時代にボランティア活動に参加したいですか」と聞いたところ、「参加したい」が76.9% (865人)、「いいえ」が22.5% (253人)、未回答が0.6% (7人)であった。加えて、「参加したい」と回答した865人に、「ボランティア活動に参加したい理由について教えてください (複数回答可)」と聞いた。その結果について、母数を参加したい865人としてそれぞれの項目の割合を図4にまとめた。

図4 ボランティア活動に参加したい理由（複数回答可）



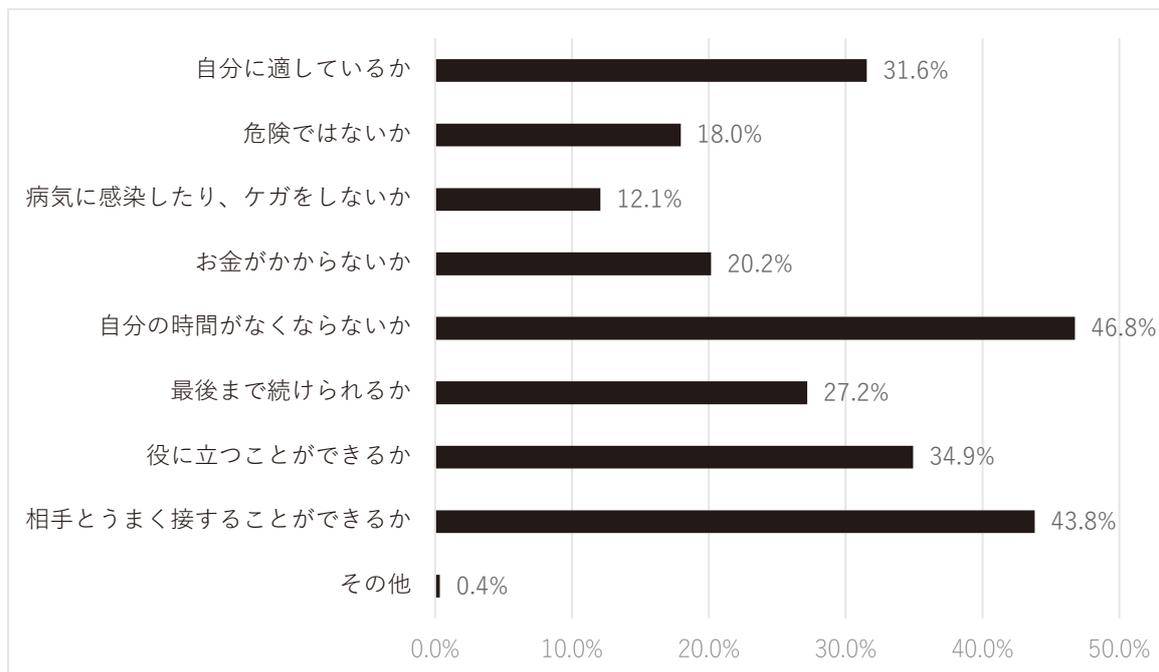
今年度のアンケートで一番高い回答率だったのが、「ものの見方や考え方を広めたい」(60.0%)であった。また例年の傾向として「新しい出会いや経験」が60%前後と高くなっているが、今年度も59.4%と多くの学生が回答していることがわかる。また、それ以外に「知識を広げたい」(42.5%)などの「自己実現型」の項目が高くなっているのも例年の傾向と同じである。それと比べると「地域の人のために役に立ちたい」(46.5%)や「社会課題に取り組みたい」(24.3%)などの「問題解決型」の動機は相対的に少なくなっている。例年も同様の傾向となっているがボランティアセンターとしては、こういった「問題解決型」の動機を持つ学生が多くなるように、外部や新入生に向けて情報発信を続けていきたい。

「どのようなスタイルでボランティア活動に参加したいですか。(複数回答可)」と聞いてみた。活動日については、「夏休み・冬休み等の長期休暇」と回答した人が620人(72%)で最も多かった。また頻度については「月に1~2回くらい」が310人(35.8%)、「2ヶ月に1回くらい」が293人(33.9%)、「一定期間に集中して」が208人(24.0%)となっており、人によってどういった頻度で参加したいのかについてバラつきがでている。内容については「一つの活動を続けていきたい」が115人(13.3%)に対して、「色々な活動に挑戦していきたい」が739人(85.4%)となっている。学生の多くは色々な活動に挑戦していきたいと考えているため、そういった学生に適した「1 Day for Others」などのプログラムの周知が重要となってくるだろう。

5. ボランティア活動に関して心配なこと

ボランティアセンターとしては、学生がボランティアに参加しやすい環境づくりをしていきたい。そこで、「ボランティア活動に対する心配なことはなんですか(複数回答可)」と聞いている。母数をアンケート回答者1,125人として、それぞれの項目について割合を図5にまとめた。

図5 ボランティア活動に対する心配なこと



「相手にうまく接することができるか」(43.8%)、「自分に適しているか」(31.6%)、「役に立つことができるか」(34.9%)など、ボランティア活動を上手くできるかどうかに関する不安を多くの人を持っていることがわかる。実際、「その他」の自由記述でも「体力に自信がなくても大丈夫か」、「ボランティア参加者に対して、どれくらいの知識量などを前提として求められているのか不安」との回答があった。また、「自分の時間がなくなるか」、「お金がかからないか」や「危険ではないか」など、自分のリソースがボランティア活動に割かれてしまうことやボランティア活動でのリスクを懸念している人も多い。自由記述では、「学業と両立出来るか」や「学校やアルバイトなどでキャパオーバーにならないか」などの回答があった。こうした不安を払拭できるように学生のボランティア活動をサポートしていきたい。

6. 明治学院大学のボランティア活動

最後に、「1 Day for Others」や「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」などの明治学院大学のボランティアについて論じていきたい。「明治学院のボランティア活動について知っていましたか」と聞いたところ、「はい」が50.0% (562人)、「いいえ」が49.6% (558人)であった。また、「はい」と回答した人に「どのように明治学院大学のボランティア活動を知りましたか(複数回答可)」と聞いたところ、「大学のホームページ」と回答した人が一番多く76.9% (432人)、「オープンキャンパス」32.4% (182人)、「SNS」10.1% (57人)と続いた。SNSでの情報発信が学生や外部の人たちに届くようにすることは今後の課題と考えられる。

1日社会貢献プログラムの「1 Day for Others」は、これまでにボランティアを経験したことがない新入生にとっては比較的参加のしやすい機会だ。一方で、「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」は、3年間かけて修了するプログラムであり、ボランティア実践と大学での学びを結びつけながら腰を据えて取り組みたい学生にとって魅力あるプログラムである。「1 Day for Othersに参加してみようと思いますか」、「明治学院大学教育連携ボランティア・サティフィケート・プログラムに参加してみようと思いますか」とそれぞれ新入

生に聞いた結果を図 6 にまとめた。

図 6 明治学院大学のボランティアプログラムに参加したいか

	1 Day for Others		ボランティア・サティフィケート・プログラム	
	回答者数	割合 (%)	回答者数	割合 (%)
参加する	89	7.9%	40	3.6%
できれば参加したい	412	36.6%	296	26.3%
内容を確認してから参加を考える	566	50.3%	704	62.6%
参加しない	46	4.1%	73	6.5%
未回答	12	1.1%	12	1.1%
全体	1125	100%	1125	100%

例年みられる傾向だが「1 Day for Others」と「明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラム」では「参加する」と「できれば参加する」の学生数は「1 Day for Others」の方が多くなっている。そして、どちらのプログラムについても「内容を確認してから参加を考える」と回答している人の割合がかなり多い。プログラムの魅力を新入生に伝えていくことが非常に重要になってくるだろう。

(ボランティアセンター長補佐 岡本 実哲)

IV. ボランティアセンター資料

1. ボランティアセンターの活動にご協力くださった皆さま

- ・ 明治学院大学校友会
- ・ 明治学院大学保証人会
- ・ 明治学院大学同窓会
- ・ 明治学院同窓会ウィメンズクラブ「くらら会」

上記皆様より、ご支援を頂戴いたしました。

2. 2023 年度委員等一覧

(1) ボランティアセンター運営委員

永野	茂洋	(副学長)【委員長】	
梅澤	礼	(文学部)	
犬飼	佳吾	(経済学部)	
金	圓景	(社会学部)	
波多江	久美子	(法学部)	
坂本	隆幸	(国際学部)	
清水	美紀	(心理学部)	2023.4.1-2023.10.10
木村	優里	(心理学部)	2023.10.11-2024.3.31
長谷部	美佳	(教養教育センター)	
坂口	緑	(宗教部長)	
小林	潤一郎	(教務部長)	
宮本	聡介	(学生部長)	
武村	美津代	(事務局長)	
猪瀬	浩平	(センター長)	
林	公則	(センター長補佐)	
岡本	実哲	(センター長補佐)	
磯野	昌子	(ボランティアコーディネーター)	
菅沼	彰宏	(ボランティアコーディネーター)	
砂川	秀樹	(ボランティアコーディネーター)	

(2) ボランティア活動推進委員

猪瀬	浩平	(センター長)
林	公則	(センター長補佐)
岡本	実哲	(センター長補佐)
磯野	昌子	(ボランティアコーディネーター)
菅沼	彰宏	(ボランティアコーディネーター)
砂川	秀樹	(ボランティアコーディネーター)

(3) ボランティアセンタースタッフ

猪瀬	浩平	(センター長)
林	公則	(センター長補佐)
岡本	実哲	(センター長補佐)
高橋	千尋	(次長兼課長)
磯野	昌子	(ボランティアコーディネーター)
菅沼	彰宏	(ボランティアコーディネーター)
砂川	秀樹	(ボランティアコーディネーター)
菊池	範子	
青木	洋治	
杉山	佳奈	
近藤	なつみ	
永島	莉沙	

3. ボランティアセンター 2023 年度基本方針

ボランティアとは、人びとが、小さい声、弱い声に耳を傾け、大きな力に頼ることなく、この世界を、他者と共に生きるために自ら行うはたらきである。あらゆる職業、研究・学習、日常生活の中にボランティア・スピリッツは存在している。社会生活の多様な場面で他者への貢献を考えることのできる人格(人間)を育てることが、本学の教育理念である。

この教育理念を具現化するために、ボランティアセンターは、学内外のあらゆる関係者が「他者への貢献」について考え、実践し、交流する場を提供する。それによって、一人一人が社会課題と出会い、向き合い、共に考えるなかで、市民として成長し、誰もが生きやすい方へ社会を変えていくことを目指す。

2023 年度は学生活動の活発化を受けて、ボランティアセンターの人と人、人と現場とをつなげる役割の一層の充実を図る。横浜校舎では、ボラセン内外のスペース(ラウンジ、コラボ、ガーデンなど)を活用した学生の活動や、教職員、そして地域の方々と連携した活動を活発化させる。来室者が伸び悩む白金校舎では来室者を増やすための機能を見直していく。また昨年度から本格的に始動した、明治学院内の中高大連携では、ボランティアセンターが実施してきたプログラムを、有効な形で明治学院の中高生に提供するための方策を引き続き検討する。

以上を踏まえて、次の 4 点を 2023 年度の基本方針とする。

1. 本学学生、教職員全員のボランティア活動への参加促進と支援

ボランティア活動への参加を促進し、積極的に支援するための方策として、以下の 5 点を行う。

① 社会課題に出会う場の提供。「1 Day for Others」や「ボランティアカフェ」の実施。「1 Day for Others」については、一つひとつのプログラムの質の向上を図る。教職員・学外協力者と連携したプログラムづくりを引き続き行うとともに、協力者を拡大するための「1Day 作り方マニュアル」を整備する。

「1 Day for Others」については、新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえながら、対面、オンラインを適宜使い分け、一つひとつのプログラムの質の向上を図る。教職員・学外協力者と連携したプログラムの創生を引き続き行うとともに、協力者を拡大するための「1Day 作り方マニュアル」を準備する。

② 「社会課題に出会い・向き合う場」の提供。「いつボラ」、「ボラチャレ」、外部資金調達等による活動を促進する。「いつボラ」、「ボラチャレ」の利用を一層拡大するため、留学生などこれまで活用しなかった層の学生に対する広報を行うとともに、学生の利用しやすい形になっているか随時見直しを行う。教職員に利用が開かれた「いつボラ」についても、適宜、情報発信とニーズ把握を行いながら、支援の在り方を検討する。

③ 学生+教職員、教職員のみなど多彩な組み合わせによるボランティア活動が生まれることを目指して、情報発信を行うとともに、活動を具体化するため企画段階から支援を行う。

④ 学生による学生支援の展開を促進する。そのために、学生自らがボランティア活動を活性化、支援するための組織作りを行う。ボランティアセンターのスタッフだけでなく、学生自身が議論に参加し、ボランティアセンターの場としての充実や、学生による学生の支援の方法を考える。

⑤ 教職員との協働を一層深めていくために、運営委員・活動推進委員と緊密に連携するとともに、授業や研究への支援や、ボランティア・市民活動についての情報提供を積極的に行う。ボランティア・市民活動にかかわる研究・教育・実践を行っている教職員と連携して活動するためのネットワークを構築する。特に今年度は、白金校舎での教員との連携の活発化を目指すとともに、活動推進委員の役割について整理する。

2. ボランティア実践と大学の学びの融合の活性化

明治学院大学教育連携・ボランティア・サティフィケート・プログラムを「社会課題に向き合い、考え、自分が変わる・社会を変える場」と位置づけ、より多くの学生が学びを深めるため、さらに充実させる。そのため、ボランティア活動の一層の深化を目指した支援に加え、最終報告書に学部の独自性を活かし、学びの深化が見えることを目指した仕組みづくりを行う。サティフィケート修了学生が、学習・実践をさらに発展させる場として、ボランティア大賞にチャレンジするなど、サティフィケートを修了した学生・卒業生が学びの成果を共有する場を広げていく。認証方法のスリム化についても検討する。

3. ボランティアセンターの交流・活動・研究の場としての機能の充実

スタッフの専門的知識を高め、センターの以下の4つの機能の一層の充実を図る。

① 学生のボランティア活動支援機能

- ・ボランティアをしたい人と、ボランティアを必要とする現場を結び付け、双方にとって意味のある活動を生み出す
- ・作業・ミーティングスペース・収納スペースを提供し、ボランティアを行う人びとの出会いと交流の場としての活用を図る

② 教員との連携機能

- ・正課の授業支援や教員の研究支援を通してボランティアセンターの活用を促進する
- ・教員の研究知見をボラセンのプログラム開発に活かす

③ 学内外の情報発信・交流機能

- ・学内のボランティア活動情報や、学外で団体登録を経た団体・機関からのボランティア情報を提供する
- ・ボラセン内外のスペースを活用し、明治学院内外の関係者が協働する活動を提供する

④ 本学のボランティアを深化させるための研究機能

4. ボランティアセンターにおける活動の発信・広報の強化

社会に対する説明責任を果たし、活動を活性化するために、学内他部署と連携しながら、ボランティアセンターの活動について、ホームページ、SNS、映像、リーフレット、報告書オープンキャンパスなどを利用して広く情報を発信する。多様な学生、教職員に十分な情報保障ができるよう、引き続きアクセシビリティを十分に意識する。

以上の活動を創造的に実行するため、ボランティアセンターのスタッフが立場を超えて活発に議論する場を保障するとともに、働きやすく、働き甲斐のある職場環境をつくりだす。

4. 明治学院大学ボランティアセンター規程

2001年 7月18日	大学評議会承認
2004年 5月19日	大学評議会承認
2004年10月20日	大学評議会承認
2005年10月 7日	常務理事会承認
2005年12月 9日	常務理事会承認
2006年 1月13日	常務理事会承認
2006年 7月14日	常務理事会承認
2010年 3月12日	常務理事会承認
2014年 3月14日	常務理事会承認
2018年 5月11日	常務理事会承認

(設置)

第1条 明治学院大学(以下、「本学」という。)に明治学院大学ボランティアセンター(以下「センター」という。)を置く。

(目的)

第2条 センターは、共通教育機関として、「他者への貢献」(Do for Others)の精神にのっとり、ボランティア活動を通じた人間教育を行うことを以て目的とする。

(業務)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、以下の業務を行う。

- (1) サービス・ラーニングプログラムの企画、実施
- (2) 学生等に対するボランティアの立ち上げなど、学生の自主的活動の支援と助言
- (3) 地域や国際社会への貢献を目指し、社会との協働によるボランティアプログラムの開発
- (4) 学内外のボランティア活動に関する情報収集と学生への提供及び相談への対応
- (5) 教職員への情報提供とボランティア活動参加に関する機会提供
- (6) 本学におけるボランティア関連科目に関する協力
- (7) その他、学生等のボランティア活動の促進に必要な業務

(活動)

第4条 センターは、第2条の目的を達成するため、以下の学生の活動を支援する。

- (1) キャンパス周辺の地域に貢献する活動
- (2) ボランティア入門プログラムに伴う活動
- (3) 地震、津波、台風、洪水など自然災害に伴う被災地支援活動
- (4) 海外でのボランティア等に関する活動
- (5) 学外の人道支援機関、特定非営利活動法人(NPO)、企業等との連携活動
- (6) ボランティア参加への啓発活動
- (7) その他

(運営委員会規程)

第5条 センターの組織および運営に関する重要事項を審議するため、明治学院大学ボランティアセンター運営委員会を置く。

2 センター運営委員会規程は、これを別に定める。

(構成)

第6条 センターには次の職員を置くことができる。

- (1) センター長 1名
- (2) センター長補佐 若干名
- (3) ボランティアコーディネーター 若干名

- (4) 非常勤ボランティアコーディネーター 若干名
- (5) 事務職員 若干名
- (センター長)

第7条 センター長は本学専任教員の中から、学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 センター長は、センターの業務を統括する。

(センター長補佐)

第8条 センター長補佐は、本学専任教員の中から、センター長の推薦に基づき学長が任命する。その任期は2年とし、再任を妨げない。

2 センター長補佐は、センター長の業務を補佐する。

(ボランティアコーディネーター)

第9条 ボランティアコーディネーターの任用等は、「ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

2 非常勤ボランティアコーディネーターの任用等は、「非常勤ボランティアコーディネーター任用等に関する規程」による。

(評価・評価委員会)

第10条 ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長の設置する評価委員会による評価を受ける。センター長は、その結果を学長に報告する。

2 非常勤ボランティアコーディネーターは、契約更新時にセンター長が設置する評価委員会による評価を受ける。センター長はその結果を学長に報告する。

3 前2項に基づき設置する評価委員会は、副学長、学生部長、センター長、センター長補佐、大学事務局長、その他センター長が指名し運営委員会の承認を得た者から構成する。

(活動推進委員会)

第11条 センターに、その事業の円滑な遂行を図るためボランティア活動推進委員会（以下「推進委員会」という。）を置く。

2 推進委員会は、センター長の諮問に応じて助言または提案を行い、推進委員によって構成される。

3 前項の推進委員は、ボランティア活動に識見を有する専任教職員、学生等、およびボランティア活動についての学外の有識者・実務家（若干名）からなり、その任期は2年とし、再任を妨げない。専任教職員にあっては、所属長の推薦により、その他の者にあっては運営委員会の議を経て、センター長が委嘱する。

4 センター長は、必要に応じて推進委員以外の者を陪席させることができる。

(学生メンバー)

第12条 センターの業務の遂行にあたって、センター長は、学生の参加と協力を求めることができる。

(規程の改廃)

第13条 本規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て大学評議会および常務理事会の承認を得なければならない。

付 則

1 この規程は、2001年7月18日から施行する。

2 この規程の施行により、「明治学院大学ボランティア・センター暫定規程」は廃止する。

3 2002年4月1日一部改正施行（第3条第2項、教養教育センター設置による。）

4 2004年4月1日一部改正施行（第3条法務職研究科設置および委員にセンター長補佐追加による。）

5 2004年8月1日一部改正施行（第4条ボランティア・コーディネーター、事務職員数の変更による。）

6 2005年11月1日一部改正施行（第7条ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新

- 設による。第8条評価・評価委員会、新設)
- 7 2006年1月1日一部改正施行(コーディネーターを運営委員会委員とする。非常勤コーディネーターを新設する。)
 - 8 2006年1月1日一部改正施行(第7条2項非常勤ボランティア・コーディネーター任用等に関する規程の新設による。)
 - 9 2006年4月1日一部改正施行(第3条事務局職制変更による)
 - 10 2010年4月1日一部改正施行(基本理念作成委員会の答申に基づき、第2条目的および第3条業務を見直し、第4条運営委員会規程を別途新設し本規程から削除、第5条センター長補佐の人数を変更、第7条センター長補佐は専任教員の中から選する、第9条2項に非常勤ボランティアコーディネーターの評価を明記、3項の評価委員会構成メンバーにセンター長補佐を追加、第10条4項推進委員会参加メンバーを弾力化する条文を追加)。
 - 11 この規程は、2014年4月1日から施行する。(第3条3項、第4条学生の活動内容の追加、第5条3項の削除、第11条2項、第11条3項推進委員の学外有識者・実務家を2名から若干名へ変更、第12条見出し変更)
 - 12 この規程は、2018年5月11日から施行する。(第6条ボランティアコーディネーターの人数変更、第10条評価を受ける周期の変更)

明治学院大学ボランティアセンター報告書 第20号 2023

発行 2024年6月

発行者 明治学院大学ボランティアセンター

〒108-8636 東京都港区白金台 1-2-37

明治学院大学白金キャンパス 10号館 1F

TEL 03-5421-5131 FAX 03-5421-5144

〒244-8539 神奈川県横浜市戸塚区上倉田町 1518

明治学院大学横浜キャンパス 4号館 1F

TEL・FAX 045-863-2056

E-mail voluntee@mail.meijigakuin.ac.jp

https://www.meijigakuin.ac.jp/volunteer_activities/

印刷 山口北州印刷株式会社

本報告書の一部または全部を無断で複製、転載、販売、
ネットワークにより転送することを禁じます。

